

鬼殺の海柱

ゴマぷりん(柔らかめ)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は大正。

悪鬼滅殺を掲げる鬼殺隊の柱が一人・『海柱』の鳴滝瑠璃子。たわわでゆったりお姉さんな彼女には秘密があった。

瑠璃子は——嘗て平和な世で『保育士』としての人生を送っていたと言う、ぶっちゃけ『テンプレ転生』を果たしていたのだ！

これはフラグ一級建築保育士、またの名をよしよしお姉さん・瑠璃子が、残酷で優しい、血塗れで愛に溢れた世界で仲間達と生きて、年下をよしよしして、鬼を切る話。

なお、最初は「※短い注意書き」を見て頂けると有難いです。

後、ちよくちよく話の内容が変わっていたり、追加されたり、削除されたり、順番が変更になったり、題名が変更する事が起きますので、ご了承下さい。

※11月8日 書き直し完了しました！

目次

※短い注意書き	1	恋	104
第一章 元保育士の転生		第六話 紫陽花瑠璃、叶え偲ぶ	1痛
序章 とある隠による調査内容		叫	119
5		第七話 紫陽花瑠璃、叶え偲ぶ	1永
序章二 俺の素敵な姉弟子	14	愛	146
第一話 おはよう、お姉さん	35	第八話 乙女の休日	170
第二話 海の呼吸と出発	59	第九章 新しい弟弟子とは	189
第三話 柱三人娘のがーるずとーく	83	第二章 鬼連れの剣士と海柱	
第四話 瑠璃子と獺岳	92	マテリアル風キャラクター設定	
第五話 紫陽花瑠璃、叶え偲ぶ	1恋	207	
		第十話 瑠璃と赫灼	219
		第十一話 隠の柱	235

※短い注意書き

※小説を読む前の短い注意点

先ず最初にこの注意書きを読んで下さり有難う御座います。貴方はとってもいい人です。

そして第一に、この小説には

- ・『多大なる捏造』
- ・『主人公が女の子』
- ・『主人公がフラグ一級建築士（所謂愛され要素）』
- ・『主人公が転生者』
- ・『原作死亡キャラの生存』
- ・『誤字・脱字が多い』
- ・『オリジナルキャラが若干多い』
- ・『原作キャラとの恋愛要素』

等の複数の地雷がセッティングされています。軽い気持ちで踏んだらボンツ！です。

貴方の心の平和が乱れます。地雷の上でのタップダンスなんてとても危険です。やめましょう。

何より『時間軸』が合いません。だって鬼滅つてある程度の時間軸しか分かんのです。なので、『捏造多め』です。ワニ先生、表を作つて下さいお願いします。

其の為、上記の『基本七大地雷』をお持ちの方は引き返しましょう。そしたら貴方の心の平和は保たれます。ネコチャンの画像を見て、平和になりましょう。人類はネコチャンの奴隷なのです。

特に『一級建築士な女主人公』。此処にしましては性別関係無く愛されてるぜつて感じます。百合がぶわりと咲きほこれば、普通の友情もある。何と言う事でしょう、人間の欲望とは恐ろしい。オーテリブルテリブル。

『原作キャラのキャラ崩壊』もある可能性が大いにあります。ソーテリブル。

解釈違いは無論誰にでもあるとは思いますが、『あ、この書き手は自分と解釈が違うぞ』と思つた其処の方、バックしましょう。はい、バックバック。

後『原作キャラの生存要素』。此処はメンタルよわわ書き手が『おんぎやあおんぎやあ』と原作とアニメ見て泣いて、辛さを抜け出す為に追加してます。

だつて書き手は生きてる姿を見たかつた。キリッ

一種の『鬼滅の世界観にとてもよく似たパラレルワールド』だと思つて見ると楽かも

です。

次に『転生』。と言っても流行りの転生チート系ではありません。嫌いでは無いですが、好きな方です。ただ書き手はそういうの書けないから。実力不足だから。未熟！

大正時代に合わない現在用語が出てくる事もあるので、注意が必要です。

後、鬼舞辻はパワハラ上司。これは皆判つてると思います。パワハラ反対！ブラック反対！惨殺反対！……無理ですね。だって鬼舞辻だし。

もし、其れでも良いよ！地雷なんて気にしないよ！と言う屈強なマツスル戦士の皆さま。読んで頂けると大変有難いです。ハッピー過ぎて、小躍りしちゃいます。ズンズンチャツ！ズンズンチャ！

また感想に關しましては、此れを書いている人間のメンタルがよわよわのしわしわなので、苦情を受けつけられませんか。此れはご了承下さい。

褒められると嬉しい、感想も貰えると嬉しい、単純なヒューマンなのです。後、誤字脱字報告も嬉しいです。書き手はとっても見落としやすいので。

さて、短い注意書きでしたが、大丈夫でしたか？

もし、大丈夫なら好きなお話から読んでみてください。一話から順番に見るのが好きな方は順番に見てください。過去とかあるならね！

以上、書いている人からのお願いでした。

第一章 元保育士の転生

序章 とある隠による調査内容

あ、先輩お疲れ様です。急に何ですか？

え？調査……？何の調査なんです？何処かに鬼でも出たんですか？

違う？……『海柱』様の調査……？え、海柱様って最近柱になったあの海柱様ですよ？先輩、顔をご存知なんですか？知ってるんだ、凄いですね先輩。

ところで先輩、そんな青の布持ってましたっけ？此れは気にするな？あ、はい判りました。

あの……調査って具体的に如何すれば？

……え、海柱様以外の柱に聞いてこい……？

む、無理ですよ無理無理無理!!だつて柱ですよ!!個性強すぎて隠でも苦勞している柱ですよ!!絶対聞けませんって!!出すのは何時でも良いって言われても!!

なっ!!給料下げるぞって職権乱用じゃないですか!!や、やめろお!俺の給料に手を出さないでくれえ!!!やりますよ!やれば良いんでしょうが!!!!

……くっ!給料を人質に取られちゃあ仕方なし…。ちくせう。

……………骨が、残ると良いなあ…。

*
*

『 隠 ○○による 海柱様 調査報告書 』

某月某日 とある屋敷にて 天気 快晴

『む?海柱についてか?何故そんな事を聞く?成程、先輩に言われたか。ならば仕方あるまいな!職務を全うするのは大事な事だからな!』

そうだな、彼女は——とても美しい。見た目と言うより、其の背筋がな、真つ直ぐで美しいのだ。無論、剣技も美しい。あの瑠璃色の刀身が呼吸と共に振るわれる瞬間は息を呑むぞ!一度は見てみると良い!

其れと彼女に会うならばこう伝えて欲しい。「何時になつたら俺に嫁いでくれるのか？」と!」

某月某日 蝶屋敷にて 天気 小雨

『あの人について聞きたい?…:そうですか、先輩に言われたんですね。其れはご苦労様です。』

先ず、私から見た彼女が文字通り『海』の様な人。怒りも苦しみも喜びも何でも呑み込んでしまう大きな海です。次に思うのは『愚か』。え?悪口では無いですよ?むしろ褒めていゝんです。だってあの人には自分の命を軽く見ていて、他人の命の方が大事なんです。それから、然も、傷付く事も、私に向かつて苦では無いと言っているんですよ?可笑しいですよ?

…:まあ、其の愚かさが私達を救ってくれているんですけど。其れと、彼女に会ったら伝えてください。「いい加減飲み薬をちゃんと飲みなさい」と』

某月某日 大滝のある某所にて 天気 曇り

『む、海柱についてか。…:優しく、穏やかな子だと見えずとも判る。海の様には万人を受け入れる。然し、何時か心を病み、壊れてしまえば彼女の方が溺れてしまふだろう…。南無阿弥陀仏。』

…:だが、優しい子なのは本当だ。必死で私の誤解を解き、あの子の冤罪を証明してく

れた。誰かの為に走れる彼女を私はとても好ましく思う。

若し、彼女に会うなら伝えては貰えないだろうか？「先日、子猫が生まれたので継子と一緒に見に来て欲しい」と』

某月某日 何故か縄がいつぱいある某所にて 天気 雨

『海柱についてだと？何故俺が答えねばならん。上司命令？ふざけるな、そんな事で使い通りにされるとは…。お前、舐められているな。愚か者め。』

まあ良いだろう。今の俺は多少機嫌が良いからな。海柱を一言で言うなら「お人好し」だ。鬼にすら憎しみを持たない。馬鹿な人だ。…だが、実力はある。其処だけは認めてやつても良い。…：…あと、笑うと甘露寺と同じく可愛い…：…おい、貴様何故ニヤニヤと笑っている？縛るぞ。鐮丸一発お見舞いしてやれ。

…：貴様、海柱に会いに行くのか？ならばこう伝えろ。「いい加減にしないと身を滅ぼす事になるぞ」と』

某月某日 三人の女性の声が聞こえる某所にて 天気 星がいつぱい

『海柱？彼奴の事か？へえ、先輩がねえ…。良いぜ、俺様が教えてやる。敬えよ？』

彼奴は派手に悪うい女だ。あ？そうじゃねえよ。良い意味で悪い。見た目つて言うより中身がな。素直で、ころころ表情が変わりやがる。何より欲しい言葉をくれる。其処が派手に意地悪くてな！然も弱みは全く見せない。底無し沼の様な、いじらしい奴。

彼奴に溺れてる奴を何人も知ってるぜ?……まあ、俺も地味に片足突っ込んでるか。…
何でもねえよ!

そうだ、彼奴に会うなら伝言頼むわ。「嫁達の飯を食いに来い」ってな!」

某月某日 とある竹林にて 天気 曇天

『てめえか?あの人の事聞き回ってるって言う隠はア?あ?先輩命令で給料人質に取られてるから仕方なくだア?知るか!其の先輩とやら此処に連れて来いやア!……家族への仕送りが少なくなるから出来ない?……チツ、しゃあねえ。答えてやるよ。』

あの人は甘過ぎる。鬼に慈悲をかけて何になると何度も言ってるが、へらへら笑って誤魔化しやがる。…だがなア、悪い人じゃねエ。其れだけは言える。

「そう言えばこの前髪紐渡してましたよね」?だア?……何見てんだてめえ!!!死ねやア!!!

俺から生き残ったらあの人に伝える!!「誰かを守って死ぬな」ってなア!!!」

某月某日 とある池の畔にて 天気 曇り時々晴れ

『海柱……誰だっけ……あ、この前挨拶してくれた人……かな?女の人だった様な……?「多分その人です」?そっか。俺は直ぐに忘れちゃうけど……あの人はいい匂いする事は今でも覚えてる……あと柔らかい……。甘い……あ、あの花の名前……何だけっけ?……金木犀……?……そう、あれと同じ匂いがある……。……好きか嫌いかって言われたら僕は好きな方だよ……。』

……何の話してたっけ……海柱……あの人は優しいよ……

伝言……?なら……「今度おやつ食べよう」って言っておいて……何の話だっけ?」

某月某日 とある飲食店にて 天気 快晴

『海柱ってあの人の事ね!良いわよ、教えてあげるわ!とつても素敵な人よ!笑顔の時も戦っている時もキュンキュンするの!其れにね、私が沢山食べちゃう事を気にしていたら、「いっぱい食べる女の子って可愛いと思うけど」って真正面から言ってくれて!きやー!私、嬉しくて嬉しくて思わず抱き付いちゃったの!其れでも優しく受け止めてくれて!キュンキュンしっぱなしだったわ!貴方もきつと好きになるんじゃないかしら?』

あ、もしあの人に会うなら伝えてもらえる?「今度しのぶちゃんと三人でお出かけしましょう」って!』

某月某日 ある定食屋にて 天気 雨 追記:この柱は二人組なので記述が他より多くあります。

『何故あの人の事を……先輩命令で、か。そうか、すまないな、睨んでしまつて。座ると良い。話をしよう。』

そうだな、あの人は世話焼きだ。隣にいる義勇の世話を昔からよく焼く。俺達が先生の所にいる時からずっとだ。まあ、義勇がぼやぼやしている所為もあるがな。

何より、あの人は人を伸ばす天才だと俺は思っている。相手を褒めると言う一点に関しては俺も義勇も、先生ですら勝てない。…其の所為で俺の敵は多いがな…ッ！剣術も女性とは思えない程、力強く、其れでいて流麗。努力をした証拠だろう。…何？風柱がこの前一緒にいた？…：…そうか、其れはちよつと話をしないといけないな…」

『（俺達に）優しい。（俺よりも）強い。（とても美味しい鮭大根を作る）天才だ』

『おい、義勇。何か違うかないか？俺の気のせいかな？』

『とても好きだ』

『おお、珍しくきちちんと本心を言えたなお前。…んっんっ！兎に角、柱として相應しいと思うぞ。ん？あの人に会うのか？ならば伝言を頼みたい。そうだな…「今度真菰も連れて先生の所に里帰りしよう」とな』

『（ずるずるずるずる）』

『義勇、うどんを喉に詰まらせるなよ』

あ！
 ……な、何とか生き残ったぞ、俺!!これで給料も仕送りも減らさずに済むぞ!つしゃあ!

其れにしても海柱様つて女性だったんだな…。初めて知ったわ。

あと、炎柱様は何か圧が凄かったぞ…。何だ？嫁ぐつて？眼力強すぎだわ。…付き合つて…はいないだろうな。風柱様と水柱様その一の反応を見る限り。

話を纏めるとかなり優しい人らしいけど…本当か？

…柱の皆様には伝言頼まれたし、会いに行かねば…。行かねば俺の胃が死ぬ。

…。

…あ、あれが海柱様の屋敷か。思ったより小さいな。もつとでかいのかと思った。

あ、金木犀の木がすげえ生えてる。霞柱様が言っていた金木犀の香りつて、此れが生えているから匂いが移ったのか…？くんくん。めっちゃ良い匂いする。いっぱい生えてるのに匂いも全然きつくない。あ…癒される…。

あつ！そうだ、伝言伝言。

コンコン。

すみませーん、海柱様はいらっしゃいますかー？

「はーい。何方ですかー？」

あ、隠です。柱の皆様からの伝言……を………え、思ったより若いぞ。

「あらまあ、こんにちはは、隠の人。何時も私達の任務の処理とか雑用をしてくれて有難う御座います。よろしければお茶でも如何ですか？」

あつ、ちゆき。

序章二 俺の素敵な姉弟子

俺には、とても素敵な姉弟子がいる。更に兄弟子が二人と姉弟子がもう一人いる。

彌豆子が鬼になって、最初に出会ったのが一人目の兄弟子・富岡義勇さん。

其の富岡さんの紹介の元、訪れた鱗滝さんの所で俺に修行をつけてくれた兄姉弟子・
錆兎と真菰。

そして二人と出会った後に会ったのが、瑠璃子さんだった。

今日は瑠璃子さんのお誘いを受けて、彼女の屋敷へと向かっている。

彌豆子は何時もと同じ様に背負い箱の中にいるけど、大好きな瑠璃子さんの所に行くからか、さつきから箱をカリカリ引つかいている。嬉しい気持ちの匂いがする。早く会いたくてしょうがないんだな。俺も早く会いたいよ。

鬼殺隊最高峰剣士の称号・柱。其の一人である海柱の鳴滝なるたき 瑠璃子さんるりこ。その人が、

俺の素敵な姉弟子だ。

四人の兄姉弟子の中で、一番最後に出会った人。錆兎と真菰と出会った後に、ふらりと現れた瑠璃色の髪がとても綺麗な人。其れが瑠璃子さんだった。

岩が斬れなくて、錆兎にも勝てない日々を過ごしていた時にやってきたその人を見た時、なんて穏やかな人なんだろうと思った。

柔らかな金木犀の香りに混じって、縋りたくなる様な、甘えたくなる様な、優しくて懐かしい匂いが瑠璃子さんからした。

瑠璃子さんは、其の匂いと同じで本当に優しい人だった。

稽古の後に何時もおにぎりを作ってくれて、頭を優しく撫でて、優しい笑顔で『頑張ったね』って褒めてくれて。

俺は、瑠璃子さんの優しさが無かったら、折れていたかもしれない。いや、確実に折れていた。

——八つ年上の女性に失礼かもしれないが、母親の様だった。

だから、俺は縋ってしまったのかもしれない。死んでしまった母さんと重ねてしまったのかもしれない。

俺は鱗滝さんの所に来るまでの話を口にしてしまった。瑠璃子さんは嫌な顔一つせず、話終わるまで、ずっと隣で聞いていてくれた。

そして俺は彼女に抱きしめられた。——『頑張ったね』の一言を言われて、俺は泣

いた。

本当に辛かった。苦しかった。寂しかった。泣き叫ぶ俺を、瑠璃子さんは決して離さなかつた。

其れから、俺は瑠璃子さんの事がもつと大好きになつて、いつか瑠璃子さんを守れる様な剣士になりたいと誓つた。

……それでも、俺は何時も自分の未熟さを、嫌でも思い知らされる。俺が未熟だから、瑠璃子さんは怪我をしてしまう。この前の無限列車の時だつてそうだった。

……ああ駄目だ駄目だ！

今日は折角、忙しい瑠璃子さんが招待してくれたんだ！こんな暗い気持ちで会うなんて失礼だぞ、炭治郎！

両頬をペしペし叩いて、気持ちを切り替える。うん、大丈夫！

気持ちを切り替えて、瑠璃子さんのお屋敷へと向かう。

屋敷に近づく度に金木犀の香りが強くなつていつて、一番強くなつたのはお屋敷の玄

関前まで来た時。

瑠璃子さんのお屋敷には幾つかの金木犀の木が植えられている。今は咲く時期じゃないけれど、其れでも香りが漂っているから、隠の人には「金木犀屋敷」と呼ばれているそうだ。

すると、俺の気配に気づいたのか、『彼』がやってきた。

「あつ！・正宗！・」
まさむね

「わん」

すたすたと軽い足取りでやってきたのは、お屋敷の番犬である大きな犬・正宗だった。

正宗は俺の足元まで来ると、挨拶をしてくれた。相変わらずとつても賢いなあ。

正宗は瑠璃子さんが拾ってきた、元野良犬らしい。

なんでも元々大きな山で一匹で暮らしていたが、鬼に襲われてしまい、其処を瑠璃子さんに助けられたそうだ。其れに恩義を感じて付いてきたって瑠璃子さんの鎧烏が言っていた。

襲われた際に右目をやられてしまい、今は見えないそうだが、其の隻眼が戦国時代の將軍・伊達正宗に似ているそうだから、正宗と名付けられたそう。

其れにしても、やっぱり大きいなあ、正宗。俺が知っている犬よりも大きいぞ？

瑠璃子さんは雑種の子だと言っていたが、絶対にそうじゃないと思う。だって匂いが

狼そのものだ。善逸も伊之助も狼だと言っていたが、瑠璃子さんが良いなら良いかつて事で黙ってる。だって瑠璃子さんが困る所、俺も彌豆子も善逸も伊之助も見たくないし。

正宗も瑠璃子さんが好きだから、狼でもきちんと良い子にしているし。番犬だつきちんとしている。この前、町で泥棒をやっつけたそうだ。えらいぞ、正宗！

そんなとつてもえらい正宗の案内で、俺は瑠璃子さんの元へと向かった。

屋敷の中に入り、正宗についていくと、とある部屋の前で彼は止まった。くいつと口で開けろと言う仕草をする。俺は正宗に従って、戸を開けた。

中には瑠璃子さんが座っていた。今日は非番だそうで、服も隊服ではなく、着物だった。

既に俺以外の客人も来ていた。見知った顔だった。

「瑠璃子すわあくん！今日もとても綺麗ですう〜！」

「あらあら、善逸ちゃん。今日も元氣ね」

「瑠璃子さんを見たら誰でも元氣でますよおー！うへへへ」

善逸だった。ちよつと遠くでも判るくらい、顔がちよつと気持ち悪い善逸だった。

ぐねぐね動いて、瑠璃子さんに話しかけてる。話しかけられてる瑠璃子さんはここにこ笑っていた。楽しい気持ちの匂いがした。

善逸には年上の瑠璃子さんがとても眩しく見えるらしい。瑠璃子さんは善逸の事を可愛いと言う。

其れはきつと年下で、俺と同じ様に弟の様で可愛いと言っているのだと思う。

でも、其れに気づいていないであろう（或いは分かった上で）善逸の顔はもうどつろどろのデレデレで、変な笑い声が出る。

こらっ、恥を晒すんじゃない！ほら見てみる！正宗でさえ呆れているぞ！
でも、瑠璃子さんに善逸が近づく時には大体この人が邪魔をする。

「おいカステめえ、なに姉御前に近づいてんだ!?!」

「んげえ!?! 獺岳!?!」

善逸の首根っこを掴み上げたのは、善逸の兄弟子で瑠璃子さんの継子の獺岳だった。何故呼び捨てかと言うと、彼が其れで良いと言ってくれたからだ。

獺岳は何かと善逸の事を「カス」だとか言うけど、確かに苛立っている匂いはしているけど、心の底から嫌いでは無いみたいだ。でもやっぱりイライラしてる。獺岳はとっても怒りんぼなんだ。

「幾ら、姉御前が強く美しく優しいからと言って易々と近づくんじゃねえよ！近づいて

良いのは俺か正宗か女性陣だけだ!!」

「女の子は判るけど、何でお前は良くて俺は悪い訳え!?!ずるいじゃん!継子ずるくない!?!俺も瑠璃子さんの継子になりたい!!代われ!!」

「断る!?!」

傍でぎゃーぎゃー騒いで喧嘩する二人に、瑠璃子さんは怒る事は無い。

むしろにこにこ笑って「仲良しねえ。男の子は元気が一番ねえ」とのんびり言うだけだった。とつてもものんびりしている瑠璃子さんとはとつても素敵だと思う。

すると、瑠璃子さんは俺に気づいて手招きをする。

「いらっしやい炭治郎ちゃん、禰豆子ちゃん。そんな所にいないでこつちにおいで。一緒に話しましょう」

「はー」

其のお誘いに俺は乗って、近づいて、瑠璃子さんの隣に座る。正宗は瑠璃子さんの近くで寝始めた。

部屋は全ての襖が閉められていて、ぼんやりとした柔らかな灯りが灯っている。陽を嫌う禰豆子の事を考慮した部屋だと判って、俺は嬉しくなった。

置いた箱の中から禰豆子が出てくると、瑠璃子さんは両手を広げた。

「禰豆子ちゃん、こんには。おいでおいで」

「むー!」

瑠璃子さんに呼ばれた禰豆子は嬉しそうに駆け寄り、抱き付く。

優しく抱きとめた瑠璃子さんは其の状態のまま、禰豆子の頭を撫でた。

「この前の列車の時、禰豆子ちゃん頑張ったね。えらいえらい」

「うー!」

「炭治郎ちゃんもえらかったね。鬼の頸を取ったもんね」

「えつ、いや、そんな…! 其れを言うなら煉獄さんや瑠璃子さんの方が凄かったです! 上弦の参相手にあそこまで戦えるなんて…!」

あの時に遭遇した上弦の参・猗窩座との戦闘で煉獄さんも瑠璃子さんも重傷を負っている。俺は見ているしかなかった。

「んー、柱でも上弦相手は辛いのか? 私は上弦相手は二度目だけど、運良く生き長らえたみたいなものだし。何より上弦相手に命あるだけ凄いのよ?」

「確かに命あるだけ有難いですけど…」

「うふふ、あの時のお話は此処まで。そうだわ、美味しいお茶が入ったから飲みましょうか。獺岳」

「はい! 何でしょうか姉御前!」

呼ばれた獺岳は笑顔で返事する。如何やら善逸は喧嘩に負けたらしく、ボロボロの状

態で獺岳に胸倉を掴まれていた。

「あのお茶はまだあるかしら？ あつたら持つて来て貰えるかしら？」

「はい勿論！ 用意してきます！」

そう言つて、獺岳は善逸をポイツと捨てるのとチュインツ！と音を立てて消えた。は、早い！ 流石雷の呼吸！ 流石は瑠璃子さんの継子！

因みに捨てられた善逸は「兄貴の馬鹿野郎……」と呟いていた。頑張れ善逸！ 努力をすれば、何時か勝てるかもしれないぞ！

「炭治郎ちゃん、機能回復訓練を頑張つてるって聞いているわ。よしよし、お姉さんが褒めてあげる」

瑠璃子さんの手が俺の頭に乗つて、其の儘撫でてくれる。

俺はちよつと恥ずかしく思いながらも、嬉しくもあつた。彼女の撫で方はとても気持ちいいのだ。

「よしよし、えらいえらい。何時も頑張つてるわね。稽古も欠かさずしてる、とつてもえらい炭治郎ちゃんには飴ちゃんあげようねえ。御煎餅もあるから後で持つて来てあげるわね」

と、瑠璃子さんが傍に置いてあつた飴の瓶の蓋を開けると一つ取つて、俺の方に差し出す。

「炭治郎ちゃん、はい、あーん」

「え、えつ、瑠璃子さん流石に其れは……!」

「あーん」

「だ、だからですね!」

「あーん」

「……あ、あー」

「……ろりと口の中に飴が入ってくる。つい根負けしてしまった……くっ、情けないぞ長男!

でも飴はすごく美味しい。瑠璃子さんはいざと言う時の非常食としてよく飴を持っているらしい。糖分は大事だと教えてくれた。

「ずるい!炭治郎だけずるい!!!瑠璃子さん俺も俺も!!」

あ、善逸が復活した。然も瑠璃子さんの腰にしがみ付いた。

『あらあらまあまあ』と笑って嫌がらない瑠璃子さんに甘えて、其の腰に頬擦りする善逸ははつきり言おう。

ちよつと気持ち悪いぞ!抱っこされてる禰豆子だつてちよつと不機嫌になつたぞ!

「こら善逸!女性の腰にしがみ付くんじやない!失礼だろう!」

「うるせえデコっぱち炭治郎が!弟弟子だからつて瑠璃子さんとイチャイチャイチャイ

チャ！俺だつて瑠璃子さんみたいな姉弟子欲しかったわ!!! 獺岳と交換してくれよ!!!」

「其れは断る!! むんっ!」

「むんっ! じゃねえよ!」

「はい、善逸ちゃん。あーん」

「あーん♡」

善逸も飴を食べる。とろんと顔が蕩けた。

「美味しいです♡」

「良かったわぁ」

「おい!! 見つけたぞ地理子!!」

すぱんっ!

襖を開ける大きな音がして、来たのは伊之助だった。

バタバタと走つてやってきた伊之助は瑠璃子さんの前で止まる。あと瑠璃子さんは、ちりこじやないからな!

「俺と勝負しろ! 今日負けねえぞ!!」

「伊之助ちゃん、人に会ったら?」

「コンニチハ!!」

「はい、良い子良い子。飴ちゃんをあげるわ」

飴の瓶を手を持ち、振ると伊之助は一気に素直になった。

瑠璃子さんが飴を一つ差し出すと、伊之助は猪の被り物を取って、口を開けた。ぽいつと飴が口に入って、バリバリ噛み砕く伊之助は満足そうだった。

流石は瑠璃子さん！鬼殺隊で「猛獣使い」と言われるだけはある！俺の姉弟子はとつてもすごい！

「伊之助ちゃん、お饅頭食べる？」

「食う！」

「食べる時は？」

「イタダキマス！」

さっと出されたお饅頭に食らい付く伊之助。因みに瑠璃子さんは俺や伊之助や善逸をちゃん付けで呼ぶ。何故だか判らないけど。

むしゃむしゃ食べる伊之助。瑠璃子さんは禰豆子の頬を突いて遊んでくれた。頬を突かれてむーむー楽しそうだ。良かったな、禰豆子。

すると、正宗の耳がぴんと立って、入口の方を見た。釣られて俺も見る。

入口の向こうで誰かの気配がした。そして知っている匂いもした。この匂いは……！

「瑠璃子さん、いますか？」

「いるわよー。入っておいでー」

「失礼します」

「お邪魔しまーす」

やっぱりそうだ！

しゅつと開けられた入口の向こうには、思った通り、錆兎と真菰がいた。

「いらつしやーい、錆兎、真菰ちゃん」

「こんにちは。ん？炭治郎か。何をしてるんだ？」

「炭治郎だ〜」

「錆兎！真菰！こんにちは！」

中に入ってきた二人の挨拶をする。二人は俺の右隣に座った。

正座で座った錆兎の手に何かを持っていた。なんだろう？

「何を持ってきているんだ？」

「ああ、これか。真菰が団子を買ってきてな。瑠璃子さんと食べると言つて聞かなくて」

「だって食べたかつたんだもん。義勇は任務でいないから、私が瑠璃子さんを独り占め

したかつたのに、錆兎が勝手に付いてきたんだよ？」

拗ねる真菰が錆兎が真っ赤になった。

「なっ！お、俺は瑠璃子さんに用があつただけだ！」

「本当にい〜？」

「無論だ！と言うか、何故炭治郎は此処に？」

「俺は瑠璃子さんにお呼ばれされて」

「成程な。あつ、瑠璃子さん。此方団子です」

「ありがとうね〜」

錆兎がお団子の入った風呂敷を瑠璃子さんに渡す。

受け取った瑠璃子さんは、後ろに向かつて声をかけた。

「先生〜来てくださいな〜」

と、呼べばばさりと何かが大きな物を広げる音が聞こえた。

瑠璃子さんの後ろから音も立てずにやってきたのは——大きな茶色の梟。

キリツとした目がカツコイイ、この梟は瑠璃子さんの鎧烏もとい鎧梟・『先生』だ。

何でも貫禄があつて、る自分より年上な気がするらしく、瑠璃子さんに先生と呼ばれている。俺の鎧烏も先生の事を敬っていた。

「ホー、何力用カー？」

「先生、この風呂敷を台所にいる獺岳に持って行ってもらえますか？後、お茶の追加の伝言もお願い出来ますか？」

「任せろー！ホー！」

先生は鋭い足で風呂敷を持つと、大きな羽を広げて飛んで行き、部屋から出て行った。

因みに襖は正宗が器用に前足で開けていた。

「相変わらず、先生は頭が良いですね。正宗もそうですけど」

「自慢の子よ。正宗も先生も」

瑠璃子さんにそう言われて、ふんつと鼻を鳴らす正宗。当然だと言わんばかりの顔だ。

「むむむー！」

「あらあら、禰豆子ちゃん遊びたいの？」

「むー！」

「違うの？じゃあ頭撫でて欲しいの？」

「むー！」

「そうなのね、うふふ、甘えん坊さんね〜」

「うむ!!俺も撫でてはもらえないか瑠璃子さん!!!」

「ひやつ！」

「うおっ!?!」

突然の大声に瑠璃子さんと伊之助が驚く。俺も驚いた。耳が良い善逸と正宗は耳を

押さえた。

大声の主は先日の任務で左目を負傷し、柱を降りた煉獄さんだった。左目には瑠璃子さんが作った黒い布製の眼帯がつけられていた。と言うか、何時の間に入ってきたんだろう？

煉獄さんの登場にあんなに笑顔だった瑠璃子さんが、なんとというか困った表情になった。

「もう、びつくりしたじゃない。大きな声出すと、お体に響いちやうわよ？」

「申し訳ない！ですが、ご安心を！胡蝶の葉の効果もあり、体の調子が頗る良いのです！」

「そうなの？無理はしないでね？煉獄君に何かあつたら、私、千寿郎ちゃんや慎寿郎おじさまに会わせる顔が無いわあ」

「ははは！心配しなくとも大丈夫です！父上も千寿郎も何時になつたら、瑠璃子さんが俺に嫁いでくれるのかそわそわしてます！」

「あああ、私が柱になつたから其の婚約話は飛んでる筈なんだけどねー？」
ほわほわ笑う瑠璃子さんに活発に笑う煉獄さん。

二人の様子に錆兎から怒った匂いがした。あと、真菰は怖くなった。なんだろう、考へてる事は判らないけど、怖い事を考えている気がする…。

でも瑠璃子さんの言う通り、二人は親同士が決めた結婚相手だったらしい。

煉獄さんの生家『煉獄家』と瑠璃子さんの生家『鳴滝家』は互いに歴史ある鬼狩りの家で、それぞれ「炎の呼吸」と「水の呼吸」の名門。

煉獄家に至っては長年『炎柱』を輩出している凄くお家で、鳴滝家は煉獄家みたいに、長い間『水柱』を輩出している訳では無いけど、長年鬼殺隊に『剣士』として貢献している。歴代水柱の中には何人か鳴滝家の人がいるそうだ。

其れ故に、両家には長年縁があり、瑠璃子さんと煉獄さんも其の縁で出会ったそう。初めて出会った其の日に、結婚を申し込んだのは煉獄さんで、当時の瑠璃子さんは其れを拒否。互いに鬼殺隊に入る前だったそう。

然し、何を言っても一向に引かない彼に、困り果てた煉獄さんのお父さん、慎寿郎さんと瑠璃子さんのお母さんはこう決めた。

『もし瑠璃子が二十五歳になるまでに柱になったら、其の約束は無かった事に。其れを過ぎたら結婚』

と言う決まり事を作り、結果は約束の二十五歳になる前に瑠璃子さんが柱となった事で破棄となった。二十一歳だった。

柱になった時「あと数年遅かったら、私は煉獄家の人間になってたわねえ」と語ったと錆兎が（何故か凄く嬉しそうに）教えてくれた。

でも見るからに煉獄さんは諦めていない。微笑む瑠璃子さんを見て、熱くて、蕩けてしまふような程、甘い匂いが彼からしている。

……何だか、胸が苦しくなったのは気のせいだろうか。

「待て待て待て、煉獄ちよつと待て」

すると、錆兎が笑顔で煉獄さんを瑠璃子さんから離す。其の仕草がとつても男らしくて俺はかつこいいと思った。

あと、伊之助はこつちに来た。お饅頭食べ終わったんだな、伊之助。

「む！邪魔をしないでもらえるか鱗滝！」

「邪魔した覚えはないぞ？瑠璃子さんが嫌がつているから、其れを遮っただけだ」

「其れを邪魔をしていると言うのだぞ！」

「其れよりも、瑠璃子さんとお前の結婚話は、瑠璃子さんの言う通り無かった事になった筈だ。無くなった約束を何時までもずるずる引き摺るのは男らしくないぞ？」

につこり。錆兎は笑っているけど、其の匂いは焦げ臭い。

何時の間にか隣に座っていた善逸は「ちりちり何か焼ける音がする！」と騒いでいた。確かに焼けているな。

瑠璃子さんは話に入る気は無いのか、禰豆子と手遊びをしていた。相変わらずゆったりとした人だなあ。

「ああ、勿論父上と瑠璃子さんの御母上が交わした約束は無くなった！」
「だろろう？なら」

「しかし！俺の瑠璃子さんへの想いは消えていない！」

ドドンツ！正にこの音が合う程、堂々と告白した煉獄さん。す、凄いかっこいい！！
「きゃー！あの人大声で告白したよ!!しちやつたよ!!きゃーっ！」善逸ちよつと静かに
してくれ！

錆兎は笑顔が崩れて真つ青。真菰？なんで鯉口を切っているんだ？怖いぞ？

「故に邪魔をしないでもらいたい！」

「でもねえ、煉獄君には、もつと良い女性がいると思うのでごめんなさい」

「よもやー！」

あ、錆兎が凄く笑顔になった。

「然し！俺は其の断りを断ろう！俺と同じ名字になってください！」

あ、また真つ青になった。

「あらあらまあまあ、煉獄君つたらお話聞いてくれないわあ」

「ふ、」

「錆兎？」

「ふざけるな！お前に瑠璃子さんは渡さない！」

「鑄兎——!?」

つ、遂に鑄兎が日輪刀を抜いた！抜いてしまった！ど、如何しよう！

「俺が！俺が何年！何年間！瑠璃子さんを！どれだけ男として見てもらえないのか知ってるのか!?十年だぞ！十年近く!!お前より想った期間が長いんだこっちはっ！ただ親同士の口約束で！瑠璃子さんを嫁に貰う等と！ふざけた事を!!お前も俺と同じ苦労と苦みを味わえっ！」

「ハハハハ！其れは嫌だな！だが然しっ！」

ああっ！煉獄さんまで日輪刀を抜いてしまった！この前、打ち直してもらったやつですよね、それ!?

「俺の炎の如きこの熱い想いは、鱗滝の水の呼吸等では消えん！先程も言った様に、父上も千寿郎も何時、瑠璃子さんが俺に嫁いでくれるのかそわそわしているからな！父上に至っては早く孫を見せろと急かしてくる！千寿郎は瑠璃子さん専用の部屋すら作った！其の期待を俺は裏切る訳にはいかん！」

「知るか！其の期待を抱いて散れ！」

鑄兎が襲い掛かる！煉獄さんも襲い掛かる！水が舞う炎が燃え上がる！これは流石に御法度に当たると！

あわわわっ、此処は瑠璃子さんのお屋敷なのに！当の本人は「あらまあ、元気ねえ」と

のんびりしている！瑠璃子さんしつかりしてください！貴女のお部屋が大変な事になつてます！

だ、誰か！誰か！この戦いを止めてくれ——！！

この後、瑠璃子さんを訪ねてきたしのぶさんが止めてくれた。

「あらあらまあまあ、困ったちゃんねえ」と言う瑠璃子さんを抱きしめたしのぶさんは、笑顔なのにとつても怖かった。鯖兎も煉獄さんも反省していた。

其のしのぶさんの様子を見ていた伊之助も善逸も俺も、しのぶさんには逆らわない様にと心に強く誓った。

あ、あとお茶とっても美味しかったです！御煎餅も美味しかったです！御馳走様でした！

第一話 おはよう、お姉さん

—— 幸せが壊れる時は、いつも血の匂いがする。

誰かが、そう言っていた。誰が言ったかは知らないけれど、全く以てその通りだ。

—— 何故なら今、此の瞬間、私の幸せは壊れる。噎せる程、濃い血の匂いと共に。

血塗れの母が何故か刀を持ち、体の弱い父が私を抱えて走り出す。遠ざかっていく母に手を伸ばすが、届かず、段々と離れて行き、最後に見たのは母の左腕が飛んだ瞬間。叫ぶ、叫ぶ。

お母さん！お母さん！ああっお母さん!!!

父は走る。私を守ろうと走る。然し、体の弱い父は倒れ込んだ。痛みは思ったより無

かった。父が腕の中で守ってくれたからだだった。

でも、お父さんの足が、消えていた。何かに食べられちゃったみたいにな、無かった。

激しい痛みで悶える父は歯を喰いしばりながらも、叫ばなかった。決して、叫ぶ事はしなかった。

訳の分からない私は腕の中から抜け出して、父の体に縋り付いて、お父さんお父さんと泣くしかなかった。

其の時、足音が聞こえた。私は其れがお母さんの物だと思っただけど、違った。——
知らない男の人の物だった。

私とお父さんを見下ろす男。黒髪で、真つ赤な、血の様な色の目で、青白い、月色の肌。お父さんよりも少し若そうな、お金持ちそうな青年だった。

ただのお金持ちだったら、どれだけ良かったらう。青年は、返り血で真つ赤だった。誰の物か、なんて直ぐに判った。お母さんの、血、だった。

『やっと見つけた』と言って、嬉しそうに笑って、私に手を伸ばしてくる。

—— 其の手に捕まれたら死ぬ。そう感じたのに私の体は動かなくて、伸びてくる手を黙って見ているしか無くて。

—— 左腕を無くしたお母さんが、其の手を切り捨てた。

血がいつぱい出ているのに『逃げろ！』と叫ぶお母さんの顔は見た事無い程、怖かった。

お母さんが青年に切り掛かる。見た事が無い、激しい剣技で青年をどんどん私から遠ざげる。其れが逃がす為だと判った。

すると、お父さんが私の名前を呼んだ。

『狭、霧山にいる…鱗滝さんの、所、に、行け。逃、げろ、彼奴から、』

私は首を振った。お父さんとお母さんを置いて、逃げられる訳が無かった。でもお父

さんは『行け、行け、早く、行け』と言った。

『行きなさい!!瑠璃子!!』

今まで聞いた事が無いお父さんの怒鳴り声に私は怯えて、そして————走り出した。

『瑠璃子!』

『『愛してる』』

最後に聞こえたのは、何処までも優しく、深い、両親の愛の言葉だった。

走って、走って、走って走って走って。息が切れても、手足が痛くなっても走って。

そして、鱗滝さんに拾われた。

目が覚めた時には、あの地獄から一週間が立っていた。

起きた私に、鱗滝さんが『具合はどうだ？瑠璃子』と聞かれた時、少しぼんやりとした後、あの地獄を思い出して泣き叫んで、鱗滝さんに縋りついた。

お母さんが！お父さんが！お母さんの手が！！お父さんの足が！！二人が！！！！

混乱して、言葉が拙くなつてしまつたが、意味を理解した鱗滝さんは息を呑んで、そして思いつき私を抱きしめた。混乱していた私は相当暴れただろう。其れでも鱗滝さんは離さなかつた。

時間がどれだけ経つたのかは判らなかつたが、泣いて叫んで、疲れ切つた私は糸が切れたみたい眠り込んだ。

次に目が覚めたのは丸一日経つてからだつた。

薄らと目を開けると、鱗滝さんの背中が見えた。何かを読んでいる。手紙だろうか？かさかさど紙を触る時の音がして、隣には鴉がいた。

手紙らしき物を見て、鱗滝さんは泣いていた。背中しか見えなかつたけど、微かに其の背中で震えていて、時折鼻を嚼る音と声押し殺す音が聞こえて、彼が泣いているのが判つた。

私が寝ているから、此処にいるから、声を押し殺している。其れがすごく申し訳無かつた。

鱗滝さんはお父さんの事、とつても大事に思っていたから。とつても可愛がっていたから、本当は泣け叫びたい筈なのに、私がいる所為で泣けない。鱗滝さんへの申し訳なさで私は心の中で謝りながら再び目を閉じた。

次に目を開けた時に、鱗滝さんは『此処に居なさい。落ち着いたら出て行つても良いから』と優しい言葉をかけてくれた。私は其れに甘えるしかなかった。

数日間、何も言わずに衣食住を提供してくれる鱗滝さんに申し訳なくて、ちゃんとしてよう、鱗滝さんに恩返しをしよう私は動き始めた。

最初は鱗滝さんが採ってきた山菜やら野菜やらを切る所から始め、二週間もすれば自然と料理が出来る様になった。自分が思ったよりも私は料理の出来る方だったらしく、おかげで助かった。

次に覚えたのは罌の作り方。熊等の大型動物も出るらしいので、鱗滝さんから教えてもらった。後に好奇心で作ってしまった人用の罌は後に此の山に来る弟子達の関門となつてしまった。未来の弟妹弟子達、ごめんなさいねえ。

其れでも、おかしな事に私は笑えなくなっていた。

笑顔の表情筋が機能しない。笑いたいのに笑えない。泣く事は出来た。怒る事も出来た。でも笑顔だけは出来なかった。頬を揉んでも、無理矢理指で口角を上げても、ちやんとした、自然な笑顔が出てなかった。

鱗滝さんは『両親を失った悲しみで笑顔が消えてしまったのか』と悲しげに言い、慰める様に頭を撫でてくれた。おかしいな、大好きな鱗滝さんの手なのに、嬉しいのに笑えなかった。

笑顔が戻らないまま、色んな事を教わりながら鱗滝さんの所で過ごして、二年が経った時の事。彼は宍色の髪の子供を連れてきた。其の数カ月後には同じ様に黒髪の子供を連れてきた。

獅子色の髪の子は錆兎、黒髪の子は義勇。後に二人で一人の水柱になる子達だった。

二人は私より二つ下で、身内を鬼に殺されたと言う。話に聞いていたが、此の時の私は鬼がどんな物かは知らなかった。

だが、身内を失い、目に闇を抱いた二人を見るのは辛かった。

鬼への怒りに燃える錆兎は兎も角、悲しみが強かったであろう義勇は、後の無表情で口下手な性格とは真逆の気弱な性格でよく泣く子だった。体格も私より少し小さく、性

格も相俟つて余計に小さく見えてしまい、まるで『弟』の様だと勝手ながらに思つてしまつた。

だからか、義勇を慰め、世話をしていく内に懐かれた。ただ、其れは良い効果を齎した様で、少し遅れて彼も鱗滝さんの指導を受ける様になつた。

錆兎は気を張らないと自分を保てなかつたのだろう。寂しさを払う様に一心不乱に鱗滝さんの指導に食い付いていた。

『男らしく』と口癖の様に言う彼に私は一種の憐みを抱いていた。怒りに身を任せる錆兎が痛々しく見えたからだ。

ある夜、素振りを続ける錆兎に言つてしまつた。『泣いても良いのに』と。錆兎は其の言葉に反応した。『嫌い』と——何時もなら『瑠璃子さん』と呼んで笑つてくれるのに——冷たく言い返されて、此の時私はムキになつたのだろう。

彼に向かつて突進し、其の儘抱きついた。

突然の反撃に錆兎は受け身を取れずに仰向けで倒れた。ぶんぶん怒る彼に対して私は言つた。『泣いて、良いよ』。体勢を少し変えて、離そうともがく錆兎を押さえる様に彼の頭を抱きしめた。

『泣いて良いんだよ』

『男の子だつて、痛い時は泣いて良いんだよ』

『大事な人を失った時は泣き叫んでも良いんだよ』

『苦しい時に苦しいって言わなきゃ、心が死んじゃうよ』

『錆兎の心が死ぬのは、お姉さん、嫌だよ』

思った言葉を口にする。錆兎の頭を胸に押し付けて、頭をゆっくりと撫でる。

すると、暴れていた錆兎は次第に抵抗しなくなり、そして徐々に私の背中に手を回して、泣いた。思いつきり泣いた。『痛かった』『苦しかった』『何も出来ずに家族を鬼に殺されて悔しかった』。服が彼の涙で濡れるのは全然構わなかった。其れで彼の心が救えるなら何だつて良かった。

泣いている。子供が泣いている。慰めるのが私の《役目》だ。不思議とそう思った。何事かと出てきた鱗滝さんと義勇は私達を見て、驚いていた。当然だろう。泣き言一つ言わない彼が大声で泣いているのだから。

義勇が『錆兎！瑠璃子さん！』と私達の方に来て、抱き付いた。彼も泣き出した。

二人を慰めながら、私も静かに泣いた。其れでも一氣に心の距離が縮まった気がした。

散々泣いて三人で目を真っ赤にして、その日は一緒にお布団に入った。錆兎が左、義勇が右で、私は真ん中。両手を繋いで、眠るまでの間沢山おしゃべりをした。

——その日の夜に私は思い出した。所謂『前世』と言う長く、短い記憶だった。

私は大正よりもずっと後の、百年以上先の未来で生きていて、保育士をしていた。

子供が好きで、小学校から保育士と言う職業に憧れて、その為の勉強をして、資格を取り、就職先の保育園で先生をしていた。子供達の成長と安全を見守り、其の将来が平和でありますようにと願っていた。

そうなのね、錆兎を抱きしめた時に感じたのは此の経験があつたからなのねと納得していた。

然し、巷で話題となっていた通り魔に襲われ、『私』は命を落とした。

子供達の成長を見届けずに死んだ私は、過去の時代の『鳴滝瑠璃子』として生まれ変わったのだと理解して、目が覚めた。

突然戻った記憶に心臓の音が激しくなり、不安になって横を見ると私の両手を握ったまま寝る錆兎と義勇がいて、涙が一つ零れた。

今世の両親は私をアレから守って亡くなった。立派な人だった。錆兎も義勇も大事な人を奪われた。其れでも鬼を倒そうと努力を続けている、私と違って強くて、弱い子供達。

錆兎、義勇。今の『私』は戦う力は無いわ。貴方達のように努力も出来ないけど、支えるからね。

何処まで力になれるか分からないけど、いっぱいいっぱい支えるからね。

だから死なないで。生きて。

ふと錆兎の臉が震えて、徐々に開き始める。義勇も起きた様で、のそりと体を起こして、私を見た。『何で瑠璃子さん泣いてるの?』と聞いてきて、錆兎も驚いて『手、痛かったですか?』と心配してくれた。

私は其の答えとして首を横に振って——笑顔で挨拶をした。

『おはよう、錆兎、義勇』

ちよつと間が開いて、我に返った錆兎が『瑠璃子さんが笑ったああああ?!』と珍しく叫んで、其の声で丁度、朝ご飯の材料を取りに行っていた鱗滝さんが乱暴に戸を開けて『朝から煩い!』と叫んで、私を見て、材料を全て床に落とす。

『おはようございます、鱗滝さん』

次の瞬間、私は鱗滝さんに抱きしめられていた。

其の日から錆兎はちよつとだけ余所余所しくなった気がした。何か目が合わなくなつた。思春期の突入かしら？

鱗滝さんに相談したら『そうか』と言つて、暫く使つていなかった日輪刀を取り出して、其の日の指導は何時もより厳しかった。なんで？

義勇の指導は何時も通りだった。うんうん、義勇頑張ったわね。今日は鮭大根にしよ
うねえ。

時は思うよりも早く過ぎて、二人は鬼殺隊への最終選別試験に向かう許可が降りた。試験会場に向かう当日、鱗滝さんが作った厄除けの面を渡された二人に、私は泣きたい気持ちを押さえて、まとめて抱きしめた。

『死なないでね、絶対に帰ってきてね。帰つてこなかったら絶対許さないから』。そう言え
ば二人は『絶対に帰ってくる』と約束してくれた。

—— 其の後、二人は満身創痍で私達の元へ帰ってきてくれた。

『帰ってきた！帰ってきたわ！』と騒ぐ私に、鱗滝さんは二人に駆け寄り、そして抱き締めた。『よく、帰ってきた』と言った鱗滝さんの声は震えていた。

私は知っていた。鱗滝さんの、錆兎と義勇より前の弟子は試験から帰って来なかった。会場にいる鬼に喰われて死んでしまったから。

其の所為で、鱗滝さんは弟子を取るのにあまり前向きではなかった。厳しくも、弟子への愛情に溢れた人だから。其の不器用ながらも大きな愛情を持っている事、帰ってこなかった弟子の面を手に、夜中静かに一人で泣いていた事を、私は知っている。

然し、二人は帰って来てくれた。私との約束通りに。鱗滝さんの願い通りに。

錆兎は『戦いの最中に面を割ってしまった』と申し訳さなそうにしていたが、其れよりも私も鱗滝さんも二人の命の方が大事だった。

後、義勇を慰めるのも大変だった。何でも彼は錆兎の後を追いかけるだけで、鬼を切つていなかったそう。会場の鬼は錆兎が一人で殆ど斬ってしまったらしい。そして今回の試験は異例の『死者無し』と言う事態になったと後日知る事となる。

義勇は『鬼を斬つていない自分に鬼殺隊員になる資格は無い』とすぐ落ち込んでいたけど、錆兎と一緒に励まして、いっぱいよしよしして、いっぱいご飯食べさせたら何

とか回復した。義勇は良い子良い子すると、とつても機嫌が良くなるものね？

其の数日後の事だった。来訪者が私の前に現れたのは。

『———^{ななみ}七海姉さん？』

其の女性は何の前触れも無く、私の前に現れた。此の時、鱗滝さんと錆兎・義勇は家の中で、私は一人外で掃除をしていた。

ひんやりとした冷たい風を感じて、其方を見た。其処には女性が一人立っていた。薄水色の髪を一つに束ねた、可愛らしい顔立ちの人だった。髪よりも少し濃い水色の羽織を羽織った女性はぼかんとした表情で、私に向かって名前を———お母さんの名前を言った。

姉さん…？姉さんと言う事は此の人はお母さんの妹？

そんな事を考えていたら女性は段々と笑顔になっていき、一瞬で消えた。

と、思ったら女性はいつの間にか私の前にいて、両手を伸ばし、私の両脇に差し込んで抱き上げた。

『七海姉さんだ!!!七海姉さんそっくり!!!海^{かい}里の野郎にもそっくり!!!嘘だろお前溜璃子か

!？」

私を抱き上げた儘、くるくると回る笑顔の女性。

ちよつと待つて、此の人お母さんだけじゃなくてお父さんの名前まで口にした!？」

だが、其れを聞く以前に回転が、勢いが遊園地のティーカップより激しくて、ぴやあぴやあ叫ぶ私に気づいた鱗滝さん達が慌てて出て来て、ぐるぐる回る私を、そして回す女性を見て鱗滝さんは叫んだ。

『何をやってるんだ雪音！ゆきね瑠璃子を離さんか!!』

『あ、鱗滝のじじいだ。おひさ。ちよつと殺させろ』

と、笑顔で言った女性は、鱗滝さんに雪音と呼ばれた其の人はパツと私を離すと、次の瞬間には刀を抜いて鱗滝さんに襲い掛かっていた。

勿論、私は地面に落ちた。高い位置から落ちたので衝撃は大きかった。すごく痛い!! 『瑠璃子さん!』 鎗兎と義勇が慌てて私の所に安否確認をしに来る。

二人の背後でキンキンキンツと金属がぶつかり合う特有の高音が響いていた。

透き通った薄青緑色の刀で、何度も斬りかかる雪音さんに、綺麗な青の刀を握った鱗滝さんは何度も滑る様に剣技を刀身でいなす。とんでもない速さで技の応酬をする大人二人に私どころか鎗兎も義勇も圧倒されていた。じ、次元が違う! 鎗兎と義勇の剣より技術が圧倒的に高いし早い!

雪音さんの一閃に鱗滝さんが後ろに大きく後退した所で、彼女は刀を鞘に収めた。

『おい、じじい。何で瑠璃子が生きてるってあたしに報告しなかった？先ず報告すべきは血縁関係のあるあたしだろうが』

『お前に連絡すれば余計厄介な事になる。大体瑠璃子は当初茫然自失状態だった。危ない状況でお前に預ける訳にはいかんかったからだ』

『頭の固いじじいめ。まあ見つかったから良いや。ほら、帰るぞ瑠璃子』

此方に向く女性に私は思わず怯えた。錆兎が前に出て、私を隠してくれる。

『あんだ、一体誰だ？瑠璃子さんとは如何言う関係だ？』

『瑠璃子さん、こっち』

錆兎が隠している間に義勇が手を握って立たせてくれる。そして手を引かれ、隠れようとする雪音さんの目が細くなった。

『動くな。殺すぞ』

——まるで氷の様だった。

放った言葉も、表情も、目も冷たくて、私も、手を握ってくれた義勇も守ってくれる

錆兎ですら固まった。一気に周りの温度が下がる。体も急激に冷え始め、がちがちと歯が震え始めた。

雪音さんが一步、一步と此方に向かってくる度に寒くなる。

——一言で言えば、『寒波』。寒波が、人の形をして、此方に歩いてくる。

凍り付く錆兎の隣を過ぎて、雪音さんは私の前に立つ。手を握る義勇の手に温かみを感じられない。

そして、手が伸びてきて——

『雪音！いい加減にせんか!!!』

ドンツ！

地響きの様な鱗滝さんの怒号に我に返った。ハツとした義勇が手を引いて、腕の中に隠してくれて、錆兎が直ぐに私達の前に立つ。二人も私と同じ様にカタカタと小刻みに震えていた。

雪音さんは氷の様に冷たい、温度を感じさせない目と表情で私達を見下して、ふうと

一息吐いた。途端に寒さが消えた。

『うん、今のはあたしが悪かった。素人剣士相手にやり過ぎた。すまん』
あつさりと謝る雪音さんに何だか急に力が抜ける。

『いやあ、瑠璃子が生きてるって知ってつい興奮した。悪いなジャリ共』
『何をしに来た？用があるのは儂か？』

『いいや？暇潰し』

ビキリと鱗滝さんのこめかみ（顛顛もしくは蛭谷）に血管が浮き上がった。

『冗談だ。近くでうちの長男が鬼を殺してるって聞いてな。顔を見に来たついでに、じじいが死んでるか見に来た』

スウウウウと息を吸う音が聞こえて、音の発信元である鱗滝さんを見ると彼は刀を構えていた。全集中の呼吸使う気だわ！慌てて三人で抑える。

『あー！あー！鱗滝さん待って待って！』

『事情！事情を聞きましょう！』

『（くくく）頷く』

*

『んじや、自己紹介。あたしは鳴滝雪音。其処にいる瑠璃子の叔母さんで、二人の息子持ち。ついでに元柱。よろ!』

笑顔でそう言う雪音さん。一方で私は義勇と鍬兎と鱗滝の背後で守られていた。あからあまあまあ、守ってくれるなんて、大きくなつたわね二人とも。

其れにしても、叔母さん……つまり私の母の妹にあたる人、なのよね? 然も二児の子持ち。……見た目、かなり若く見えるのだけだ。

じつと雪音さんを見ていた義勇がぼそりと『瑠璃子さんと少し似ている……』と呟く。声が聞こえたのか、雪音さんにはにんまり笑った。

『当然、血縁関係はあるから似てる所はあるだろうさ。……さあて、じじい。これは如何言う事だ? 何で瑠璃子があんたの所において、何であたしに連絡しなかつた? 答えろよ』

其の質問に鱗滝さんは少し黙つた後、『判つた』と言ひ、話し始めた。

先ず私が倒れていたのが狭霧山の近くで山の見回りをしていた時に見つけ、保護した事。

当時の私はパニック状態で、まともな状態では無かつた事。

もし連絡すれば、鬼殺隊で『暴走機関車娘』と呼ばれた雪音さんは即座に会いに来て、逆に私を混乱させてしまうのを危惧して、連絡しなかつた事。

其れ等の事を説明すれば、雪音さんは『なるほど』と納得した様子だつた。

『其の様子じゃあ、あたしの事は忘れてるって訳か。通りで怯えられると思った』
『急に抱っこされたら誰でも驚いちゃいますよお…』

うんうんと錆兎と義勇が同意してくれる。

『瑠璃子。突然だけど、お前、両親の事何処まで聞いている?』

『え? えつと、お父さんが鱗滝さんの甥っ子さんだった事くらいで…』

『そうなんですか!?!』

驚く錆兎に、頷く。雪音さんは頭を搔いて『其処だけかよ…』と唸った。

『じじい、甥可愛さで姉さんの事を話さなかつたな』

『何が悪い。お前の姉がうちの甥を無理矢理奪って行つたんだらう』

『いやいやいや、姉さんはちゃんと海里に結婚申し込んだだろ? 別名『誘拐結婚』とも言うが』

『誘拐結婚!?!』

碌でも無い言葉に思わず手の指先で口を押さえた。其れ犯罪よね?

『別にそんな怖い物じゃないよ。姉さんが海里に結婚申し込んで、断れたから誘拐して、結婚しただけだ』

『其れは…犯罪なのでは?』

『いやー姉さん積極的でさー! 一目惚れして、『彼奴の家族が反対する。誘拐してく

る』つて言つて本当にやりやがったよ！実に豪快豪快！』

けらけら笑う雪音さんとは裏腹に、私は混乱し過ぎて頭が痛くなってきた。

た、確かに豪快な人だった記憶はある。澄んだ水のような、清らかな美人だったけど、本当に強かった。細腕に持った斧を一振りするだけで大木を切る人だった様な……？

其れを普通だと思つていた私つて馬鹿なのかしら？あと綺麗だったから年齢も判らなかつた。お姉さんびつくり。

……あれ？お母さんつてつまり最強だったの……？

『あ、勘違いすんなよ。あんたの両親はちゃんと愛し合つてたから。其の証拠がお前だからね』

そう言われて、頭の痛みが引いた。其の愛を、大きな愛を私は知っているからだ。其の愛が、私を生き長らえさせて、大切な人達に会わせてくれた。

『瑠璃子』

『瑠璃子』

『ずっと、愛してる』

嗚呼、お母さんお父さん。私、生きてて良かったわ。

命懸けで産んでくれてありがとう。育ててくれてありがとう。

最期まで、守ってくれて、ありがとう。

目尻に涙が浮かぶ。

私が拭く前に鑄兎が手拭きで拭ってくれた。

義勇がそつと私の頬に、自分の頬を寄せてくれた。

大丈夫よ、私。今、嬉しくてしょうがないから。

『じゃあ、話を進めようか。瑠璃子、お前——』

—— 『海の呼吸』 つて言葉に聞き覚えはあるか？

其の言葉に、私の心臓が何故か大きく脈を打った。

第二話 海の呼吸と出発

—— 鳴滝家は代々鬼狩りの家系である。

—— そして水の呼吸の派生である『海の呼吸』を作り出した一族である。

鳴滝家を作り上げた人、所謂『初代鳴滝』は『海』の呼吸の使い手であった。

時は戦国。ただの一般人であった初代鳴滝は身内を鬼に惨殺された事から、其の復讐心を胸に剣士として、鬼狩りとしての道へ進む事となる。

其の旅の最中に、鬼を斬り殺す為に作り上げた呼吸こそ『海』の呼吸であった。

—— 嗚呼恨めしい 鬼共よ 我が剣技は海の如く お前達を溺れさせる 底の
無い絶海に沈め

齢八十を超えても鬼を狩り続けた初代鳴滝は死ぬ間際、こう本に記した。

そして海の呼吸法『七つの型』を自分の子孫に受け継がせる為に、五冊の本に其れ等

を残した。もちろん、其の子供達は海の呼吸を受け継ごうとした。

でも、此処で問題が発生する。——『海の呼吸』は扱える者に限りがあった。

理由は恐らく、水の呼吸の派生が多い所為ではないか、と雪音さんは推測した。基本に沿った技が多い水の呼吸は其の分、派生呼吸も多いらしい。

例え、水の呼吸に適性があつたとしても、其れが海の呼吸とは限らず、其の儘、水になるか、其の派生になる事がある。

其の弊害故か、遺伝子的問題なのかは不明だが、鳴滝家には初代と同じ『海の呼吸』を使える者が歴代でも少なく、今現在、やっと二十人を超えた辺りなのだと言う。

ただ、水の呼吸の名門ではあつた様で『水の呼吸』適性が高い者が多く存在し、何人かは水の呼吸、または其の派生で鬼殺を極めたそうだ。中には水柱になった人も、鱗滝さんと同じ育手になった人も存在するらしい。

其の鳴滝家の中でも、雪音さんは性格もあるが、水と風を混ぜた我流呼吸『氷の呼吸』を自力で作り上げ、其の儘柱まで上り詰めた物凄い異端児だつたそうだ。お姉さん、何となく判つちやう。

そして海の呼吸を——お母さんは使っていたそうだ。鳴滝家の長い歴史の中でも数少ない使い手の一人がお母さんだつた。

生まれながら天才だつたお母さんは何と四歳（相当凄い事らしい）で海の呼吸を取得

し、十一歳で鬼殺隊への最終選別試験に合格。順調に階級を上げて、『海柱』になった。当時其の優秀さを妬んだ隊士は、やれ女だと、やれ生意気だと突つ掛つていたが逆にボコボコされ、何も言わなくなつたらしい。同時に彼女には誰も近づかなかつた。

正に孤高の剣士、一匹狼。風いだ水の様に静かで、感情を表に出さなかつたお母さんの心を射抜いた人物こそが、お父さんだつた。

お父さんは鱗滝さんの甥で、鱗滝家の次男坊だつた。そして病弱な人でもあつた。

既に長男がいた事もあり、病弱なお父さんは家族に少し雑に扱われていたらしい。既に次期家長になる存在がいるから、後に生まれて、体が丈夫では無いお父さんは邪魔だつたんだろう。

嘗ての私が生きていた時代ではあんまり考えられないけど、此の大正時代ではよくある事らしい。時代の流れと言う物なのかしら？ 私にはあまり理解が出来いわあ。

鱗滝さんはそんな扱いに父の父：即ち祖父（鱗滝さんのお兄さんだそう）に何度も注意したそうだが、其れを止めたのが、雑な扱いを受けている張本人だつた。

『体が悪いのは仕方ない。僕は僕の出来る事をするよ』

と悲しげな顔で言われて、逆に注意した鱗滝さんが困つてしまう程、虫を一匹殺せない程に優しい心を持った青年がお父さんであつた。

そんな心優しい父に、水の様になつた筈の母は一目で心を奪われ、其の燃え上が

る激情の儘、文字通り『誘拐』をした。あらあら、お母さんったら情熱的だったのね。

当然、鱗滝さんは怒った。当然よね。私でも義勇や錆兎が誘拐されたら怒る。

甥に何て事を！日輪刀を持って、複数ある隠れ家にいる母に特攻した。——然し彼は刀を下ろした。

何故なら父は笑っていたからだ。お母さんと話をしながら、心の底から笑っていた。

男性に対しては失礼かもしれないが、まるで花が咲いた様な笑顔だった、と。

あの家では決して見せる事はなかった、其の満面の笑顔を見て、鱗滝さんは渋々振り上げた刀を下ろし、結果二人の結婚を認めたとそうだ。

数年後、私を妊娠した母は柱も鬼殺隊も辞め、父と私の三人の生活を始めた。

私が生まれた時には鱗滝さんは自ら山を下りて会いに来てくれたそうだ。赤ちゃんだったから覚えていない。

『だが、悲劇は起こった。——姉さんと海里は鬼にやられて死亡、お前は行方不明。此れを聞いたあたしはお前の家に向かった。其処で見たのは瑠璃子のいない部屋と、食い千切られた両親の左手が二つ、わざと残されていた』

目を閉じて語る雪音さんは静かに怒りに震えていた。

鱗滝も組んだ両手の掌に爪が食い込み、ぼたぼたと血が流れる程、然し、感情のまま声は荒げずに静かに怒っていた。

……そっか、若しかしてあの時声を押し殺して泣いていたのは二人の死亡の知らせが来たからだだったんだ……。

『幾ら鬼殺隊を辞めて数年が経つているとはいえ、あの姉さんが早々負ける事はない。なら雑魚鬼でも下弦でも無い。犯人は——『上弦』か『鬼舞辻無惨』だ』

—— 鬼舞辻無惨。其の名前を聞いた時、私はぞつとした。

急にせり上がってくる吐き気、雪音さんに殺気向けられた時よりも冷たく感じる寒気、激しく脈を打つ心臓が酷く煩く感じた。

錆兎と義勇が真っ青な顔で私の名前を呼ぶ。『瑠璃子さん！』『瑠璃子さん！』どうした

「んですか!」嗚呼、心配をかけてしまっているのに、私は二人を落ち着かせる事すら出来ない。

—— 蘇るあの日の悪夢の光景を、私は口にした。

『—— 目が、真っ赤、だったわ』

鱗滝さんと雪音さんが反応した気がした。

『お、お金持ちそうな見た目、してた。黒髪で、肌、が、月の色で、ゆ、雪音さんより、少し若そ、うなっ男の人……!急に家に来て!お母さんの左腕が飛んで!お父さんは足を喰われた!それで!私の事見て!それから!それから!』

『もう良い』

ほん、と頭に何かが乗った。ひんやりとした冷たい何か。

『息をしろ。ゆっくりで良い、吸って吐くを繰り返せ』

其の音が耳にすーっと入ってきて、言われた通りにする。ゆっくりと吸って吐いて、吸って吐いて。

『そう、上手だ。落ち着いたら顔を上げろ。大丈夫、誰も消えない。お前の大事な人を思い浮かべろ』

——大事な人。

お母さん、お父さん。鱗滝さん、錆兔、義勇。

大好きな人達の顔を思う。すると、急に呼吸が楽になって、あんなにドクンドクンと大きく脈を打っていた心臓の音が小さくなった。

元の呼吸に戻って、落ち着いて、言われた通りに顔を上げると、雪音さんが私の前に膝立ちの状態で立っていた。私の頭の上にあっただのは、雪音さんの手だった。

『すまん。悪い事を思い出させてしまった。あたしは人を口で無意識に追い詰めてしまった事がある、と、よく同僚に言われていたのに…姉さんと海里がやられて苛立っていたんだ。お前の気持ちも考えずに…本当に申し訳ない』

そう言つて、雪音さんが膝立ちをやめ、畳の上で頭を下げ、私に向かつて土下座をした。土下座なんて、前世でも今世でも見た事が無いから、少し焦った。

『だ、大丈夫です！頭を上げてください！雪音さんだつてお母さんとお父さんの事、好きだったから、殺した相手に怒っているんですよね。…だから、どうか頭を上げてください』

雪音さんの気持ちはとても判る。私だつて二人がいなくて寂しいし、殺したあの男が嫌い。……正直、復讐したい気持ちが無い事も無い。今まで抱いた事の無い感情が、私の中にはある。

きつと雪音さんは二人が大好きで、急にいなくなつて、辛い思いをした。悪いのは彼女では無い。全ての元凶は、あの月色の肌の男。

『でも…』と洩る彼女に笑つて、畳の上に置かれた白くて、でも隠せない傷がいつぱいある両手を私は小さな両手で握つた。

『雪音さん、私に会いに来てくれて有難う御座います。そして二人がいなくなつた事に絶望してもなお、私を探し続けてくれて有難う。私、生きてて良かった。お母さんとお父さんが守つてくれたこの命、絶対に無駄にはしません。だから——

——私に全集中の呼吸を教えてください』

きつと、錆兎と義勇は驚いた事だろう。今まで剣など握った事の無い私が、こう言ったのだから。

鱗滝さんも固まって、雪音さんは恐る恐る頭を上げて、此方を見上げた。

『……本気で言っているのか?』

『本気じゃなきゃ、こんな事言いませんよ』

『あ、いや……そうじゃなくて……教えれば、多分覚えるだろうと思う。でも厳しいぞ?』
『おい、じじい。瑠璃子に刀は?』

『教えている訳がないだろう!!』

『だ、だよなあ?』

鱗滝さんがガツ!と私の両肩を掴む。

『馬鹿な事を言うんじゃない!今まで剣すら握った事も無いお前が剣士になる等……!儂は海里と七海が命懸けで守ったお前には幸せになってほしいとどれだけ思っているか……!儂としては、せめて藤の家の若い男衆に嫁いでもらえればと思っっているというのに……!』

『えっ!?!う、うっう鱗滝さん!?!そんな事考えていたんですか!?!』

『今は黙っている鑄兎！瑠璃子！お前は幸せになるべきだ！だから！』
『ごめんなさい、おじいちゃん』

初めて、そう呼んだ。今までもそう呼んでみたかったけど、勇気が出せなかったから。

——だから今、この勝負に勝つ為の、私が唯一持つ切り札として使わせてもらおうわ。

両肩を掴むその手に、私は触れた。

『私ね、死に行く訳じゃないの。自暴自棄になった訳でもない。——あの悪夢に終
止符を打つてくる』

全員の視線が私に向けられる。笑顔が崩すな。笑え、笑え、笑って言え。

『これ以上の悪夢は要らない。あの男の首を撥ねたい気持ちはある。お父さんとお母さ
んの命を奪っておいて、生きているであろうあの男が憎い。でも私は、誰かを守る事が、
其の力があるならば。私は喜んで地獄に飛び込んで、その力を掴んでやる』

元保育士の女が何を言っているのだろう。

鬼と対峙した事もない子供が何を言っているのだろう。

剣も握った事もない、平和な世でぬくぬくと生きていた、弱い存在が何を。

——それでも、其の可能性があるならば、あの男の頸を捉える事が出来る、私の様な被害者を増やさない為の力を掴める、このチャンスを逃したくない。

い。ごめんなさい。ごめんなさい。鱗滝さん、ごめんなさい。馬鹿な甥孫でごめんなさい。

例えば罵倒されても、怒られても、瑠璃子は貴方を手を振り払って、雪音さんの元に行かなきゃ。

本当に、ごめんなさい。でもね、死に行く訳じゃないのは本当なのよ。

『生きて、必ずおじいちゃんの元に帰ってきます。だからどうか許してください』

謝罪をした彼女と同じ様に畳の上で土下座した。『瑠璃子さん……』と鑄兎が戸惑う声が届く。義勇が私の服の裾を引っ張る。少しだけ待って、私、今、一世一代の大勝負をしているから。

頭を下げて、どれくらい経ったのか判らなかつた。十分なのか、一時間なのか。

——大きなため息が、天狗の面越しに聞こえた。

『判った。行つて良い』

其の短い言葉に頭を上げる。ぼん、とまた頭に何か乗った。大好きな、鱗滝さんのあの手だった。

『可愛い甥孫にそう乞われては、叶えない訳にはいかん。だが、其の言葉、決して間違え

るな。生きて、帰ってきなさい。帰ってこなかったら許さん。あと雪音を殺す』

『いや、柱を何年も前にやめたじじいにあたし負けないから。返り討ちするから』

……ガツ!!

鱗滝さんと雪音さんの組手が始まった。やるなら外でやってちようだいな! ああつ、埃が舞う! 義勇や錆兎が吸つちやつてゴホゴホしたらどうするの!?! もうっ!

すると、義勇が私に抱き付いてきた。じわじわと服が濡れていく。あらまあ、泣いてる。

『やだ、いやだ、瑠璃子さん、いやだ、行くな』

『こおら、義勇、今の聞いてたでしよう? 私、死に行く訳じゃないって』

『やだ』

『あらあらまあまあ……義勇……』

こうなつた義勇は可愛いが、ちよつぴち面倒でもある。綺麗な青目からぼろぼろと涙が溢れ出てしがみ付いて来る姿は非常に強い庇護欲と罪悪感を掻き立てる。本当に義勇は困つたちゃんなんだから……。

行かせまいとしがみ付く困つたちゃん義勇に何度もお願ひしても却下される。

そしてこの義勇の面倒を見るのは私だけではない。錆兎もだった。

『義勇、離せ。瑠璃子さんが覚悟を決めたんだ。俺達に止める権利は無い』

『いやだ』

『女に男がウジウジ縋るな！はしたない！ほらっ！』

錆兎が義勇の首根っこを掴んで、私から離す。

離された義勇は『瑠璃子さん瑠璃子さん』と名前を呼んで両手を伸ばしてくる。

あらやだ、猫ちゃんに見えてきた。可愛い。でも、我慢！お姉さん我慢が出来るもの

！

『いいか？義勇。瑠璃子さんが自分で考えて、出した覚悟だ。さつきも言ったが俺達に止める権利は無い、邪魔をする権利も無い。瑠璃子さんを戦いに出したくないのは解るが、俺達の我儘で困らせる方が駄目だ。嫌われるぞ？』

『俺は嫌われてない…』

『そうじゃないだろう…。はあ、一旦落ち着かせて来ます。ほら、行くぞ』

そう言つて、錆兎が義勇を連れて行つた。戸が閉まるまで、義勇は此方に手を伸ばしていた。

正直危なかつた。子供を見ると如何しても甘やかしてしまいそうになる。子供好きもいい加減にしないと…。

……あと、何時まで大人二人は組手やつてるのかしら…。

その後、鱗滝さ、ううん、おじいちゃんと一緒に、雪音さんと話し合った。

——全ての条件の大前提として、私を雪音さんの娘として養子入りさせてもらう。

これはまず第一に鳴滝家の恩恵を私に与えられるからだ。現在家長である雪音さんの娘となれば、最大限の恩恵が受けられる。身の保証も出来る。というか、家長だったのね。この時代で女性の家長は相当珍しいと思うのだけど…？

何より、鳴滝家最大の武器である『鳴滝の図書館』が自由に使える。この家が恐ろしいのは海の呼吸ではなく、其の知識量だと、雪音さんは語る。

先祖代々受け継がれた書物は数知れず。それらは全て一カ所にある。其れが鳴滝家本家の中にある『鳴滝の図書館』。其の図書館の鍵を受け取れるのは、家長の子供だけと決まっている。

故に現家長の雪音さんの娘となれば、初代が書き記した『五冊の海の呼吸の書』が読める。ならば、と私は其の条件を受けた。おじいちゃんも了承した。

次に鬼殺隊に入るにあたって。『柱』になれ、と言われた。

雪音さんとおじいちゃんが持っていた、鬼殺隊最強の称号。錆兎が水柱を目指していたのは知っているから、大体の事は判る。

雪音さんは『若し海の呼吸の適性があれば、姉さんの称号を継いでくれ』と言われた。

そう、お母さんは元『海柱』。其れを継げる、其れ位強い鬼殺隊員になれと言う事だろう。これでも了承した。

次は指導について。雪音さんは全集中の呼吸を教えると言った。然し、絶対に弱音は吐くな、弱音を吐いた分だけ指導を厳しくすると言われた。本気の目だった。無論、これでも了承。

あと、私には血筋的に多分だけど、水の呼吸の適性があると思われるので、其れを基本に呼吸を模索しようと言われた。

日輪刀があればすぐに分かるそうだが、生憎と予備がないそうだ。既に色が変わっている、二度と色は変わる事はないらしい。

因みに雪音さんは硝子の様に透き通った薄い青緑色、おじいちゃんは綺麗な青。派生呼吸は同色系になるらしい。雪音さんは水（青）と風（緑）が混じった呼吸だから青緑色だった。さつき来た時にちらっと見たけど、雪音さんの様に綺麗だった。

最後、ちゃんとおじいちゃんに手紙を送る事。頻度は高くなって良いから、年に一回は必ず送る事。此れを破るのは許さない。

大丈夫よ、おじいちゃん。ちゃんと、送るわ。

全ての条件に頷いて、出発は二日後になった。

出発するまでの二日間、私はおじいちゃん達と一緒に過ごした。

おじいちゃんは私の好物ばかり作ってくれて、錆兎は少しでも刀に慣れる様にちよつとした稽古をしてくれた。主に刀の持ち方とか姿勢とか。とつても重要。ありがうね、錆兎。

そして義勇は、と言うと、錆兎の訓練——サビト・ズ・ブートキャンプ——以外の時はずつと私にくつついていた。

家事の時は背後から抱きしめ、ご飯の時は隣、寝る時は抱き枕状態。お風呂にまで付いて来ようとした時には流石に止めた。おじいちゃんが止めた。『義勇いい加減にせんか!!!』と火山の如く怒っていた。

あらあら、おじいちゃん、そんなに怒らないでちょうだいな。血圧が上がってしまうわ。

そして何より嬉しかったのは、おじいちゃんが私に厄除けの面をくれた事。

私の好きな金木犀が彫られた其の面に嬉しくて嬉しくて、おじいちゃんに抱き付いた。錆兎にも見せびらかした。『あらあらまあまあ、私のお面だわ。錆兎と義勇とお揃

いのお面なのだわ』とはしゃぐ私を鑄兎は『お揃いか…』と言って、嬉しそだった。

……ただ、時の流れは無情にも早く、出発日になってしまった。

出発する時間になり、面を持って外に出る。外には既に雪音さんが立っていて、鑄兎もおいしいちゃんもいて、今にも泣きそうな義勇が此方を見ていた。

義勇に少し微笑んで、私は鑄兎に近づいた。彼の前に立ち、言った。

『…私、鬼殺隊に入るわ。文句は言っちゃいやよ?』

初めて出た、強気な言葉だった。

『……入ってきたら連絡ください。一番に迎えに行きます』

返ってきた言葉は優しかった。とても嬉しかった。

『待ってて、必ず鑄兎と義勇の所まで行くから』

『其の間に柱になってますから』

『鑄兎は案外色んな事見落とすから、もっと周り見たら良いわよ』

『なっ!?!』

『——大好きよ、鑄兎。貴方に会えて良かった』

鑄兎の目が真ん丸になり、顔がどんどん赤くなっていく。鑄兎は案外真つ直ぐな言葉

に弱いのだ。

『そ、其れって……!』

『義勇も大好きよ。だから泣きそうな顔しないで』

『瑠璃子さん……行かないでくれ……』

『ああもう、最後まで本当に世話が焼ける子ねえ』

ポロポロと涙が溢れる義勇の青い目を手拭で拭く。ぐすぐすと鼻を吸る彼は本当に手の焼ける子供にしか思えない。

いたわよ、保育園でも。お母さんがいないと不安で泣き出すタイプの子。義勇は其れね。

あと、何故か錆兎が蹲っていた。どうしたの? 泣き顔見せたくないの? 別に泣いても良いのに。お姉さん、気にしないわよ?

『そうだった……貴女はそう言う事をサラツと言う人だったな瑠璃子さん……ッ!』

『えっと、錆兎君だっけ? 取り敢えず手強いと思うよ? あたしの娘になるし……何より最終的には鱗滝のじじいが怖いよ?』

『孫娘はまだやらん』

『最後の敵が大き過ぎるっ!』

『錆兎ー、私そろそろ行きたいから義勇を離すの手伝ってちょうだいなー』

『いやだ、いやだ瑠璃子さん、行かないでくれ』

『いい加減にしろ義勇！前にも言ったが、男が軽々しく女に抱きつくんじゃない！』

べりつと剥がされた義勇が『瑠璃子さん、瑠璃子さん』とポロポロ泣きながら、また此方に両手を伸ばしてくる。

其の姿に罪悪感を覚えつつ、雪音さんの元に行く。雪音さんは笑って、私の手を握ってくれた。

『それじゃあ、行こうか。良いか？お前はあたしの娘になるが、姉さんと海里の愛情だけは覚えていてくれ。二人は——最期までお前を愛していたよ』

ぶわり、と風が吹く。其の風は不思議と温かく、ぽんと背中を押してくれた…気がした。

『——はい』

私の返事に雪音さんは、笑った。

『其れじゃあ、いざ我が家へ！紫陽花と吹雪が喜ぶぞい！』

『おじいちゃん！錆兎！義勇！行つてきます！——必ず生きて貴方達に会いに行くから！待つてて！』

『行つてらっしゃい！』

錆兎は、義勇は私達が見えなくなるまで、手を振つてくれたのです。

*
*

「……つて事なんだけど、真菰ちゃん、こんな感じで大丈夫？」

「うん、話してくれて有難う！」

話を切ると瑠璃子は一息ついて、獺岳が持つて来てくれたお茶を一口。

「うん、流石は獺岳。茶の温度が丁度良いわね」

「勿体無い御言葉です！」

姉御前の為に！と、ありとあらゆる温度と味を計算し尽くしたお茶を褒められ、獺岳

は木製の床にぶつけそうな程、頭を下げる。

流石は姉御前！今日もお美しい！姉御前の唇に触れた湯呑み割れて死ぬ！何時も通り通常運転な獺岳だった。

『瑠璃子さんの話聞かせてー』と突然やってきた真菰に、瑠璃子は昔話ならばと話し始めた。鍔兎と義勇と鱗滝の出会いと別れの話は、同門である彼女を楽しませる事が出来たらしい。

流石に転生うんぬんの話はしなかった。こういうプライバシー保護はとっても大事なのである。

にこにここと可愛らしい笑顔を見せる真菰に瑠璃子も笑顔になってしまう。やっぱり女の子は笑顔が一番だ。

「其の後、お義母さんに実家に連れて行かれたんだよね？」

「そうよ。其処で、紫陽花兄様と弟になる吹雪に会って、私に海の呼吸の適性があつたら、初代鳴滝の『海の呼吸の書』を読んで、覚えたの」

「へえー、そうなんだー」

はむつとみたらし団子を一口食べる真菰。其れを瑠璃子は微笑む。

「もう、真菰ちゃんつたら…たれが付いてるわ」

「えっ、本当？」

「拭いてあげるから動かないで」

懐から手拭を取り出して、真菰の口元に付いたたれを拭く。手拭きは常に常備。これ基本。

たれが取れたのを確認して、瑠璃子はまた微笑んだ。

「はい、取れた。いつも通り可愛い真菰ちゃんになったわね」

「有難う瑠璃子さん！」

きやつきやつと女性同士がはしゃぐ姿に獺岳は口元を緩めると一歩下がり、そして
——実は最初からいた錆兎と義勇をジト目で見た。

「お前等、いい加減屋敷から出て行ってくれ。姉御前と真菰さんの邪魔になる」

と、苛立つ獺岳に言われても二人は出て行かない。

だって錆兎は何かを耐える様に真つ赤でぶるぶる震えているし、義勇はもっちもっちとみたらし団子をちやつかり食べていたからだ。

「……つ何で最初から全部話すんだ！ああ恥ずかしい！穴があつたら入りたい！」

「……俺も」

「おい、わざとらしくたれを付けてんじやねえぞ、死んだ魚の目柱。姉御前に近づくんじやねえ」

お？お？やるか？やんのかてめえ？と獺岳が鯉口をカチカチ切る。然し義勇は知ら

んぷり。当然獺岳の額に血管が浮き出る。

「大体年上の癖に甘えてんじゃねえよ。年上なら年上らしく振る舞えよ」

「(ぷいつ)」

「一々動作が幼女だなおい」

「くっ！真菰も真菰で何で嬉しそうなんだ！絶対後で弄られる！」

「いや、あんたが真菰さんに弄られるの日課だろうが」

「嫌い桑島！瑠璃子さんに可愛がられているからと馴れ馴れしい！男らしくないぞ！」

「はあー？俺は継子で、姉御前の世話をする係ですが？何か問題でもあるんですか？こ

の童貞水柱様ー？」

「斬る!!!」

「かかつてこいよ!!!」

「やっぱり、男の子は元気が一番よねえ、うふふ」

第三話 柱三人娘のがーるずとーく

今代の柱には三人の女性がいる。

一人は『蟲柱』むしはしら胡蝶こちょうしのぶ。可憐且つ華奢な女性で、其の小柄な体軀故に、柱の中で唯一鬼の頸を切れないと言う弱点を持つものの、薬学に精通し、鬼が嫌う藤の花から『鬼殺しの毒』を作り上げた唯一無二の才を持つ。

彼女の屋敷『蝶屋敷』は隊士達の診療所として機能し、何人もの隊士の命の管を繋いだできた功績は見事で、鬼殺隊の長たる御館様も目を見張るものだ。

二人目は『恋柱』こいはしら甘露寺蜜璃かみろしみつり。元は今代の炎柱えんはしら・煉獄杏寿郎れんごくきょうじゆうろうの継子であったが、其の独特過ぎる呼吸と戦闘スタイルから早々に独立。『炎の呼吸』の派生である『恋の呼吸』を極めた。

見た目も可愛らしく、社交的な性格で男性隊士からも大変人気である。然し彼女は『恋』を冠する柱。惚れっぽい性格故に常にあらゆる人物にときめいており、其のときめきが原動力とも言える。またとつてもいっぱい食べる食いしん坊な女の子でもある。

そして最後、三人目は『海柱』うみはしら鳴滝瑠璃子なるたきるりこ。義母は元『氷柱』で、取得する者が少な

い、鳴滝家が作り上げた『海』の呼吸を使用する、名前と同じ瑠璃色の髪を持つ女性だ。

因みに今代の女性柱の中で唯一の成人済み。穏やかで面倒見の良い性格で、個性の強い柱の中でも常識人であり、柱の纏め役としても、姉役としても重宝されている。

元柱である鱗滝左近次の甥孫である為、彼の弟子であり、今代の水柱みずばしら二人組、富岡義勇とみおかぎゆうと鱗滝錆兎うろたきさびとと行動する事が多い。

男所帯の鬼殺隊において、数少ない、然も最高幹部である柱。其れ等もあつてか、女性柱達は仲が良く、集まる事も多々ある。

今回の会場はしのぶの蝶屋敷。

おやつは瑠璃子の継子が持たせてくれた羊羹、お茶は蜜璃が持ってきた抹茶。お茶とお菓子を準備して、机に置き、三人が座つてから会は始まる。

柱三人娘だけの特別な女子会の始まり始まり。最初に口を開いたのは瑠璃子だった。

「こうして集まるのも久しぶりねえ。祝言以来かしら？二人とも元気そうで何よりだわ」

「そうですね。此処最近は忙しくて、顔を合わせる事も少なかったですし」

「しのぶちゃんも瑠璃子さんも元気そうで本当に良かった！」

乙女三人の笑顔の花が咲く。

因みに此の会は男子禁制の花園。故に瑠璃子の継子は男子なので、厳選したお土産だ

け渡してお留守番をしている。とっても気の利く継子なのだ。

「其れにしても、しのぶちゃんのお姉さんと瑠璃子さんのお兄さんの祝言、とても素敵だったわね！二人とも凄く綺麗で私感動しちゃったわ！」

頬を紅潮させ、嬉しそうに語る蜜璃にしのぶと瑠璃子は礼を言う。

———つい二カ月程前にしのぶの姉・胡蝶カナエと瑠璃子の義兄・鳴滝紫陽花なるたきあじさいが祝言しゅうげんを挙げた。

カナエは元花柱であり、紫陽花は甲の隊士だったが、四年前の『上弦接触事件』の際に血鬼術の影響で肺を損傷し、隊士としての生命が絶たれた。然も紫陽花は後遺症により、刀を持つ効き手の左手を麻痺してしまった。

この事件の際に、瑠璃子は全治二カ月以上の重傷を負ってしまい、義妹を生死の境に落としてしまったのは自分の責任だ、と落ち込む紫陽花の左手になるとカナエは誓い、そんな心優しいカナエに惹かれていた紫陽花は彼女と結ばれた。

雲一つ無い、素晴らしい晴天の下、白無垢に包まれて愛する人と幸せそうに微笑む姉。鬼に両親を殺され、まだ壊されていない誰かの幸せを守る為に頑張っていた優しい姉が、愛する人と共に歩んでいる。其の姿を何度想像しただろう。そして、其れが現実と

なった。その嬉しさにしのぶの目には涙が浮かんだ。瑠璃子は微笑んで彼女を抱きしめた。

因みにこの式の招待客として現・柱達とお館様御一行をご招待し、しのぶよりも蜜璃の方が泣いてしまったのは良い思い出だ。

互いの兄妹が結婚して事により、しのぶと瑠璃子は法律的に義姉妹になっているのだが、其の關係は今までと変わらず、親友同士である。

「まさか兄様とカナエさんが結ばれるなんて……何と言うか不思議な気分。兄が世話になります」

「此方こそ姉がお世話になります。と、言うか瑠璃子さんは知らなかったんですか？ 姉さんが紫陽花さんの事、好きだったの」

瑠璃子は頭を左右に振る。

「いいえ。そう言う素振りを見せない人だから」

「まあ、気づかないのもしようがないです。だって姉の方が惚れたんですし」

「あらあらまあまあ」

「きやつ！ そうなの？」

「ええ、柱になる前に一度助けてもらったそうで。以来頭から離れなかつたと」

「きや——！ 素敵！ キュンキュンしちゃう！」

「あらあらうふふ、『鬼殺隊の女神』と崇められるあのカナエさんの恋愛事情なんて貴重ねえ」

貴重な話に笑みが増す瑠璃子。素敵なお恋愛事情にときめきが止まらない蜜璃。

カナエは其の麗しい容姿に心優しい性格から『鬼殺隊の女神』『天使』と男性隊士からも崇められているが、『紫陽花と結婚した』と話が広がった際には、多くの隊士が涙の海に沈んだ。

其れを見て旦那の方は鼻で笑った。はっ！さまあみる！カナエは俺の嫁になったからな！手を出したら承知しないぞ！と言う意味である。鬼畜である。

すると、しのぶは瑠璃子の方を見て、意味深そうに微笑んだ。

「其れよりも、私は瑠璃子さんの方が気になりますねえ」

突然の話題の方向転換に瑠璃子は「はあい？」と首を傾げる。

「聞きましたよ、鱗滝さんと逢引したと」

「ええ！！錆兎さん！？ど、如何言う事なの瑠璃子ちゃん！」

詰め寄る二人に、瑠璃子は一切れの羊羹を一口食べて飲みこむと、「えー？」とまた首を傾げた。

「其の日ねえ、私も錆兎も丁度非番だったし、錆兎が『此の頃、任務で忙しかったから気分転換に出掛けませんか？』って言われて行っただけよお？一緒にご飯食べたわ。美味

しかったわあ、お魚定食〜」

と、のほほんと言った瑠璃子は、またもや羊羹を食べる。もきゅもきゅ。「このお羊羹、美味しいわねえ」と呑気な海柱に、蟲柱と恋柱は身を寄せあつてコソコソと話し合う。

「鏑兔さん、休み絶対合わせているわよね？絶対そうよね？」

「間違いないでしょう。其れにしても誘つておいてご飯食べるだけって…どれだけヘタレなんですか？」

「駄目よ、しのぶちゃん！鏑兔さんだつて頑張っているのよ！ちよつと、其の…奥手なだけで！」

「片思い歴十年近くですよ？鬼殺隊にいる以上、必ずしも一緒とは限りませんが…：長くありません？普段あんなに「男らしくあれ」と言っている鱗滝さんがですよ？」

蜜璃は「あうう」と言葉に詰まった。

鱗滝鏑兔。今代の水柱・富岡義勇の親友にしてももう一人の水柱、そして同期同門の青年の名だ。

妹弟子である真菰まこもとは同姓ではあるが、血縁関係は無い。でも家族ではある。

穴色の髪に、右側の口元に大きな傷があるが端正な顔立ちをしており、実力も人気もあり、性格も真つ直ぐな鏑兔は、二歳年上の瑠璃子に一途な片思いをしている。何と十年近くも。

詳しくは一話参照だ。えっ？メタイ？うるせいやい！

…こほん、話を戻そう。

嘗て錆兎が受けた最終選別試験で、鱗滝一門の敵である手鬼との戦闘で刀を折つてしまい、あわや喰われかけたが、瑠璃子が泣く姿を思い出して何とか逃げ、生き延びた。其れ位、錆兎にとって彼女は特別、と言う事だ。

後に鱗滝一門に弟子入りし、鬼殺隊員となつた妹弟子・真菰に錆兎は言われた。『錆兎って案外ちよろいよね。一途だけど』と可愛らしい笑顔で言われて、錆兎は飲んでいとお茶を嘔き出したとか。

そんなこんなで頑張つて瑠璃子に振り向いてもらおうとしている錆兎である。

頑張れ錆兎！フレフレ！鱗滝一門は貴方を応援します！ただし敵は多いぞ！狭霧山にいる過去の兄・姉弟子は応援を常に送っている。

「でも瑠璃子ちゃん、富岡さんとも仲が良いわよね」

蜜璃の何気ない言葉に、しのぶの頬がぴくりと僅かに動いた。

「駄目です。富岡さんは瑠璃子さんに甘えているだけです。義理とは言え、あんな天然

ドジっ子に姉を渡せません」

(しのぶが姉と呼んでくれたわ!)と瑠璃子が嬉しそうにしている傍らで、しのぶの義勇への愚痴は止まらない。

「大体、真面に返事も会話も出来ないし、そんな殿方に瑠璃子さんは渡せません。せめて瑠璃子さんと同じ強さで、お金があつて、浮気しなくて、苦勞させない人ならまだしも、富岡さんは論外です論外。あの人は瑠璃子さんがきちんと言葉を理解してくれて、世話を焼いてくれるから甘えているだけです。ええ、そうです、きつとそう。むしろ私が瑠璃子さんを娶ります。必ず幸せにしますよ」

「し、しのぶちゃん大胆!瑠璃子さんに告白なんて……!禁断の恋ね!素敵っ!」

「怪我した時に飲むお薬、減らしてくれたら考えるわあ」

「無理です」

「そうよねえ」

こうして、女子会は時間と共に進んでいった。

因みに瑠璃子はしのぶに言っていないが、今日の夕食は義勇と食べる予定であった。え?何で言わなかったのって?

…察してくれ。

第四話 瑠璃子と獺岳

——しばんっ！

瑠璃子の得物が鬼の頸を跳ねる。頭部と離れた胴体を足場にして半回転。体勢を整えると、蹴つて、背後にいた鬼の頸を薙ぎ払う。これで五体目。

神経を研ぎ澄ませて、周囲の気配を探る。

鬼の気配が無い事を察知した瑠璃子はふうと一息吐いた。彼女の周りには頸を落とされた鬼が五体。全て、瑠璃子単身による討伐だった。

ブンと得物——髪と同じ、瑠璃色の刀身を持つ大太刀に付いた血を振り落とす。

頸を落とされ、さらさらと塵になって行く鬼達に向かって、瑠璃子は言った。

「さよなら、来世では良い人生を」

其の言葉に辛うじて生きていた一体の鬼の指がぴくりと動いた後、残った力で「…ありがとう」と呟いて塵となり、消えた。

消えていった鬼達を、瑠璃子は痛ましい物を見た様な表情で、憐みの目で風に流されていく塵を見届けた。

「殺した私が言うのは変かもしれないけど、良き旅路を、名も知らぬ方。……こんなんだから実弥ちゃんや小芭内ちゃんに怒られるのだけど」

困った様に笑う瑠璃子は踵を返す。

——鳴滝瑠璃子は、一部の鬼以外に対して其処までの復讐心も嫌悪感も無い。

無論、悪鬼滅殺を掲げる以上、人に危害を加える悪鬼は滅ぼすべきだと言う事は判っているのだが、如何しても憐れでしょうがなく思えてしまうのだ。

これは元は戦とは縁のない、平和な世で生きていた弊害だろうかと彼女は考えていた。

きつと鬼殺隊の柱としては異常だ。同じ柱の数名にも「憐れんでもしょうがないだろ」と言われて、時折怒られる事はある。其れでも瑠璃子は心の何処かで願う。

—— 何時か、幸せな人生を送れますように、と。

「姉御前！」

そう聞こえて、瑠璃子は我に返る。

後ろを振り向くと、一人の隊士が此方へと向かってくる。見知った其の姿に瑠璃子は微笑んだ。

「獺岳」

獺岳と呼ばれた青年は彼女の元まで来ると、刀を鞘に納めて、その場で片膝をついた。

「報告します。隠の確認で、此処一帯の鬼の姿が見えなくなりました。殲滅したと思われます。鏖鳥の伝言により本日の仕事は終了、報告も済んでおります」

「有難う獺岳。仕事が速くて助かるわ」

「はっ、有難き御言葉」

畏まる獺岳に瑠璃子は「もう」と拗ねた。

「任務終わったんだから畏まらなくて良いのよお。さあ、帰りましょう」

「はいっ、姉御前」

立ち上がった獺岳を瑠璃子は「あ、ちよつと待つて」と引き留める。懐から手拭を取りだすと、彼の顔に其れを当てた。

「ほおら、汚れているじゃない。折角の男前が台無しよ？私の継子だからちゃんとしないとねえ」

「あ、姉御前！」

赤面する獺岳に瑠璃子は「ほらほら動かなーい」と手の焼ける弟を世話する姉の様だ。失礼、元保育士でした。

彼、桑島くわしま獺岳は瑠璃子の継子である。一年前に継子となつてゐるが、出会つたのは其れよりも前。彼の師であり、元柱の桑島と瑠璃子の義母・雪音ゆきねは知り合いであつた。嘗て鬼殺隊で先輩後輩として共に鬼を斬つていたそうだ。

因みに、此の時期の雪音は、義娘となつた瑠璃子に自分の知り合いと会わせる事が多かつた。理由としては『うちの娘、強くて可愛いから見るや』が大半、別の理由もあつたが、其処は割愛。

さて、此処で獺岳について説明しよう。彼はぶつちやけ性格が歪んでいた。と言うか滅茶苦茶、承認欲求が強かつた。

孤児で、桑島に弟子入りする前はとある寺に自分と同じ様な境遇の子供と住んでいたが、訳あつて追い出されてしまった。泥水を啜りながら生き、死に掛けていた所、桑島に拾われ弟子入りと言う経緯である。

無論、親からきちんとした愛情を貰えず、人間の汚い所ばかり見ていた為か、性格は捻くれに捻くれ、歪みに歪んだ。

ただ、芸術の域に達している雷の呼吸を使う桑島の事は尊敬しており、いずれは彼の様な柱になるのだと思つていたが、獺岳には出来ない事があつた。

——雷の呼吸を使う上で、技の全ての基本である『壺の型』が出来ないのだ。

理由は不明。『他の型は出来る』のに、雷の呼吸の適性があるのに、何故か『壺の型だけ出来ない』。

其れは獺岳の心に影を落とした。

更に、後に入つてきた汚い高音で泣き叫ぶ弟子は『他の型は出来ない』のに『獺岳

が出来ない壱の型』が使えた。

何て事だ、と獺岳は茫然としたが、桑島は其のデコボコ兄弟弟子を見て、互いを支え合う様にと言った。

もちろん桑島は弟子二人を思つて言つた言葉であつたが、其れを素直に受け取れないのが捻くれボーイ・獺岳である。子供の癖に非常に性格が悪いのが彼である。面倒な性格をしているのが獺岳と言う少年であつた。

結果、弟弟子とは仲が悪くなり、桑島とも仲が気まづくなつてしまつた。

其処に現れたのが鳴滝親子であつた。

此の時、瑠璃子は鬼殺隊への試験を控えていたが、義母に無理矢理連れて来られた。『あ、数日泊まるからね』と荷物まで持たされた。

個人的にはもつと鍛錬を積んでおきたかつた瑠璃子だが、お泊りと聞いて内心『お泊りなんて何時ぶりかしらー？お泊り保育以来？』とワクワクしていた。

そして、義母の案内で桑島の元にやってきた瑠璃子は獺岳と出会うなり、言つた。

『貴方、姿勢が良いのねえ。背筋がピンとしていて、とても男前に見えるわあ』

ひゅん、とすつ。

何かが獺岳の胸を撃ち抜いた。其の正体は恋柱風に言えば『キュン』である。

途端に獺岳の目には彼女が美しく、綺羅綺羅と輝いて見えた。気のせいか後光も見え

始めた。

『あつ、手も凄い血豆ちまめある。頑張り屋さんなのねえ。凄いわねえ』

とすつ。

『え？ 壺の型が使えない？ でも他の型は出来るの？ なら十分じゃない。壺の型が全てでは無いと思うわよ、私』

とすとすつ。

『弟弟子に先生が掛かり切りでいやだ？ きつと貴方は直ぐに技を覚えてしまったのね。其れで桑島さんも教える事が無くなっちゃったんだと思うわあ。桑島さんも戸惑っているんじゃないかしら？ 一度面と向かつて話し合ってみない？ 私も付き添ってあげる。大丈夫、何かあつたら私も言つてあげるから。ね？』

とすとすとすつ。

『ほら、顔に土がついてる。拭いてあげるから動かないの。はい、良い子良い子』
ばきゅんっ!!!

以来、獺岳の胸はときめきっぱなしだった。

優しい言葉。慈愛に満ちた目。穏やかな微笑み。全て獺岳にとって新鮮で、嬉しかった。

元保育士であつた瑠璃子の性格が、複数の子供を預かる仕事だつた為に細かい事に気

づける特技を身に着けていた事が幸いしたのか、人に優しくしてもらった経験が少ない
獺岳には効果抜群であった。

助言通り、桑島と話してみると大体瑠璃子の言う通りだった。

獺岳が技を早々に取得してしまい、桑島は教える事が無くなってしまった。

其の後に入ってきたのが手の掛かる弟弟子で、桑島の目は其方に行ってしまった。

ただ、獺岳の事を決して見ていなかった訳では無く、彼が努力している事、夜中でも
素振りを何度もしている事も知っていた。だから邪魔しない様に黙って見ていた、と。

師匠の言葉に獺岳は静かに涙を流し、己を恥じた。ごめんなさいごめんなさいと蹲つ
て謝る彼を師は優しく抱きしめて、すまなかったと彼も謝罪した。

こうして師弟のわかだまりは解けたのだった。

なお、大変耳が良い弟弟子は数日間、女の子と触れ合っていた兄弟子に対し『何で獺
岳!?あの獺岳だよ!?捻くれた音出して人に桃ぶつけてくるし!顔か!?やっぱり顔!
きいいいいいい!!俺もお世話されたい!!瑠璃子さん俺もべぶらっ!!』と汚い高音を
出してぐーで殴られた。自業自得。

滞在中、獺岳は瑠璃子の話を少し聞いた。

『私、柱にならないといけないの。鳴滝家の為にも。如何しても』

鳴滝家の為。実家の為と言う割には妙に鬼気迫る表情の瑠璃子に、事情を詳しく知ら

ない獺岳は、追及しなかった。ただ、『此の人は一人で背負うのか』と考えたら、彼女の将来に少しだけ不安を感じた。

其の小さな不安を抱えたまま、鳴滝親子が帰る日になった。

『それじゃ桑島さん。お元気で』

『お主もな。瑠璃子ちゃんも元気でどう』

『大変お世話になりました。うちの母がご迷惑をお掛けして申し訳ありません』

『いや、慣れてるからもう良い』

『ひどーい』

からから笑う雪音を後目に、瑠璃子は獺岳にも話しかける。

『それじゃあ獺岳君。元気でね』

『貴女も鬼殺隊の試験の合格頑張ってください』

『もちろん。お姉さん頑張っちゃう』

ほわほわとした笑顔を見せる瑠璃子に、獺岳は緊張した面持ちで言った。

『もし、貴女が柱になったら俺を継子にしてください』

『良いよお』

あつさり。実にあつさりと瑠璃子は返事を返した。此れには先に言った獺岳が虚を突かれてしまった。

『い、良いんですか?』

『継子は同じ呼吸の子じゃないとダメって言うのは無いわよね?母さん』

『ないね』

『じゃあ良いよお。私の継子になっても。私が選ぶより自分から積極的な継子の方が嬉しいから』

瑠璃子は手を伸ばし、幾分か背の高い獺岳の頭をぼんぼんと撫で、人差し指でちょんつと鼻先を突いた。

そして、悪戯っぽく微笑んで、一言。

『——先に待ってるわね』

こうして、鳴滝親子は帰って行った。

『…ねえ、じいちゃん』

『なんじゃ』

『獺岳から凄く柔らかい音がする…』

『じゃろうな。儂でも判る』

『ちよつと気持ち悪いかも…』

『こらつ、何て事言うんじゃ!むつ…獺岳?なんじやどうした?先程から動かんが?』

『……あつ!じいちゃん!獺岳気絶してる!!!息してない!!!』

『な、なんじやと!?まさか先程のでやられたか!?ええい奴の娘とは思えん程優しい娘つ子じゃったが、やっぱり雪音の娘じゃわい!!とんでもない問題持ちじゃった!獺岳、呼吸じゃ!呼吸をするのじゃ!!』

『イヤアアアアアアア!!兄貴しつかりしてえええええええ!!』

—— 時は経ち、現在。

鬼殺隊へと無事入隊し、継子となつた獺岳は今日も瑠璃子の屋敷『海屋敷』の台所に立っていた。瑠璃子から貰つた割烹着を身に着けて、真剣な眼差しで鍋の様子を見ている。

ぐつぐつと音を立てて、温めている味噌汁の具はカブだ。今日の朝食として出されるもので、其れが瑠璃子の口に入る為、めちやくちや真剣に味噌汁を作っていた。鬼を斬る時よりも真剣だった。

お玉で少し掬って、持っていた小皿に入れると口にした。こくりと飲みこんで、頷く。「ん、これなら良い。悲鳴嶼さんから貰ったカブ、美味しいな。味噌汁にして良かった」
幼少の頃に世話になった人から貰ったカブは中々甘味があり、味噌汁の具としては最適だった。

今度は漬けてみるかと思いつつ、朝食の準備をする。

継子になってから、獺岳は進んで瑠璃子の身の周りの世話を始めた。

柱は多忙だ。時間が無い。其れは瑠璃子も同じで、彼女は多忙故に自ら食事を取る機会が少なくなっていた。彼女は自分より他人を優先してしまう癖がある。

其れを危惧した獺岳がせめてもと思い、料理から始め、次第に家事全般を任される事になった。

因みにいらぬスキルも色々ゲットした。例えば暗殺術とか相手の縛り方とか。

なにより、自分の作ったものを『美味しい』と言ってくれる瑠璃子の笑った顔が見たくて、獺岳は今日も作る。

「よし」

朝ご飯の準備が出来て、其れを持って部屋へと向かう。其処には獺岳の大好きな人が笑顔で待っていて、おはようと挨拶してくれる。

—— 兄貴は幸せを入れる箱の底に穴が空いている。

嘗て、弟弟子はそんな事をぼつりと口にした。あの時は意味が判らなかつたが、今なら判る。

だって——

「おはようございます！姉御前！今日はカブの味噌汁をご用意しました！」

今、其の箱は幸せでいっぱいなのだから。

第五話 紫陽花瑠璃、叶え偲ぶ — 恋恋 —

——
なるたきあじさい
 鳴滝紫陽花は鬼が憎い。

憎くて憎くて、醜くて、しょうがない。

嘘を付き、喜々として人を食い、死ぬ間際で命乞いをしてくる愚かな存在。

——
 愛しの父を殺した 我が人生の敵かたき

助けにこれなかった母を責める気は無い。母はあの時、任務で不在だった。弟は静かに寝ていた。

一番父の近くにいたのは自分だった。だから、守れなかった。弱くて惨めな自分が、自分の所為で父は死んだ。

鬼殺隊最強の称号を持つ母と、鬼殺隊『甲』きのえの称号を持つ父との間に生まれた、鬼狩りの名門『鳴滝家』の長男。其れが、当時10歳の鳴滝紫陽花だった。

あの夜、紫陽花は父と寝るまでの間、おしやべりをしていた。今日は何をした、子猫を見つけた、母が任務に行く前に頭を撫でてくれた。

—— そんな些細な、幸せなおしやべりは、急に壊れた。

一体の鬼が、鳴滝家へ襲撃してきた。後に其れは父を恨んだ鬼の単独犯行であつたと知る。

父は常に枕元に置いてある日輪刀を抜いて、鬼と戦つた。紫陽花は突然の事に怯えて、その場から動けなかつた。

—— だから、良い獲物になつてしまった。

鬼は父の刀を避けると、無防備な紫陽花に襲い掛かつてきた。

自分の名前を叫ぶ父に、どンドン迫ってくる鬼に紫陽花は死を覚悟した。

—— 父は、その身を挺して、紫陽花を守つた。

体を貫通する鬼の腕。血の雨が紫陽花に降り注ぐ。大量の血を吐きながら、父は最後の力で鬼の首を刎ねた。

そして、父親は崩れ落ち、紫陽花は叫んだ。

これが、紫陽花の見た父親の最期であつた。

*

其れからと言うもの、紫陽花は刀を振るい続けた。

もう、守れない自分にはなりたくなかつた。

母親ではない別の、水の呼吸を使う育手の元へと向かい、最終選別試験を生き残り、鬼殺隊へと入隊した紫陽花は鬼を狩り続けた。

恐ろしいまでに、無慈悲に、一切の躊躇も無く。大人の姿をしていようが、自分よりも小さい子供の姿をしていようが、其の首を刎ね続けた。

鬼を殺す為ならばと努力をした。寝る間を惜しんで技を磨き続けて。

鬼を狩って狩って狩って狩って狩って狩って狩って狩って狩って狩って狩って狩って

て狩って狩って狩って狩って狩って狩って狩って狩って狩って狩って狩って
狩って狩って狩って狩って狩って狩って狩って狩って狩って狩って狩って

氣づけば、10年が経っていて——其の少女が、やってきた。

『瑠璃子と言います。よろしくお願い致します。紫陽花さん』

名前と同じ瑠璃の髪を後頭部の真ん中でお団子にした少女——紫陽花の義理の妹
になつた瑠璃子が、此方を見ていた。

何処までも穏やかな瞳は誰かを思わせたが、紫陽花は其の正体に気づく事無かつた。

其の存在は知っていた。だが、ちゃんと顔を合わせたのは此の時が初めてだった。

何せ、紫陽花は実家にすら顔を出さなくなっていたのだから。

父の死を切つ掛けに柱と鬼殺隊を降りた母は、時折うろろろしては紫陽花を見つ
て、一方的に喋つてきて、満足すると帰る事を何回も繰り返していた。頭が若干いかれ
ているとはいへ、彼女は母親なりに息子を心配していたのだろう。

其の一方的なおしゃべりの中で出てきたのが瑠璃子だった。

姉さんの子供を見つけた。あたしが引き取った。お前に妹が出来たぞ。そう笑って言う母。

紫陽花は鬼の首を刎ねながら、其の『妹』と言う単語が少しだけ気になった。

今更妹が増えても、如何でも良い。首を、鬼を殺さないで。

紫陽花が雪音に応える事は無く、鬼殺を続ける内に其の存在は薄れていった。

——瑠璃子が、自分の前に現れるまでは。

(嗚呼、此の子か、瑠璃子って。若干母さんに似ているか?…いや、其れより鬼を殺さないで)

一分一秒でも早く、多くの鬼を殺す事だけが、紫陽花の頭を占めていた。正直、瑠璃子と会うだけでも時間の無駄だったが、彼女は言った。

『雪音さ、母さんのご指示により、紫陽花さんのお付きをしると言われました』

『じゃあ、御勝手に』

冷たい言葉に動じず、瑠璃子は微笑んで『はい、勝手にします』と答えた。

其の日から、瑠璃子は紫陽花のサポート役として付き従った。

瑠璃子は気の利く子だった。

細かい事にも気づき、常に任務の情報や状況を更新して紫陽花に伝える。余計な事は口にしなかった。

言葉にはしなかったが、個人的には隠よりも補助が上手く、妹としてでは無く、御付きとして重宝していたのは事実だ。次第に傍にいる事が当たり前になっていった。

戦闘でも決して邪魔はしなかった。

雪音から事情を聞いていたのか、鬼を斬る時、本当に危ない時だけ手を出した。鬼を斬り始めると周りが見えなくなる紫陽花の悪癖をカバーしていた。

瑠璃子の存在に慣れてきた頃、紫陽花の前に現れたのは、彼が最も『苦手』とする女だった。

『あら、鳴滝君。こんにちは』

『…胡蝶か』

思わず顔を顰めた。花柱の胡蝶カナエ。紫陽花は、彼女が苦手だった。可憐な容姿に

其れに見合つた優しい性格。男性隊士からも人気のある女性。

普通ならば紫陽花とて、内心彼女の容姿や性格を褒めていたかもしれない。

—— 自分とは真逆の『鬼を救う』と言う考えを持つていなければ。

正気の沙汰では無い。悪鬼滅殺を掲げる組織が、鬼を殺す事が仕事の、この鬼殺隊の
中で最も歪んだ考え。

其れが気に食わなくて、気持ち悪くて、恐ろしくて、紫陽花は彼女の事を嫌っていた。
一方のカナエは、紫陽花を見かけると、ちよくちよく話しかけてくる。同じ鬼殺隊員
だからか、親しくしたいと思つているのかもしれない。

だが、苦手な物は苦手だった。

カナエと言う存在から逃れる様に目を逸らす。其れでも彼女は此方にやってき
て、紫陽花の後ろにいた瑠璃子の存在に気づいた。

『あら？ 貴女は若しかして、鳴滝君の妹さん？』

『あらあら、こんにちは。そうです、私は』

『瑠璃子、行くぞ』

挨拶をしようとする瑠璃子を呼んで、踵を返して去ろうとする。だが、何時の間にか
紫陽花の背後にはもう一人の少女がいた。

澄んだ董色の瞳に真白い肌。勝気そうな、カナエと同じ蝶の髪飾りをした其の少女は

胡蝶しのぶ。カナエの妹だった。

通せん坊するしのぶに、更に紫陽花の顔が嫌そうに歪む。

『姉さんが話しかけているんです。ちゃんと会話してくださいと何度も言っているでしょう。其の耳はお飾りなんですか?』

『ちよつとしのぶ。駄目でしょう』

『姉さんは黙ってて。此の人が悪いのよ。折角姉さんが声をかけてくれたのに、会話以前に目すら合わせないなんて、失礼にも程があるわ』

むすつと不機嫌顔のしのぶを見て、瑠璃子が申し訳無さそうに、そろそろと紫陽花の左後ろから出て来た。

『ごめんなさいね。紫陽花さんは会話が不得意なんです』

『はあ? 何で貴女、家族に対してそんなに余所余所しいんですか?』

『えつとねえ、一応妹なんですけど、事情があれこれあつて』

『瑠璃子』

名前を呼んで窘めると、瑠璃子は困った様に微笑んで『あらあら、申し訳ありません』と小声で謝罪した。

其の様子にしのぶは怪訝そうに紫陽花と瑠璃子を交互に見る。

『行くぞ』

『はあい』

『ちよつと……!』

妙に距離感が可笑しい鳴滝兄妹にしのは再び声をかけようとしたが、其れよりも先にカナエが声を掛けた。

『鳴滝君、また無茶な事をしたって聞いたわ。怪我はしてるの?』

『言う必要は無い』

『何時もそう言うじやない。本当に大丈夫なの?』

『同じ事を二度も言わせないでくれ。鬼を殺す時間が無くなる』

紫陽花の遠慮の無い言葉に、しのぶの顔に怒りが滲み出る。其れでもカナエは心配そうに彼を見ていた。

『瑠璃子、行くぞ』

『はあい。えつと、本当にごめんなさいねえ。後で兄には言っておきますので』

カナエから離れる紫陽花の背を追いつつ、瑠璃子は胡蝶姉妹に謝りながら、去っていった。

二人が消えると、しのぶが声を荒げた。

『何なのよあれ! 鳴滝さんもそうだけど、あの人もなんなの!? 兄に対してあんな態度! 如何なってるのよ鳴滝家は!』

『まあまあしのぶ、落ち着いて。可愛いお顔が台無しになっちゃうわ』

にここにご笑う姉に対して妹は思つた儘を言う。

『だって可笑しいじゃない！兄の後ろに一步下がってる姿なんて、まるで従者じゃない！妹に対する態度でも、兄に対する接し方でも無いわ！あの時はあーんなにスパスパ鬼を斬つていたのに！』

『あら？しのぶはあの子…瑠璃子ちゃんだったかしら？知っているの？』

『うん、任務で見かけたの。大太刀で鬼を殺してたから、記憶に残ってる。あんなに…あんなにかっこよかつたのに…』

しゅん…と何処か悲しそうに言うしのぶの様子に、カナエはあらあらと微笑んだ。

『もしかして…好きになっちゃつたの？』

『なっ！何言ってるのよ姉さん！』

ぼんっ！顔が真っ赤になる妹に、姉は「まあまあ」と嬉しそうだった。

『そんなんじゃないわ！違うの！だ、だってあの時と全然様子違うし！あんなに困つた笑い方しなかつた！そつ、其れを言うなら姉さんだつてそうでしょ！？鳴滝さんの事が好きなんでしょ！』

しのぶの言葉に、今度はカナエの方が真っ赤になった。

『え、あ、し、しのぶ！声が大きいわ！鳴滝君はそうじゃなくてね！何時も鬼を倒して

ばっかりだから心配なの！仲間だし、心配になっちゃって……！』
『其れを『好き』って言うのよ！姉さんの鈍感！』

きやー！と赤く火照った両頬を手で抑える姉に、妹はぶんぶん怒りながらも、嬉しさを感じていた。

カナエは妹の目から見ても、大層美人だ。

鬼に両親を殺される前から、町一番の器量良しで、お花もお箒もお茶だって上手で、町の男達は皆カナエに夢中だった。

然し、慈愛の心を持つカナエは誰を愛する事は出来ても、恋を知らぬ身だった。……そう、『だった』のだ。

—— あの日、紫陽花に助けられるまでは。

柱になる前の話だ。

何時も通りの任務。鬼が複数いて、背後から別の鬼に襲われかけて、あわや喰われると思つた瞬間、紫陽花の刀が鬼の頸を刎ねた。

そして其の儘、半回転し、カナエの肩を片腕で引き、抱きしめ、彼女が戦っていた鬼の頸を斬つた。

鬼の頸が落ちた事を見て、紫陽花は謝罪も何も言わずにカナエを離すと、次の鬼を狩りに行った。

突然の事にぼかんとするカナエは、徐々に早くなる鼓動を感じて、紫陽花の消えた方向を熱っぽく見た。

細身な体とは逆の、肩に触れた男らしいゴツゴツとした手が、抱き寄せられた際に頬に触れた厚い胸板が、鬼を斬る時のあの真剣な目が、カナエの頭を占めた。

其の日から、カナエは紫陽花の事を思い出す度に、白い頬に紅がほんのりと差す様になった。

しのぶは其の事に気づいた。何故なら遠くにいた紫陽花の姿を、姉が熱っぽく見つめていたのだから。

最初はとても驚いたし、姉を取られるかもしれないと嫉妬した。

—— 何より鬼殺を優先するあの男が怖かった。

怒り・憎しみ・絶望を宿した其の眼で、鬼を殺す。あの男がとても怖くて、『鬼を全殺する』事を掲げているあの人が、『鬼と仲良くなる』事を目標とする姉と似合わなくて。もっと、もっと良い人がいると思っただが、しのぶはカナエの初恋を応援する事にした。例え彼が、カナエを嫌っていても——。

でも、其れは或る夜に、血塗れの紫陽花が、同じ様に血塗れのカナエが、隠に背負わ

れて、帰ってきた時に、其れは変わったのだ。

春先の話だ。

夜、カナエが任務でそろそろ帰ってくると思えば、鑓鳥に教えてもらったしのぶは屋敷の外に出て、門前で姉を待っていた。

（まだかな、まだかな。姉さんまだかな？カナヲも待つてたけど、もう眠そうだったし、寝かせちゃった。でもカナヲ、まだ体が小さいから睡眠取って、成長を促さないよ）

この前、人売りから救出した妹の姿を思いつつ、姉を待っていた。

すると、ばたばたと走ってくる足音が聞こえて、しのぶはカナエが帰ってきたと笑顔で其方の方向を見たが、直ぐに其の笑顔は消えた。

二人の隠が、血塗れになったカナエと紫陽花を背負っていたからだだった。

『見えたぞ！屋敷だ！』

隠が慌てて屋敷前までやってくる、ゼーゼーと荒い呼吸をしながら、膝を付いた。

『（姉さん!?な、鳴滝さん!?何が…!）』

『（い）ほっ!』

背負われた紫陽花が口から血を吐く。びちゃびちゃと多量の血を地面に落ちる。其

の量にしのぶは悲鳴を上げかけた口を手で覆った。

『鳴滝様っ!!』

紫陽花がまた、血を吐く。其の量に背負っている隠が悲鳴を上げた。

隠達は二人を地面に下すと、慌てて治療道具を取りに行く。『死なせるな！早く道具持って来い!』『お湯だ！お湯寄越せ!』と怒号が飛び交う。

しのぶは慌てて駆け寄ると、カナエを抱きしめ、紫陽花を見る。

『姉さん！姉さん！鳴滝さんまで……！一体何が……!?!』

涙を浮かべて二人を見るしのぶ。

其の質問に紫陽花は口から血を流しながら、言った。

『じよ、上弦と、た、戦った……！かはっ』

びちゃつと血がまた溢れる。

『は、いが、やられて、こきゆうが、つかえなくて、うつ、さき、に、いた、こちよ、もおなじよ、うに……!』

『鳴滝さん！無理に喋っちゃ……!』

『そしたら……！瑠璃子が……！瑠璃子が……!』

——
おれたちを、にがす、ために、のこった…っ!!!

其の言葉に、しのぶは青褪めた。

脳裏に浮かんだのは、困った様に笑うあの時の瑠璃子の顔だった。

第六話 紫陽花瑠璃、叶え偲ぶ 一痛叫一

ねえ、紫陽花さん。貴方はきつと鬼が憎いのね。気持ち、とつても判るわ。私も、そうよ。

本当はね、あの鬼がとつても憎いの。あの月色の肌と真つ赤な目の、あの鬼が。

何とか笑つて誤魔化してたの。そうしないとね、義勇や鏑兎や、私の好きな人達が心配しちやうから。

我慢してたのよ。いくら両親を殺した相手だとはいえ、元は人だった鬼を憎むのは、本当はいけない事なんじゃないかって。悪い事なんじゃないかって。

だからね、紫陽花さんに出会つた時、本当はちよつと安心したの。

大事な人を奪つた鬼を許すなど、其の身で言っている貴方を見てね、安心しちやつたの。

嗚呼、そんな風に思っても大丈夫なんだって。

貴方の話は母さんから聞いているの。旦那さんが、貴方のお父さんが鬼に殺されてしまったって。自分が間に合わなくて、父親が殺される瞬間を見させてしまった紫陽花を傷つけてしまった事を後悔しているって。

もつと家族を大事にすれば良かったって後悔して、鬼殺隊を辞めたって。

母さんは父親を失った貴方を支えようとして、鬼殺隊を辞めたけど、もう遅かった。

貴方は其の復讐心を抱いた儘、もう家を出てしまったから。母さんは泣いたそうよ。

ごめんなさい、ごめんなさいって、貴方を想って泣いたのよ。

本当の事言うとな、初めは母さんを泣かせた貴方がちよつとだけ許せなくて、会ったら何か言う心算だった。

でも、貴方も苦しかったんだって出会った時に初めて判った。

当然よね。大好きな人を奪われて、苦しくない人なんていないもの。

貴方はずつと其の悲しみに捕らえられて、其れでも父親を殺した鬼を許せなかった。だから十年も鬼殺隊にいた。怪我をしても、斬る事を止めなかった。

貴方は無我夢中でやってきたのだろうけど、其れは凄いなよ。

——毎日毎日技を磨く貴方を、私、とても尊敬しています。

寝る事も惜しんで、努力し続ける貴方がとつても凄い事を知っています。刀の手入れを欠かさずにやっている貴方の背中を知っています。

鬼に殺された同期の人の、墓参りに行く貴方の顔を知っています。

冷たくて、本当は優しい紫陽花さん。私の、お兄さん。

兄様って呼びたいな、なんて我儘だから。

せめて、この身で守らせてください。

——
貴方を、彼奴なんかにあげない!!

『うわあ……綺麗な髪だね！瑠璃色の髪だ！珍しい！ねえ、君、名前は？』

煩い、目障りな声。

意識が戻ると、俺の隣に胡蝶がいて、俺の前には瑠璃子が立っていて、虹色の瞳を持つ、あの上弦と向き合っていた。

『あれ？照れてるのかな？あ、後ろにいる二人を救わなきゃいけないんだよ。ちよつと退いてくれる？』

『退く訳ないじゃない』

初めて聞いた、低い声。

少なくとも、瑠璃子がこんなに声を低くする所なんて、知らなくて。ちよつとだけびつくりした。

瑠璃子が、刀を抜く。まさか……戦うつもりなのか…!?

『二人を貴方にあげる義理なんて、私には無いわ』

『いやあ、実に君、かつこいいぜ!でも、勝つと思っている?俺、一応上弦なんだけど』
『知らない』

駄目だ、瑠璃子。

相手は上弦だ、お前が勝てる訳無い。俺も胡蝶もそいつに肺をやられたんだ。お前もやられてしまうぞ。

頼むから、逃げてくれ!!

『救済？ふざけないで、貴方が行っているのは、救済と謳うだけの惨殺。よくも、よくも
——兄様を！』

—— 初めて、兄と呼ばれた。兄、と呼ばれたのは何時以来だっただろう…？

そうだ…もう何年も家に帰ってないや…吹雪は、どうなってる…？

……………顔が、もう思い出せない…。それくらい、俺は…………。

『兄？あ、其の女の子を庇ってる奴の事？中々強かったけど、直ぐにやられちゃって。女の子も同じだったよ』

笑う鬼。嗚呼、本当に耳障りな声！顔！目！！

煩い！煩い！俺の事は笑えばいいさ。だが胡蝶の事を馬鹿にするなよ!!!

女で、努力で、柱まで上り詰めた、すごい奴なんだぞ！馬鹿野郎！！！！

『紫陽花兄様を馬鹿にしないで。此の人はずっと強い。復讐心を糧に、努力を続けた、凄く強い人なの！』

—— お前、そんな事思ったのか…？ずっと…？弱くて、父さんも守れなかったのに…：俺を、強いつて…。

視界が、滲んだ。

『兄様生きて。もう直ぐ隠の人が来るから胡蝶さんと生き延びて』

瑠璃子の言葉に驚く。何を言ってる…？

『私が何とかするから。逃げて、生きて』

やめろ、瑠璃子。やめてくれ！

『兄様——生きて帰るから』

其の背中が、父さんと重なって見えて、

——
海の呼吸 壺ノ型 白波しらなみ

海の呼吸が、上弦に襲い掛かった。

『……………あ、がつ……………こ、こちよお…！』

隣で倒れる胡蝶を見る。

彼奴は胡蝶を食う心算で、其れが気に食わなくて、俺は彼奴に襲い掛かって、呼吸が出来なくなつた。

『こちよお……………がはっ……………』

伸ばして、小さな手を握る。女の子らしい、小さな白い手は今は赤くなっていた。呼吸も小さくて、今にも死にそうだった。

謝りたかった。ずっと、無視してごめんって言いたかった。

俺な、女の子と話した事無かったんだ。ずっと鬼狩りの特訓してて、女の子と関われなかったんだ。

だって、お前、凄い美人だろ？どう話したらいいか判んなかったんだ。

……あと、お前の考えも判んなかったから、避ける様になった。

でも、お前は俺にいっぱい話しかけてくれた。

俺が無愛想な態度をとっても、お前の考えが嫌いだって真正面から言っても、何時も笑顔で話しかけてくれたよな。

あれ、実はちよつと嬉しかったんだよ。

だから、もう一度で良い。もう一度だけ、俺に話しかけて、笑ってくれ。

『……………しぬな……………死ぬなあ……………！……………死ぬんじゃない……………つかない……………！』

其処で俺の意識は切れた。

*

嫌い嫌い嫌い！此奴大嫌い！！

兄さんを！！胡蝶さんを！！傷つけた！！

大っ嫌い！！

ひゅんひゅんと瑠璃色の大太刀が頸を狙うが、全て避けられてしまう。瑠璃子は顔を悔しきで歪ませた。

真っ直ぐな憎悪をぶつけて、斬りかかってくる瑠璃色の少女に上弦——童磨^{どうま}は笑った。

可愛いなあ、可愛いなあ。愚かで、真っ直ぐで、ちつちやくて、可愛いなあ。食べたいな、食べたいな、あの子をぱくりと食べたいなあ。

『ねえねえ、名前を覚えておくれよ！じやないと勝手に呼んじやうよ？』
『教えないわ！』

—— 海の呼吸 肆ノ型 波打ちなみうち

瑠璃の刀先が童磨の頸を狙うが、ひよいと軽く避けられ、舌打ち。かれこれ、もう2時間以上この追いかけてっことをしている。

『逃げないで！其の頸落としてあげる！』

『おお、怖い怖い。でもそんな顔も可愛いよ』

『黙ってちようだいなっ！』

肆ノ型 波打ちなみうち 三波さんば

波打ちの進化版、三波。刺突技である波打ちを一気に三回打つ、白波と同じく瑠璃子の得意技の一つ。

二波は童磨の体を二回刺し、最後の三波目は童磨の体を貫く。やっと当たった攻撃に

瑠璃子は口角を上げたが、其れは童磨も同じで、わざと誘われた事に気づいた。

(しまった——！)

刀を抜こうとしたが、其れより前に童磨の手が瑠璃子の右手首を掴んだ。

『捕まえた』

ぐつと童磨の手に力が入る。

童磨からすれば軽く力を入れてただけだが、鬼と人の力の差は大きい。鬼に握られた瑠璃子の右手首は、

ごきんっ!!

嫌な音が響き渡り、瑠璃子の顔が苦痛に歪む。

『あ、あっ!!!』

骨が、折れた。

歯を食いしばるが、激痛が走り、手首から段々力が抜けていき、手から刀が落ちた。

童磨はにんまり笑って、ぱつと手首を離すと、瑠璃子の腹に蹴りを入れた。『かはっ』瑠璃子の口から血が溢れる。臓器に傷が入ったのだ。軽い体は飛ばされ、地面に落ちた。

ずきずきと痛む腹を押さえながら、左手首を使って上体を起こそうとするが、一気に距離を詰めた童磨が片手で瑠璃子の両手首を纏めて握った。

『ちよつと邪魔だから、縛るね』

ぴきぴき。両手首が冷気に包まれて、冷たくなっていく。瑠璃子の手首には氷の手錠が掛けられていた。

(氷を操る血鬼術：!?)

何とか抜け出そうとするが、氷は地面にまで広がり、硬く、また体への痛みで満足に動かせず、ただもがくだけだった。

童磨が、瑠璃子の両足を跨ぐ様に足に乗る。

『あはは、これでおしやべり出来るね』

『っ離しなさい!』

もがく瑠璃子を見て、童磨は頬を紅潮させた。

『可愛いなあ、可愛いなあ。瑠璃の君は可愛いなあ。ちっちゃくて、愚かで可愛いなあ』
恍惚の表情で見下ろす童磨。

『目がくりくりしてて』

目尻に指先が滑り、

『ほっぺたがもちもちで』

ふにふにと指の腹で押し、

『唇がとつても美味しそう』

不埒な指が血の付いた唇に触れる。瑠璃子は顔を歪める。

兄を、カナエを傷つけた野郎に触れられると言う屈辱を受けてながらも、ギツと童磨を睨む。

睨まれた張本人はにこつと笑うと、何時の間にか手に持っていた金色の鉄扇を振るつた。

—— 次の瞬間、瑠璃子の上半身には複数の切り傷ができていた。

『あ、あ、あ、っ!! (斬られた!? 一気に!?)』

苦痛の悲鳴を上げる瑠璃子。腕や顔が千切れるまでの損傷では無いが、一部の切り傷が深い。ぶしゆりと溢れた血を童磨は指で掬うと、舐めた。

はあ…と恍惚のため息が零れる。

『美味しい…甘くて柔らかくて…やっぱり女の子は美味しいなあ』

其の言葉に、童磨が好んで女を食べている事に瑠璃子は気づいた。

『(まさか、それでカナエさんを狙った?)』

『ねえ、瑠璃の君。我慢比べをしよう！』

突然の提案だった。怪訝そうな顔で見えてくる瑠璃子に童磨は笑った。

『なあに、簡単だ。——俺は君をゆつくりと斬る』

ひゅっ。息を呑む。

『なあに、ちゃんと死なない様にするよ。手足も引き千切ったりはしない。其の代わり、君は我慢する。『参った』とか『いやだ』とか言ったら君の負け。俺は君の名前を聞く。言わないなら君の勝ち。見逃してあげる。時間は…そうだな、朝日が昇る直前まで』
につこり。無邪気な笑みを浮かべる童磨に瑠璃子は————無理矢理笑顔を作った。

泣くな、喚くな。此奴の前では弱味を見せるな。

少なくとも、笑えば、私の勝ち。

『良いわよ、遊びましょう、上弦さん』

——
兄様、カナエさん。どうか生きていてね。

「急げ！瑠璃色の髪の子だ！」

「俺は南に行く！お前は北の方に行け！周辺の搜索を怠るな！」

「見つけ次第治療！発見したらすぐに呼べ！」

大慌てで、隠達が瑠璃子を探す。

良い意味でも悪い意味でも有名な『あの鳴滝紫陽花』の妹。瑠璃色の髪で、大太刀を持った女性隊士。其の情報を元に隠達が散る。

—— 『甲・鳴滝紫陽花 及び 花柱・胡蝶カナエが上弦と接触し重傷を負った』と

言う情報は既に隠達にも、お館様にも届いており、即座に二人の治療が開始された。

だが、治療室に入る前に紫陽花が、隠の腕を掴んでいった。

『妹が!!瑠璃子が!死ぬ!上弦と戦ってる!!!早く!!!』

其の言葉に更に隠達は慌てた。

鳴滝さんの妹は、確かこの前『己』つちのとになつたばかりの隊士だった筈だと一人が言った。

上弦相手に己が一人で戦っている、と言う前代未聞の状況に、瑠璃子を探す隠達は、内心生存を諦めていた。

—— いた、のだ。

「お、おい!あれ!」

一人が声を荒げて指差す。

指先を目で追えば、其処には——朝日を背負った、一人の少女が、瑠璃子が立っていた。

両足で立ち、左手で刀を持っていた。手首が折れた右腕には髪を纏めていた髪紐が結ばれていた。四肢が、存在している。血塗れで、生きています。

血塗れの少女が立っている姿に隠達は固まった。だが、ごぼりと瑠璃子の口から血が溢れた事で、我に返った。

「は、発見！ 鳴滝瑠璃子発見！」

「急げ！ 急いで治療道具持って来い！！」

「鳴滝さん！ 鳴滝さん！ 聞こえますか鳴滝さん！」

ふらりと前に倒れた瑠璃子を隠が受け止める。其の傷と出血量の多さに受け止めた其の隠は、目を見開いた。

全身を鋭い物で切り刻まれた様な傷が手足どころか、胸元、顔、そして背中にまで。身に着けた隊服がぎりぎり残っている。

特に、背中には大きな傷があった。恐らく治療しても、一生残るであろう傷。

ひゅー…ひゅー…か細い呼吸が、瑠璃子の生存の証明だった。

*

目覚めると、木製の天井が紫陽花の視界に入ってきた。

(何をしていたのだろうか、俺は)

気を失う前の記憶を掘り起こす。

血塗れのカナエ、嗤う上弦の鬼、地面に転がる自分。

—— 瑠璃色の髪の毛、妹の背中。

「っ瑠璃子!! うぐっ」

ガバツと上半身を起こすと、強烈な痛みが紫陽花を襲う。然し、其れに構っている暇は無かった。

「瑠璃子は…! 胡蝶は…!?!」

「つ鳴滝さん？」

声を掛けられた。見ると、其処には青い蝶の髪飾りを付けたツインテールの少女が紫陽花を見ていた。

「君は……」

「神崎アオイです！其れよりも起きて大丈夫なんですか!？」

と、治療道具を持ってアオイが近づいてきた。紫陽花は彼女の両肩を掴むと、聞いた。「胡蝶は!?瑠璃子は!?俺と同じ苗字で瑠璃色の髪をした女の子!」

其の言葉にアオイは、顔を顰めて、目を逸らした。

（おい、嘘だろ……そんなまさか……）

アオイの肩を掴んでいた両手から力が抜ける。紫陽花の絶望の表情にアオイは慌てた。

「違います！生きてます！カナエ様も貴方の妹さんは無事です!……ただ」

「ただ……?」

「……妹さんは出血量が酷くて、しのぶ様が治療したんですが……かなり危ない状況です……」

アオイの言葉に、紫陽花は目を見開くと、バツ!と布団をめくって、ベットから飛び出していった。『鳴滝さん!』背後からアオイの声が聞こえたが、其れを無視して、重傷

人が運ばれる個室の部屋『特部屋』に向かった。

ずきずきと痛みを訴える体を気力で黙らせて、大部屋の前まで行くと、両手で障子を開けた。

中には——包帯を顔まで巻かれ、ひゅーひゅーとか細かい呼吸をする、瑠璃子妹の姿があった。

「あ……」

ああああああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああああああああ
 !!!!!

紫陽花の絶叫が、屋敷に響いた。

*

「あー、可愛かったなあ瑠璃の君！結局勝負には負けちゃったけど、とっても楽しかった
 !」

自室でそう語る童磨。其の顔は晴れ晴れとしており、満面の笑みが浮かんでいる。

結果として、瑠璃子は勝負に勝った。朝日が昇るまで拷問に耐えた。苦痛の悲鳴は上げても、決して『参った』『いやだ』と否定の言葉は口にしなかった。

切り刻んでいく内に楽しくなってしまうて、思った以上に虐めてしまったが、まあ其

れは良しとしよう。だって、彼女は自分に勝つたのだから。

あの柔らかな肢体を食べれなかつた事は本当に残念だが、成長した彼女を想像するとじゅわりと口から唾液が溢れ出す。

もつと綺麗になった瑠璃の君は、もつと美味になる。そう考えただけで体に甘い痺れが走る。

「それに痕も刻んだし、満足満足！」

かなり傷を付けた後、童磨は地面と接触している背中に傷をつけていない事を思い出し、瑠璃子をひっくり返した。此の時はもう既に瑠璃子の意識は切れる寸前であったが、そんな事を気にする鬼では無い。

髪紐が取れて、広がった瑠璃色の髪をゆっくり退けると、『滅』の文字が見えた。童磨は鼻歌を歌いながら、広がった鉄扇で『滅』の文字を切り裂いた。

現れた真白い背中を『綺麗だね』と褒めつつ、そつと鉄扇を右肩の後ろに添えて、時間をたつぷり掛けて斜めに裂いた。

其の日一番の悲鳴が上がる。ぶちぶちと肉が裂ける。ぶわりと濃くなる血の匂いにくらくらした。

左脇腹近くまで斬ると、鉄扇を退かした。綺麗に斜めに入った裂傷に童磨は興奮した。

『俺の事忘れないでね。俺も君の事、忘れないから』

愛しい恋人に掛ける様な、甘い言葉を口にして、背中の傷に口付けて、朝日が昇る前に童磨は消えていった。

———その後、瑠璃子の口が『だいきらい』と呟いた事を知らずに。

「また会いたいな。会えるよね、だってあんな情熱的な目で俺を見てくれたし。嗚呼、此れが恋ってやつなのかなあ……！今度はきちんと名前を呼んであげたいなあ」

ねえ、瑠璃の君。

上弦は、
鬼は嗤った。

第七話 紫陽花瑠璃、叶え偲ぶ ―永愛―

「鬼殺隊と縁のある医者や薬師くすしにも手を尽くしてもらいました。診断結果は『右手首の骨折』、『全身裂傷』、『両手首の凍傷』、『出血多量』…そして、『意識不明』。背中には大きな傷が出来てしまつて…治療をすれば傷は薄くなりますが、一生傷跡が残ると思われ
ます…。…：…本当にごめんなさい、鳴滝さん。私をもつと薬学に精通していれば、彼女の体に傷を残す事なんてなかつたのに…：…」

しのぶの言葉に紫陽花は首を横に振つた。

覇氣のない其の背中に、しのぶは思わず目を逸らし、静かに特部屋から出て行つた。部屋には冷たく、重い空気が流れる。音は、瑠璃子がする呼吸だけ。

―― 瑠璃子が眠り続けてから、一カ月。紫陽花は片時も傍を離れる事はしなかつた。

全身に薬を塗つた包帯を顔まで巻かれていたが、つい先日やっと顔の包帯が取れた妹の寝顔は苦しそつた。

傷が熱を帯び、瑠璃子を蝕んでいる。汗を拭くと、ほんの少しだけ苦痛の表情が和ら

いだ気がした。

俺は馬鹿だった。鬼を狩り続けて、強くなった気になって、家族を放った罰がこれだ。何で俺じゃない。何で俺じゃなくて、瑠璃子なんだよ……。此奴は俺と胡蝶を守ろうとしてくれただけなのに。

俺は——呼吸と刀が使えなくなったただけなのに。

あの後、詳しい治療結果が紫陽花に伝えられた。

『貴方はもう二度と、全集中の呼吸は使えません。利き手の左手も、其れによる後遺症で麻痺が一生残ります。鬼殺隊である貴方に言うのは悩みますが……普通の生活ならば問題は無いでしょう。左腕の麻痺も、訓練をすれば多少は良くなります。……ただ、妹さんの場合、何時目を覚ますかは医者の中でも判りません。……覚悟だけは、しておいてください』

左腕は兎も角、全集中の呼吸が二度と使えないと言うのは、実質上、鬼殺隊の引退を表している。カナエも左腕の診断を除けば、同様の結果だった。正直、命あるだけ有り難い診断結果だった。

だが、瑠璃子は違う。生命線がぎりぎりの状態で、今は辛うじて生きている。だが、何時、容体が急変するか判らない。《覚悟》だけはしておいてくれ、と警告された。

可笑しいだろう。だって瑠璃子は何もしていないんだ。守ろうとしたただけだ。そうだろう？

罰を受けるべきは俺だ。俺が本来、家族に費やすべき時間を、私怨で鬼殺に費やしたから、家族を無視したから。

頼むよ、連れて行かないで。妹は約束してるんだ。大事な人に生きるって約束をしてるんだよ。だから。

其の日からずっと、紫陽花は瑠璃子の傍を離れない。離れられなかった。

「瑠璃子……ごめん……本当に……ごめん……」

項垂れて、何度も謝罪を繰り返す。

まだ、瑠璃子の呼吸は不安定だが、気紛れで教えていた『全集中・常中』が僅かながらも出来ている事から、幸い傷の治りは常人より多少は早いだろう。其れでも油断が出来ない。

紫陽花は、眠れぬ日々を茫然と過ごしていた。

「なあ、瑠璃子。さつき、鱗滝さんの所にいたって言う二人組が来たよ。お前、水柱候補といたんだな……」

この特部屋に入れるのは、紫陽花やしのぶ等、極一部の人間だけで、お見舞いは出来ない。

だからさつき見舞いに来た二人は紫陽花と別室で話していた。水柱候補として名前の上がつている二人組だった。

まさか、瑠璃子と暮らしていたとは思わなかったけど。

『あの、誰かいますか？ 鳴滝瑠璃子の容態を聞きに来たんですけど……』

その声に、紫陽花は重くなった体を動かして、出入り口の障子を開けた。

其処に立っていたのは紫陽花よりも年下の少年二人。穴色の髪の子と、黒髪の子。鍔兎と義勇だった。

『お前達は……柱候補か。瑠璃子に何の用だ』

何日も寝ていない所為で、濃い隈が浮かんだ生気のない目に見下された二人は、びくつと若干怯えたが、彼の背後で寝る瑠璃子の姿を見て、目を見開いた。

『つ瑠璃子さん!』

中に入ろうとした鍔兎を手で制し、紫陽花は後ろ手で障子を閉める。

『中には入れない。入れるのは俺か胡蝶の妹か医者くらいだ』

『あ、す、すみません。気が動転して』

『…瑠璃子さん』

しゅんと落ち込む義勇の手には花束。其れを見た紫陽花は暫く黙って、はあ…とため息をついた。

『隠はいるか?』

『此処に』

しゅつと現れた隠に紫陽花が言う。

『少し部屋を開ける。瑠璃子の事を見てやっててくれないか? 容体が急変したら俺と胡蝶しのぶに伝えてくれ』

『畏まりました』

隠は一礼すると、障子を開けて特部屋の中に入っていった。

『……話をしよう。俺は鳴滝紫陽花。瑠璃子の兄だ』

『貴方が…』

そうして、紫陽花は二人を連れて、一旦別部屋に移動した。途中遭遇したしのぶに義

勇の花束を渡し、花瓶に入れてくれと頼んでおいた。

其処で聞いたのは、鏑兎と義勇が瑠璃子と鱗滝の元で暮らしていた事。

瑠璃子が両親を惨殺されて、鱗滝の元へ命からがら逃げてきた事。

自分達の面倒を見て、励ましてくれた事。

自分達の最終選別試験の後、雪音がやってきて、海の呼吸と両親について聞かせてくれた事。

雪音と養子縁組をして、鳴滝家に行った事。

鬼殺隊に入るまでは手紙のやり取りをしていた事。

…紫陽花の事が、ちよつと怖いけど、嫌いじゃないと言っていた事。

話を聞き終わると、紫陽花は片手で目を覆った。指の隙間から涙が零れる。

そうか、瑠璃子はそんな経験があったのか。

全然、全く知らなかった。義理とはいえ、兄と呼んでくれたあの子が…。

紫陽花は涙を少し乱暴に拭くと、二人に対して謝罪した。

『本当に…申し訳無い。瑠璃子をあんな状態にした原因は俺にもある…。医者から油断

するな、覚悟だけはしておけと言われた』

告げられた言葉に、錆兎と義勇の顔が蒼褪める。義勇の口から『嘘だ…』と零れた。『相手は上弦だった。瑠璃子は俺と花柱を逃がす為に、一人で残った。朝日が昇るまで耐えきつたんだ…。だが、傷が酷くて…血を出し過ぎて…背中の傷は一生残る、と…』

『そんな…』

『すまない…本当にすまない…。俺がちゃんとしていれば…！』

『瑠璃子さんは死なない』

唐突に、義勇が言った。錆兎と紫陽花の視線が其方に向く。

『瑠璃子さんは絶対に死なない。先生と約束した。生きて帰ると約束した。瑠璃子さんは俺達との約束を破った事は一度も無い。無い。……ぜつたいに、おれたちや、せんせいをおいて、いかない…』

太腿の上に乗せた拳をぎゅっと握って、目尻に涙を浮かべた義勇が言う。其れはまるで自分に言い聞かせている様だった。

錆兎が義勇の背中を擦る。紫陽花は再び溢れる涙を拭かず、何度も頷いた。

「目が覚めたら教えてくれだってき…。仲が良いんだな。俺は友達もいなかったから、ちよつとだけ羨ましいよ」

困った様に笑う紫陽花。瑠璃子はまだ、答えない。

「…なあ、瑠璃子。俺さ、胡蝶とちやんと話すよ」

そつと包帯を巻いた手を優しく握る。

「俺、胡蝶と話すの、凄く怖いんだ。だって、いつも俺の口からは悪い言葉しか出てこないし…正直今でも胡蝶の考えは判んない。でもさ、話しかけてくれるのは嬉しいんだ。あんな美人に話しかけられるなんて男冥利に尽きるだろ？胡蝶は凄いんだぞ。女の子なのに、頑張つて柱にまで登り詰めたんだ。瑠璃子も女の子だから、胡蝶はきつと良い先輩になるよ。妹の方とも仲良くなれるさ。胡蝶の花の呼吸は綺麗なんだ。綺麗な彼奴にぴつたりだ。水の呼吸派生だから、話が進むよ。俺も彼奴も隊士は引退するけど、話し相手くらいにはなるさ。」

あ、あと俺な、彼奴の笑った顔がすごく好きなん」

ガシャーんツ!!!

「だ……………ん？」

何かが落ちる音がして、紫陽花は振り返った。

——其処には、お茶が入っていたであろう二つの湯呑を落とした、顔を真つ赤にしたカナエが立っついて、

紫陽花も、真つ赤になつて叫んだ。

「何でいるんだよおおおおお!! えっ!! いつ!! いつ入ってきた!! あれ俺感覚鈍ったかなあ!! 最近訓練してない所為!! ごめんなさいねええええ!! 鳴滝家の恥だわ俺えええええ!!」

「ち、違うのよ!? 鳴滝君は悪くないの!! わ、私が勝手に入ってきちゃっただけなの!! 瑠璃子ちゃんに話しかけてるから邪魔しちや駄目かなつて思つて黙つていただけなの!!」
「ごめんなさい!!」

「いやいやいや違うから!!! 俺が眠つてる瑠璃子に一人寂しく話しかけただけだから!!! 胡

蝶は悪くないから！え、あ、いや、待て待て、も、もしかして今の全部聞いてた……？」
ふるふる震えてながら言った紫陽花の質間に、カナエもふるふる震えて——小さく頷いた。紫陽花は床に四つん這いになった。

「いいいいいいいやあああああああ!!!恥ずっ!!!すんごく恥ずかしい!!!穴があつたら入りたい!!!」

「本当にごめんなさあああ!!!」

「胡蝶が誤る必要ない!!悪いのは俺だし!!ひうつ!恥ずかしい!呼吸も左腕も使えなくなった俺が悪い!!!ふええええええっ!!!」

「わ、私が鳴滝君の左腕になるわ!」

「ふええええええええええええ……ええ?」

カナエはずんずんと紫陽花に近づくと、抱き付いた。紫陽花の顔が更に赤くなる。

「こ、胡蝶!?!」

「カナエ!」

「えっ!？」

「カナエって呼んでくれないと離さないから!」

「ふえええええ!？」

あわあわと狼狽える紫陽花。カナエは更にぎゅつと力を込めて抱きしめる。

「鳴滝君だつて凄いわ!努力を欠かさないと、ずつとずつと何年も続けていたの、私は知ってる!でも、でもつ、鳴滝君が一人で戦っているのが私、怖かったの!何時か死んじゃうんじゃないかって!私を置いて一人で死んでしまふんじゃないかって!」

紫陽花がびたりと止まった。

「皆もしのぶも貴方が怖い人だつて思ってるけど、私は違うわ!貴方が鬼を斬るのは、過去の自分を否定したいからでしょう?見て判ったわ、あんな、自分を傷つける様な戦い方してるから…。あの日、助けられた後から貴方の戦い方を知ってるの。何であんなに自分を痛めつける様な戦い方をするんだらうつて、ずつと疑問に思っていたわ。でも、見ていくうちに、もしかして殺したいのは鬼じゃなくて、『自分』なんじゃないかって」

——カナエの言う通りだった。

紫陽花が此の世で最も憎んでいたのは鬼では無い——父親を守れなかった、弱い自分だった。

だって弱かったから、父親は死んでしまった。あの時、襲ってきた恐怖で足が動けなくなつて、其れで鬼の格好の餌食となつてしまい、自分を庇つて父が死んだ。

此の世で最も嫌いなのは鬼じゃない。弱い弱い、何時までも弱さに嘆き、叫ぶ小さな自分だった。

「何があつたかは聞かない。でも、覚えていて。此処に、貴方を心配している女がいるつて事を」

「……カナエ……」

名前を呼んだ紫陽花を、カナエはそつと離す代わりに、頬に触れた。涙が伝う、其の頬を。

「好きよ、紫陽花さん。貴方の事が好きです。助けられたあの日から、ずっと貴方に恋していました」

カナエが笑う。

まるで暖かな春の陽射しのような、其の柔らかな微笑みは、愛した父と何処か似ていて。でも、此の胸を締め付けてやまない、感じた事のない感情は紛れなく、父に対する物

とは違っていて。

紫陽花は、震える其の手で、努力してきた傷だらけの手で、カナエの手に触れた。

「カナエ」

「はい」

「今までごめん」

「はい」

「好きだ」

「っはい」

「……………あのお……………良い所ずみばせん……………病人の部屋で……………恋愛
……………しないで……………ぐれ、ませんが……………？」

其の日、特部屋で男女の悲鳴が響いた。

*

「瑠璃子、何処か痛い所は無いか？痒い所は無いか？痛かったら直ぐに言えよ。あ、そう
だ林檎が見舞い品で来たぞ。食うか？」

「……エエ、食ベル」

何故、こうなったのかしら？

「そうか。兄ちゃんが剥いてやるから待ってろ」

「あら、駄目よ、紫陽花さん。左手の麻痺がまだ強いでしょう？私が剥くから貸して」

「あ、ごめんなカナエ。つい……」

「良いのよ、気にしないで」

紫陽花様……ううん、紫陽花兄様がそつとカナエさんに林檎と刃物を渡す。『手、切るなよ』『大丈夫よ』と微笑んで会話する二人を、ベットに寝ている私と隣にいるしのぶちゃん
んは厳しい目で見ている。しのぶちゃんと目が合う。頷き合う。

(病室でイチヤイチヤするんじゃない！)

目が覚めると、何故か兄様とカナエさんの甘酸っぱいラブシーン、然も、告白と言う

とつても熱い場面に、ついつい口を出してしまい、二人を驚かせてしまった私。此れは本当に悪いと思っているのよ？でも、病人がいる病室で告白をしないでほしいわ。もつとこうね、ロマンチックでムードがある場所で行った方が素敵だと思うの。

さて、如何やらあの上弦との我慢比べの後、私は一カ月間眠り続けていたそう。

んもう！本当に痛かったのよ！お姉さんは痛みの耐性がまだあまり無いの！

私の体ザクザク斬つちやつて：あの上弦、絶対許さないんだから！今度会ったらポコポコにしちやうわよ！でも降参しなかつた私、えらいと思うわ。スーパーえらいわ、瑠璃子！

あの我慢比べもそうだけど、私が起きた後も大変だったの。

私起きた事に泣く兄様、慌ててしのぶちゃんに報告しに行ったカナエさん。

三分もしない内にやってきたしのぶちゃんと鬼殺隊お抱えのお医者様。後なんでかカステラを持った隠の人も来た。

兎に角、病室は大パニックに陥ってしまったが、私が水分を求めた事で取り敢えず落ち着いた。

流石に一カ月も寝たきりだったので、筋力がかなり落ちていたけど、機能回復訓練：所謂リハビリをすれば元に戻る、としのぶちゃんとお医者様は言っていた。

今は食事をきちんと食べて栄養取って、体の傷を癒す事が先決だとも言われた。やつ

と重湯からお粥になりました。お粥美味しいわあ。

骨が折れた手首は現在、何とか骨がくつきかけているので、今は動かさしちや駄目だつて。……やつぱり、あの上弦許さない。

後、全治三カ月半と言われた。本当は三カ月だったが、半月伸びた。なんでつて？

—— 義勇が力いっぱい抱き付いてきて、お腹の傷が開いちやつたのよねえ！

其の時の会話が此方。

『瑠璃子さん』（ぎゅーー！）

『ちよ、義勇！傷が！傷が開いちやうわ！うぷっ』

『やめろ義勇！離れろ！瑠璃子さんしつかり！意識を保つて！』

『ちよつと！病室で何騒いでいるんですか!?!』

『瑠璃子さん』（ぎゅぎゅぎゅー！）

ぶしゅー！

『『あ』』』

『あらま——つ!?!』

『瑠璃子さあああああん!!』

…あの時は凄かった。痛みで意識が飛びかけたわ。

義勇がおろおろして、鍔兎が一生懸命私の名前を呼んで、しのぶが義勇を蹴り飛ばして私の治療をしてくれた。

此れが原因で義勇は私への完治するまでの間、『抱き付き禁止令』が出てしまった。これは自業自得ってやつなのよね。

命令を受けた本人はいやいやしていたけど、私がいっぱい抱きしめて、つるつるおでこにちゅーしたら、渋々下がった。

よしよし、義勇は良い子さんね。ごめんなさいが言えてえらいねー。

あら？鍔兎どうしたの？貴方もぎゅーする？しない？そう、判ったわ。……何で落ち込んでいるの？

こほんっ！其れはさておき、嬉しいニュースです。——紫陽花兄様とカナエさんがお付き合いを始めました！

まあ、直ぐ近くであんな熱烈な告白してたから、判ってはいたけど…やっぱり嬉しい物は嬉しい。

あ、あと呼び方も『紫陽花兄様』で良いと許可してもらいました。『今まで冷たくして

「ごめん」と謝られました。私は其の様子に、『やっと、兄妹になれましたね』、と言つたら、紫陽花兄様は微笑んで頷いてくれた。

初めて、他人としてでは無く、家族として紫陽花兄様を見れた。

……でもね、妹の前でイチヤイチャするのはちよつとやめてほしいなあーつて。見てるとなんかムズムズしちゃうの。ムズムズで死んでしまえそう！

とつても素敵よ？美男美女カップルなもの。目の保養には良いの。

……でもね？義理とはいえ、兄の恋愛場面を目の前で見たい？貴方は見たいか？私はちよつと嫌かも。恥ずかしいんだもの！

カナエさんが「はい、どうぞ」と足の上に、綺麗に切られた林檎が乗つたお皿を乗せてくれた。

比較的無事な左手で林檎を掴んで口に運んで、むっしやむっしや。あらー、甘くて美味しい。

「あんまり多く食べちゃ駄目ですよ？まだ完全に胃の状態が前みたいに戻っていないんですから」

「ふあーい」

「食べながら返事しない！右手動かさしちゃ駄目ですからね！何かあったら直ぐ鎚鳥使つて呼んでくださいね？」

「ふおーい」

「もうっ！」

カナエさんが笑う、紫陽花兄様が笑う。

怒っていたしのぶちゃんも次第に笑い始めて、私も笑った。

*

そして、時は流れて現在。

私は紫陽花兄様に用があつて、蝶屋敷を訪れていた。今日も今日とて蝶が舞う。

紫陽花兄様は前線から退く代わりに、蝶屋敷専用の医療隊士となった。所謂後方支援の人ね。

元々この蝶屋敷はカナエさんが柱になった時に建てられたもので、其の時から医療施設として機能しているのだが、いかんせん常に人手が足りない。なので、カナエさんも同じく医療隊士になった。何時の時代も人手不足は深刻ねー。

あと、此の屋敷はしのぶちゃんが蟲柱になった時に、特に工事とかもせず其の形の

儘、譲り受けた物なので、建物内の構造もきちんと頭に入っているの。

兄様がいるのは、医療室。何で其処に居るのかって？簡単よ。だって――

「紫陽花兄様、いる？」

「ん？おお、瑠璃子。いらつしやい。怪我でもしたか？」

白衣を着た紫陽花兄様が此方を向く。――そう、紫陽花兄様は蝶屋敷でしのぶちゃんに次いで、二人目の医者になった。

と、言つても医者のおの卵の様な物だけど。しのぶちゃんも完全な医者じゃないけど、此の鬼殺隊において二人以上に医学に詳しい人はいないから、医者で良いと思うわ。カナエさんは看護師さんなの。

医者と看護師の夫婦、私、人生で初めて見たわあ。白衣の兄様素敵！カナエさんの看護師姿も素敵で可愛い。うふふ、お似合いよ！

因みに兄様は蝶屋敷の医療隊士になる際に、しのぶちゃんに媚を売った。

――鳴滝の図書館にある医療系の本を全部写本した！そう全部！！

無論、家長である母さんからの許可を貰った上で書いた。流石に許可を貰わないと殺されちゃうわね。

鳴滝の図書館にある本は図書館と呼ばれるだけあつて、『海の呼吸の書』以外にも大量にあり、勿論医療系の本もある。しかも、中々手の出せないお宝まであるから、しのぶ

ちゃんそれはそれは大変喜んだわ。鳴滝家の権力は偉大なのね。

曰く将来への投資だとかで、現に其れ等はしのぶちゃんの知識となつてゐる。故にしのぶちゃんは紫陽花兄様に前みたいになくちくちく言えなくなつてしまつた。実に遺憾だ、とこの前愚痴られちやつた。

「ううん、違ふの。母さんからお土産が来て、届けに来たの」

「またか？最近多いなあ…」

「御煎餅ですつて。机の上に置いておくわね」

「おうよ」

御煎餅を机の上に置く。味はお醤油ですつて。

「そう言えば聞いたぞ、吹雪が今年の新人だつてな」

「ええ、また姿は見て無いのだけど。新人名簿見て驚いたわ。そろそろだとは思つていたけど、連絡もしないで入隊するんだから」

鳴滝吹雪なるたきふぶき。私と紫陽花兄様の弟で、鳴滝家の末っ子。一番母さんに似てゐる、可愛い弟の名前だ。

でも吹雪はかなりの問題児で、正直私も兄様も手を焼いているのも実情だつた。

「大丈夫なのか？彼奴、絶対問題起こすだろ？」

「起こすわねー。いざとなれば、身内責任で柱の称号取られるかも…」

「はあ……ありえそうだから止めとけ。何かあったら俺も力貸すからさ」
 ぼんと頭に兄様の左手が乗る。

兄様の左手の麻痺はかなり和らいだ。とは言つても、日常生活に支障があまり無いだけで、肺の事もあり剣は握れないけど。

「そうだ、此の前、煉獄君が来たぞ。『妹さんを俺に下さい!』つて」

「あらまあ」

「ムカついたから、あいくちヒ首で目ん玉狙ったんだけど避けられた。チツ」

「物騒よ」

あらあらまあまあ、嘗ての『鬼殺しの紫陽花』の顔が出ちやつてますよー。

「いいか、瑠璃子。近づく男がいたらこれで刺せ。武器はいっぱいある方が良いだろう?」

そつと私にヒ首……所謂ドスを渡してくる兄様。其の目に生氣は無かった。あらら、怖い兄様になつちやつたわ。

「兄様、落ち着いてちょうだいな?」

「お前に近づく男は全員刺せ。いいか? 錆兎君だろうが富岡君だろうが刺せ」
 「柱が柱を刺したら問題あるでしょう?」

「良いか? 遠慮は要らないぞ? こうな、シユツと、バレない様に刺せ」

「使い方を教え込まなくて良いから。私帰るわねー」

「あ、待て瑠璃子！こっちの藤の毒塗りのやつも持ってけ！コラッ！瑠璃子ー！」

「あ、そうだわ兄様」

「なんだ！」

「結婚おめでとう！カナエさんとお幸せに！」

——
紫陽花兄様は、春の木漏れ日の様な柔らかい笑顔で「おうよ！」と言った。

第八話 乙女の休日

——とっても素敵な女性だなんて思ったの。

瑠璃色の髪に、澄んだ水色の瞳。

しゃんと真っ直ぐ伸びた背筋が凛々しくて。

誰にも優しく、ちよつとしか年が離れていないのにお母さんみたいで。

でも鬼を殺す時はとってもかっこいい。

しのぶちゃんと同じ、強くて可愛くて、凛々しい——とっても素敵な女性。

初めて会ったのは、瑠璃子さんが柱になってから、初めての柱合会議。

鱗滝さんに手を引かれてやってきた瑠璃子さんを見た時ね、私、女神様がやってきた
と思ったの。

綺麗な瑠璃色の髪が綺羅綺羅してて、本当に素敵でとてもときめいたの。

女の子の柱は私としのぶちゃん以外にいなかったから、仲良くなれたら良いな、たくさんおしゃべり出来たら良いなって。

『こんにちは。海柱になりました鳴滝瑠璃子です。甘露寺さん：ですよね？宜しくお願ひします』

そしたら瑠璃子さんの方から話しかけてくれて、私嬉しくて嬉しくて、手を握って『宜しくお願ひします！』って挨拶したら、ふんわり笑って、『此方こそ』って言ってくれて、凄くキュンキュンしたの。

だから、鱗滝さんや不死川さんが好きになっちゃうのも判る。皆が瑠璃子さんを好きになっちゃう気持ち判る。

実は、師範から瑠璃子さんの事、聞いていたの。背筋が綺麗な、自分の許嫁なんだって。あんな師範の目は初めて見たの。

とつても甘くて熱くて、ドキドキしちゃった。本当に炎の様に燃える、熱い恋をしている瞳だった。

でも、瑠璃子さんが柱になっちゃったから、婚約破棄って聞いた時はびっくりしたけど、其れでも師範は諦めてなくて、なら自分の力で瑠璃子さんをお嫁さんにするって言ったから、更にキュンキュンしたの！流石師範！

だからね、鱗滝さんと不死川さんには申し訳ないけど、師範を応援してるの。

…でもでも、今日だけは私だけの瑠璃子さん。蜜璃だけの瑠璃子さんになってくれる日！師範、ごめんなさい！

*

「恋柱様とお出掛けですか？」

「ええ、明日行つてくるわね。突然で申し訳無いけど、お昼は用意しなくていいから」

「畏まりました。では、明日の朝食と夕食は軽めのものを御用意します。女性同士なら、おやつも食べるでしょうし」

「有難う、獺岳」

「姉御前の為ならばいくらでも！」

キラキラ笑顔の獺岳は今日も可愛い。しかもその後の事もちゃんと判つてる。えらいえらいつて頭を撫でたら、ふくふく笑うからもっと可愛い。

えっ？継子鼻肩だつて？其れはしちやうでしょう？自分の子が可愛くて何が悪い。ぶんぶん！

其れにしても、獺岳は割烹着似合うわあ。

確かに似合うかなつて思つたから送つたけど、まさか思つた以上に似合うなんて。う

ちの継子のポテンシャルが高くて、お姉さんにつこり、心はぼつかばか。

さて、話を戻すと、明日は蜜璃ちゃんとのデートです。二人っきりの。

本当はしのぶちゃんも誘ったらしいけど、如何やら最近怪我人が多くて忙しいらしい。

カナエさんも兄様も忙しいそう。此の前、お土産のお菓子を渡して喜んでくれたすみちゃん、なほちゃん、きよちゃんの三人娘ちゃん達の情報なので、確かなのでしよう。

そもそも鬼殺隊では負傷なんて日常茶飯事だし、怪我人が少ない方が珍しいけどねえ。

なので、蜜璃ちゃんと二人っきりでお出掛けです。女の子と二人でお出掛けなんて、久しぶりだわあ。

蜜璃ちゃんはいっぱい食べる女の子だから、明日はきつと色んなお店に行くわね。お金を後で確認しないと。

因みに柱の場合、お給料は此方が望んだ分、無限に貰える。お館様は太っ腹ねえ。此の人が上司で本当に良かったわあ。なので、いっぱい食べる蜜璃ちゃんは沢山貰っているらしい。

しのぶちゃんも蝶屋敷の維持や医療道具の補充の為にいっぱい貰っているそう。

無償で治療してくれる蝶屋敷の維持は大事なので、お姉さん納得。包帯とかは使い捨

ての消耗品だからね。衛生管理がちゃんとしてる。

嘗て、上弦事件の際にも其の後の任務の時にもお世話になつてる。：あらやだ、上弦
 思い出したらイライラしてきたわ。彼奴は生きてる。勘と背中傷が言つてる。あら
 やだ、私つたら痛い発言してる！

なお、私は生活出来る分と獺岳の分、貰つている。屋敷を貰つている以上、其処まで
 は金子の必要性が無い。

勿論、月に一回獺岳にお小遣いは渡しているし、食費は此方から出している。だって、
 獺岳の作るご飯は美味しいもの！

此の前、『乙』になつたので、お給料も少し上がつている筈。やったわね！もうすぐで
 『甲』よ！甲になつたら、私がいっぱいご飯作つてあげるわね！

其処でふと思つた。

(あれ？ちよつと待つて。……如何しよう、何を着て行こうかしら……?)

そうだわ、服、如何しましょう？

別にお出掛け用の服が無い訳では無い。無いのだけど……何を着て行けば良いのかし
 ら？あれ？なにがあつたつけ？

誰かに選んでもらうにも、しのぶちゃんは忙しいわよね？カナエさん、アオイちゃん、
 すみちゃんなほちゃんきよちゃんも忙しいわね？いつその事、蜜璃ちゃんに選んでもら

う？

……ううん、待つて。…いるじゃない。私と仲良しな素敵な女の子が！

次の日の朝。嶺岳特製の朝食（軽め）を食べた三十分後に、救世主は現れた。

「呼ばれて来たよ〜」

「真菰ちゃん、来てくれてありがとう〜」

そう！鱗滝一門の真菰ちゃん。今日も可愛いわよ〜。

真菰ちゃんは私と鏑兎と義勇の妹弟子にあたる子。

嘗て、最終選別試験を受ける前に幾らか修行を見たのだけど、中々素早くて、最近の子の成長は凄いわねえと思いつつ、其の速さを生かした戦術を幾らか提案した。凄いのよ、一瞬で覚えちゃって！

真菰ちゃんには才能があつたのねえ。よしよし良い子、凄いい子。お姉さんの胸に飛び込んでおいで〜。きやつ真菰ちゃん可愛い〜え？私の胸つて大きいねえ？やわやわでぶにぶに？癖になつちやう？良いわよ、ほらほらぎゅ〜！きやつきやつ。

なんて、事もあつたわね〜。真菰ちゃんは可愛い。義勇も可愛い、鏑兎も可愛い。炭

治郎ちゃんも彌豆子ちゃんも可愛い。結局皆可愛いのよねえ。

「恋柱様とお出掛けで、服を選ぶのに困ってるんだよね？お部屋の中に入っちゃって大丈夫？」

「ええ。一応ある服は出しちゃってるから、好きに見て触って良いわよ」

「わーい！」

屋敷の中に入って、私のお部屋まで案内する。ようこそ、私お部屋へ！

起きた時点で既に服は室内に出しているの、あちらこちらに広がっている。中に入った真菰ちゃんは『思ったより多いね』と感想を言った。

「私買った服は少ないけどねえ」

「ん？私『が』買った服は？じゃあ何でこんなにあるの？わつ、小物可愛い！」

「あ、其れね、実弥ちゃんから貰ったの」

途端に真菰ちゃんが固まる。

「……実弥ちゃん？」

「あら？知らない？風柱の不死川実弥ちゃん」

「う、うん、知ってるけど……これを？」

そう言つて、真菰が椿の髪飾りを見せてくれる。其れに頷く。

「そうよお？」

「風柱様って、こんなに感性ある人なんだ…」

「見た目によらずって思ってるでしょ？根はとつても良い子よお？」

「うん。あ、この藤の花の簪は？」

「実弥ちゃん」

「この桜の髪留め」

「実弥ちゃん」

「……この、髪紐」

「実弥ちゃん」

「………風柱様、多くない？」

真菰の言う事は一理ある。確かに多いけど、理由があるのよねえ。

「多分、私の髪を切っちゃった事を気にしてるのかも」

「えっ!? 髪切られたの!？」

「事故よ事故。風柱になる前に下弦の壺の討伐があつてね。実弥ちゃん、其の討伐で凄く頭も気持ちも混乱してて、私に斬りかかっちゃったの。勿論、不用意に近づいた私が悪いんだけど。刀を避ける時にね、ちよつと切れただけ。でも、正気に戻った時に凄く謝ってくれて。『女性の髪を切つてすみませんでした』って。其れからずつと髪飾りだとか送ってくれるの。さつきも言った通り、良い子よ？鬼への殺意が物凄く高いだけ

で」

そう言えば、真菰ちゃんは『そ、そうなんだあ』と納得してくれた。良かった、これで実弥ちゃんが誤解されずに済んだわあ。

「(其れにしてはかなり高そうだね、この髪飾り達。と言うか、簪って…藤の花って…。錆兎、もたもたしてると取られちゃうよ？何なら私がいつその事貰っちゃうぞ？)」

「真菰ちゃん？如何したの？お腹空いた？」

「何でも無いよ。あ、今日の服、これはどうかかな？」

真菰ちゃんが見せてくれたのは瑠璃色の着物。

「これ、とても素敵！瑠璃子に似合うね！」

「あら、其れね。其れ、煉獄君がくれたの」

「ハイ？」

「海柱就任祝いで」

すんつ。真菰ちゃんが真顔になった。

「……これ、幾ら？」

すんつ。今度は私が真顔になった。

「……知らないの。でも高いのは間違い無いわあ」

「これは駄目だね」

「ええ、私でも判る」

そつと、滅茶苦茶気遣いながら着物をしまふ真菰ちゃん。ゆつくり入れてね。…何処かで「よもや！」が聞こえた気がした。あら、幻聴かしら？

「じゃあ瑠璃子さんが持つてる服つてどれ？」

「えつとね、これとこれと…。あ、そうだわ、真菰ちゃん。ちよつとお願ひがあるんだけど」

「なあに？」

私を持つている物を指差して、真菰ちゃんと一緒に服を選んだ。

時は大正。海外文化の物：所謂ハイカラな物が幾らか入つてきているとはいへ、女性は大体和装。なので、取り敢えず和服か袴を選んだ。小物も一緒に選んだ。

久しぶりに女の子と選んだから、すごく楽しかったわ！

「きゃー！瑠璃子さん可愛い！すつごく似合つてる！」

「有難う真菰ちゃん。選んでくれて助かったわ」

「良いの良いの！だつて誰より先に私に見せてくれたし！あ、でも今度は私と二人でお出掛けしようね！約束だよ？」

「勿論、真菰姫の仰せの儘に」

「ふふつ、楽しみ！其れじゃあ私任務に行くね。お出掛け、楽しんできてね！」

任務へと向かった真菰ちゃんと別れ、荷物を持って屋敷を出る。

出る前に獺岳に挨拶すると、膝を付いて拝まれちゃった。「俺の姉御前が尊い……」だとか。獺岳はハイカラ過ぎるワード知ってるわね？行つてきまーす。夕方までには帰つてくるわねー。

待ち合わせ場所は蝶屋敷の門前。あそこが一番待ち合わせ場所としては判りやすい。門に近づくと、既に蜜璃ちゃんが立っていて、私は声を掛けた。

「蜜璃ちゃん、お待たせー」

声に反応して、蜜璃ちゃんが気づいて、可愛い笑顔で近づいてきた。

「おはようございます！ 溜璃子さん！ きゃー！ 溜璃子さん可愛い！ 服も溜璃子さんも可愛いですうー！」

「蜜璃ちゃんも可愛い〜」

「きゃあ！ ありがとうございませす！」

今日の服は袴スタイル。水色の着物に紺色の袴を履いている。小さな白いお花の柄と色合いに一目惚れして衝動買いしてしまった、私のお気に入り。

前世から寒色系の色が好きだけど、海の呼吸……水の派生呼吸を使っている上に鯖兎達も水の呼吸なので、今ではすっかり青や水色はお気に入り。つつい、そう言った色の物を買ってしまう。

蜜璃ちゃんは何時もの髪型だけど、着ているのは控えめな花柄が可愛い薄桃のお着物。帯はクリーム色に近い柔らかい薄黄色。髪飾りもお花。

あらあらまあまあ、可愛いわねえ。妖精さん見たいで愛らしいわあ！

「瑠璃子さんの三つ編み可愛い！私とお揃いだわ！」

「実はそうなのー。蜜璃ちゃんとお揃いにしたくて真菰ちゃんに頼んでやってもらったのー」

そう、服を選ぶ際に真菰に頼んだのは三つ編み。左肩に流す感じでやってもらいました。

私の髪は長い。柱になる前から任務やら特訓やらで、すっかり髪は伸ばしっぱなしで、今では長さが背中の中まである。若干うねうねしているので、お団子にする時はちよつと苦労。

でも獺岳が最近髪のカアやヘアスタイルの勉強もしているので、既に私の髪の管理は彼の仕事。……あら？うちの子有能過ぎ？

「嬉しい！お揃いなんて素敵だわ！キュンキュンしちゃうー！」

「私も喜んでもらえて嬉しいわ。じゃあ、行きましようねえ。今日はいっぱいお話しておやつも食べましようねえ」

「はい！行きましようー！」

こうして、私と蜜璃ちゃんとのデートは始まったのでした。

—— まさか、後ろから見られているなんて気づかず。

「……尊い……甘露寺と鳴滝さんが尊い……何だあれは女神か？妖精か？地上に舞い降りた天の使いか？然もお揃いだと？はあ……尊い……」

「判る。すつげえ判る。拜む。矢張り姉御前は美しい……」

女子二人から見えない距離にある草むらで只管「尊い……」と拜む蛇柱と海柱継子。お前等仲良しか。同士を見つけたオタクか。ただし、二人は同担拒否タイプに近い。一番面倒。

其の二人の様子を錆兎と、風柱・不死川実弥は変な物見たと言わんばかりの表情で見てもしまったが、取り敢えず見ない事にした。其れが正しい判断である。流石は常識人組。

「おい、不死川。何故俺達は甘露寺と瑠璃子さんの後を付け回す様な、男らしく無いマネをしているんだ？」

錆兎がそう聞けば、実弥は言った。

「最近町で物騒な話があるんだよオ。女子供を狙った胸糞悪い奴等がいるらしくて

なア。元々お館様に頼まれていたんだが、瑠璃さんが甘露寺と町に出掛けるつて話して
るの聞いちまつて、ちよつとなア……」

頭をガリガリ搔いて、ハア……とため息を付く実弥。説明を受けた鍔兎はふんふんと頷く。

「確かに其れは見逃せない話だな。二人は柱とはいえ、女性だ。不死川の心配も判らないでもない。よし、二人を見守ろう。何かあればすぐに出来る様にしないとな」

「鱗滝は話が早くて助かる。富岡とは大違いだなア」

「まあ、義勇は言葉が少なすぎて、時折俺でも理解出来ない時があるがな」

「むつ、甘露寺と鳴滝さんが動いた。行くぞ、二人の平穩を守らねば」

「了解です、蛇柱。怪しい奴の処理は任せてください。処理を誰にもバレない方法知ってます」

「乙にしては有能だなお前。鳴滝さんは良い隊士を継子選んだな」

「お前等、仲良くなり過ぎだろオ」

やっぱり実弥は突っ込み型だった。

*

「美味しいですね瑠璃子さん！」

「美味しいわね、蜜璃ちゃん」

蜜璃ちゃん行きつけのお店はとっても美味しい。今食べている焼き魚定食はお魚がジューシーで、お米も程良い硬さ。お漬物もお味噌汁も美味しい。蜜璃ちゃんの天井も美味しそうね。

蜜璃ちゃんは同じ体型の人よりも、何と8倍も筋肉がある特殊体質なので、其の分基礎代謝が高く、いっぱい栄養を付けなければいけないそう。凄いね、8倍。言葉にするだけなら簡単だけど、8倍って何かかつこいいね。いっぱい食べる子可愛いね。お姉さん、沢山食べる子好きよー。

私はそう思っているけど、蜜璃ちゃんはいっぱい食べる自分が恥ずかしかったそう。この体質や髪色の所為でお見合いを断られて、鬼殺隊に來たそうな。

蜜璃ちゃんのお見合い断った子、言い方が駄目ね。お姉さんと言葉のお勉強しましょうね。ぶんぶん、お姉さん怒っちゃうよ！

「ご飯終わったら小物見て良いですか？ 気になっていいるお店があつて！」

「良いよ良いよ、お姉さん、今日は蜜璃ちゃんにいっぱい付き合っちゃうよ！」

「瑠璃子さんありがとうございます！ 今度はしのぶちゃんと真菰ちゃんも誘いましょうね！」

「ええ！」

うふふ、やっぱり女の子と話すの楽しいわねえ。

「尊い…（目頭を押さえる）」

「おい、さつきから此奴等同じ事ばかり言ってるぞオ…」

「気にするな。気にしたら負けだ。多分」

「そうだなア」

「尊い…（天を仰ぐ）」

「そう言えば、瑠璃子さん、此の前の任務大変だったんですよね？下弦が現れたって聞きました！」

「うん、下弦の陸。十二鬼月の一番下とはいえ、油断しなかったけど、何とか頸取れたから大丈夫だったわ」

「流石瑠璃子さんだわあ！私ももつと頑張らないと！」

「蜜璃ちゃんは頑張り屋さんね。瑠璃子お姉さんが良い子良い子してあげる」

「きやつ！嬉しい！」

「ぐすつ…姉御前…なんてお優しい…っ」

「甘露寺はなんて愛らしいんだ…っ」

「あ、不死川、茶のおかわりはいるか？」

「貰つとく」

「すみませーん、お茶のおかわりを」

「あ、蜜璃ちゃんはこれが似合うね」

「瑠璃子さんはこつちが似合うわ！やっぱり瑠璃子さんは瑠璃色の小物が似合いますね
！」

「蜜璃ちゃんは桃色が似合うから可愛いよね」

「瑠璃子さんも可愛いです！あ、こつちは如何かしら？」

「あつ、可愛い」

「姉御前が可愛い」

「甘露寺が可愛い」

「結果、二人が可愛い」

「（おつ、これ、あの人に似合うなア…買っていくか）」

「おい、不死川。これ以上瑠璃子さんに送るのは許さん。鱗滝一門が許さん」

「鱗滝一門じゃなくて、てめえがだろうがア」

「大体髪飾りやら簪やら、お前と言う奴は…!」

「だつたらてめえも送れば良いじゃねえかア」

「俺にそんな度胸があると思うか!？」

「自分で言うんじゃねえよ」

「可愛い猫ちゃん達の集会だつたわね!」

「三毛さんと黒さんだつたわね。白さんも来たね」

「三毛ちゃんやんは瑠璃子さんに似てました!とつても可愛かった!」

「にやく蜜璃ちゃん可愛いにやく瑠璃子は蜜璃ちゃんが大好きだにやく」

「きゃー!蜜璃も瑠璃子さん大好きく!」

「おい、そつち縛つたか?」

「ああ、まさか猫の集会に集まつた二人を狙つて噂の奴等が出てくるとは…ある意味凄いな」

「殺す殺す殺す。甘露寺と鳴滝さんに手を出そうとする等、許されざる蛮行だ。おい、桑

島、日輪刀を寄越せ。刺す」

「待つてください。だつたら此方のヒ首は如何です？痺れ薬塗りです。あと、こつちはくしやみが止まらない薬塗りで、こつちは腹痛起こすやつです」

「全部寄越せ」

「やめろ二人とも。一応一般人だろう、問題起こすな。せめて関節を外せ。こう、ゴキツつと（ゴキツ！）」

「お前もやめろ！お館様に何て説明すれば良いんだア！（バキツ！）」

「そう言いつつ、不死川も関節外してらるだろう」

その後、鎗兎達ストーカー軍団はお館様に褒められつつも、『関節外しは駄目だよ』とちよつとだけ怒られた。ただし、お館様も可愛い可愛い二人に手を出そうとした男達に對して、権力で圧をかけたとき。

こうして、乙女二人の休日には過ぎていったのであつた。ちゃんちゃん。

第九話 新しい弟子とは

——本が好き。特に絵本が好き。

前世でよく読み聞かせをしてあげた。子供にとって絵本は、人生で初めて別世界なのかもしれない。

だって、子供達は目を星の様にキラキラと輝かせ、夢中になって絵本を見るの。其の微笑ましい姿がとつても可愛らしい。

だからもう一回、もう一回と強請られて、ついつい読んであげてしまう。

其れを何回も繰り返して、結果時間が過ぎてしまい、別の先生に怒られたつけ。嗚呼、懐かしい。

ふと、其処で考えてみた。——絵本って大正にあるのかな？

文字はある。小説はある。本と言う文化はある。

——でも絵本は如何なのかしら？

私ที่ไม่知らないだけで、あるのかもしれないけど、未だにこの目で見た事は無い。

なので、お姉さん書いてみる事にしたの。

そして、月日を掛けて出来上がった絵本なんだけどね？

*

「瑠璃子さーん！絵本読んでくださいな〜」

「今日はこれが良いです！」

「じゃんけんして、勝ったすみちゃんが今日はお膝の上です！」

瑠璃子の書いた絵本は蝶屋敷の三人娘に大変好評だった。

特に動物が出てくる物が良いらしく、今日はうさぎと犬の絵本を持ってきて、瑠璃子に可愛くおねだりをする、につこり笑って「良いわよ」と言った。

きやつきやつと笑って、縁側に座った瑠璃子の膝の上にすみ、右になほ、左にきよ

が座る。

「それじゃあ、読むわよ。『ぼくはりんごのおやまにすむ まっしろうさぎ。きょうはおともだちのいぬくんのところにいくんだ』」

瑠璃子の書いた絵本は全てオリジナル作品だ。

思い付く限りの物語を文字にし、絵は自力で何とか描いた。因みに大正時代には既に鉛筆はある。色鉛筆はもうちよつと後に登場する。大正ココソコ豆知識。

元より絵はまあまあ出来る方だった瑠璃子だが、子供への純粹な愛が糧となり、今では子供でも親しみやすい、可愛い感じの絵、所謂デフォルメ系の絵なら書ける様になった。恐るべし、子供好き。

何より瑠璃子の恐ろしい所は、読む時である。

鳴滝瑠璃子の前世は知つての通り『保育士』だ。子供を預かり、見守り、育てる場で働いていた彼女には、とある異名が付いていた。

—— 「シエヘラザード瑠璃子」である。

シエヘラザードは千夜一夜物語の登場人物にして語り手の女性の名前だ。

語り手と言えば？と言う質問ならば、答えとして彼女の名前が大体は上がるだろう。

瑠璃子は正に現代版シエヘラザードだった。本を読むのが無茶苦茶上手いと言う意味で。

瑠璃子が務めていた保育園では、園児達のお昼寝前に本の読み聞かせをする決まりがあつた。瑠璃子は、其の読み聞かせ担当だつた。

この読み聞かせが、園児達にも他の先生方にも大変人気だつた。

まず、彼女が本を読むと知つた子供達は一目散に駆け寄り、あれ読んでこれ読んで、とせがむ。

そして瑠璃子の膝の上と言う特等席の争奪戦が起きるので、保育園では異例の『瑠璃子の膝上日替わり表』が設置されていた。

そして終わる頃には園児達がうとうとし始めて、良い子でお昼寝する。他の先生達すら眠る程、彼女は読み聞かせが上手かつた。

また、園長が提案した『保護者への読み聞かせ会』はもつと好評だつた。

日頃、育児やら家事やら社会やらで、精神的にも肉体的にも疲れ切つている保護者の皆様は、瑠璃子が一度絵本を読み上げると啜り泣き、終わる頃には瑠璃子の事を「ママ……」とか「おかあさあん……」とか「ばぶう……」とか言い始めて、帰りはすつきりとした顔で帰る。

そして再び読み聞かせ会が始まると知るや否や、即座に其れに申し込むと言うガチめの戦争が始める。現代の大人は大変なのである。社畜は辛い。

——そしてシエヘラザード瑠璃子は本日、休業。鬼殺隊の鳴滝瑠璃子へと戻る。

—— 海の呼吸 肆ノ型 波打ちなみうち

—— 水の呼吸 陸ノ型 ねじれ渦うず

瑠璃子の刺突を、体を大きくねじり回転させて弾き、ガードをする義勇。其の動きに一切の無駄は無い。

—— 水の呼吸 漆ノ型 雫波紋突しずくはもんづつき

水の呼吸の型の中で最速を誇る刺突技が、瑠璃子の額を狙う。

然し、届く前に、ゆらりと瑠璃子の姿が揺れた。

—— 海の呼吸 参ノ型 海鏡かいきょう

瑠璃子が揺らめき、雫波紋突しずくはもんづつきが外れる。最速の技が外れた事に目を見開く義勇。

『海の呼吸 参ノ型 海鏡』は回避技だ。独特な体の揺れが相手の視界を惑わせて、技を外させる。

避けた瑠璃子は即座に木刀で義勇の胸を狙ったが、先に義勇が一步後退して先端が隊服を微かに掠った。

瑠璃子が次の技を放とうと、ぐつと木刀に力を入れた——その時だった。

「其処まで！」

見ていた錆兎の静止に二人がびたりと止まる。と、同時に二人が持っていた木刀に罅が入り、バキツと音を立てて折れた。

パラパラと木片と化していく元木刀を見て、瑠璃子が「あらやだ……」と困り顔になった。

「あらあら、これで何本目？」

「五本目ですね。今月で」

錆兎の言葉に瑠璃子は「ごめんなさいね」と小さく謝罪した。

「後でお金渡すわ。其れで新しいの買つてちょうだいな」

「要らないです」

「お金なんて気にしなくて良いのよ、義勇。折っちゃったの私なんだから。と言うか毎度の事だからねえ」

瑠璃子がよしよしと頭を撫でると、義勇の口元が薄つすらと緩んだ。そして周りのオーラがぼわぼわし始めた。義勇は幼い頃から瑠璃子に撫でられるのが好きなのだ。この時ばかりは何時にもむつりとした顔が、少しだけ子供っぽい顔になる。

此処は錆兎と義勇と真菰が共同で住む屋敷、別名『水屋敷』。

其の一部は道場となっており、水柱二人や真菰だけではなく瑠璃子も時折やってきては訓練に打ち込んでいる。極稀に柱が来る事もある。

今日は以前から約束をしていた稽古の日。ふう…と瑠璃子が一息つくくと、錆兎が話しかけてきた。

「其れにしても、瑠璃子さんは海の呼吸を完全に己の物にしましたね。今の参ノ型は凄かった」

「海鏡ね。あれ、動く時にとっても気を遣うのよ。こう、筋肉の筋を一本一本動かすみたいにならないと、上手く体が動けないから」

「そんな事をしていたんですね。義勇の雫波紋突きは俺より早いから焦ったでしょう？」

「うん、すごく。義勇、また早くなつた？」

義勇はふるふると首を横に振った。

「真菰の方が早い」

「真菰ちゃんのは反則よね〜」

瑠璃子の言葉に錆兎も義勇も頷く。

真菰は兎に角、技の打ちが早い。

威力だけならば、同性の瑠璃子より若干劣るが、それ以上に早く打ってくるので、過去に稽古で何度か、瑠璃子は首を取られかけた。

「私達の中で、威力だけなら錆兎、流麗さなら義勇、素早さなら真菰ちゃんが一番だもの

ねえ」

「瑠璃子さんの場合は技の間合いが広いから、安易に近づけないです」

「瑠璃子さんの呼吸は技の範囲が広くて、対処に困る」

「一応、其れが極意と言えば極意だからね」

うふふーと胸を張る瑠璃子。

「とは言つても、私としてはもう少し威力が欲しい所ねえ。下弦相手には通じてても、上弦相手に通じるかどうか、怪しい所だから」

思い出すのは四年前の上弦事件。童磨は兎に角避けるのが上手かった。

何度か型を出したが、当たったのは波打ち三波のみ。だが、あれは瑠璃子を誘う為にわざと受けた為、ダメージがほぼ無かっただろう。

あの飄々とした、笑顔の癖に人を見下している顔を思い出す度に、穏やかな性質の瑠璃子でさえ、苛立ちが増す。

「あの上弦、次会つたらペしペししないと！」

ふんすふんすと気合を入れる瑠璃子に錆兎が困った顔で言う。

「あの時は本当に瑠璃子さんが死ぬかと思つたんですから。いくら鬼殺隊にいるからとはいえ、無茶をしないでください」

「……うん、ごめんね。あればかりはお姉さん反省」

瑠璃子は鱗滝に「生きて帰る」と約束をしている。其の約束を破る気は無い。

あの時は紫陽花とカナエをやられた事に頭に血が上って、戦いに挑んだが、其の後が本当に大変だった。

錆兎は過保護になるわ、義勇は離れないわ、入隊したてだった真菰は泣くわで、本当に心配されてしまった。

鱗滝にも三人経由で連絡が行っており、大量の薬草と巻物級の長い長い説教の手紙が来て、瑠璃子の良心がごりごり削られていった。

回復訓練を終えて、会いに行った際には生存を確かめるかの様に強く抱きしめられた。そしてまた説教された。

「(本当に長かったわあ、おじいちゃんの説教……。まあ、心配かけた私が悪いんだけどね)」

当時を思い出す瑠璃子。すると、義勇が瑠璃子の背後に回り、じつと瑠璃子の背中を見つめた。

「義勇？ どうした？」

怪訝そうな錆兎に答えず、義勇はそつと瑠璃子の背中に手を伸ばすと、指先で背中をなぞった。「ひゃっ！ なになにに義勇？ お姉さんびつくり」と驚く瑠璃子。

謎の行動をする義勇はぼそりと呟いた。

「辛くないですか？」

「！」

其の言葉に、瑠璃子は彼が背中の傷の事を言っている事に気づいた。義勇がなぞつて
いるのは、四年前に切られた場所だった。

「傷の事？平気よ。時々痒くなったりするけど、痛みは無いから」

「そうですか……」

「しのぶちゃんと同様で協力して作った塗り薬の効果もあって、少しずつ小さく、薄く
なってるし。傷自体はやっぱり残るみたいだけど」

苦笑いでそう言う瑠璃子に義勇は言った。

「瑠璃子さんは傷物じゃない」

「待て義勇。発言が何か可笑しい」

「ああ、これはね『背中の傷なんて気にしないで良いよ。俺の方が傷いっぱいあるか
ら』って言ってるのよ。ねえー？義勇」

「くくりと頷く義勇。」

「流石瑠璃子さん」

「そう？でも義勇はもうちよつとお話出来る様にしましょうね？」

「はい」

「あ、そう言えば錆兎。最近、真菰ちゃんの様子が変なんだけど……何か知ってる?」

瑠璃子の質問に、錆兎は首を傾げる。

「変? 具体的に何処か変なんです?」

「えっとね、最近何処かへ行っている事が多いの。任務とかじゃなくて、別の、私用なのかな? 何だか嬉しそうに出掛けるから、何かあったのかなって」

と言う瑠璃子に、錆兎はぎよつとした表情で義勇を見た。

「義勇? 瑠璃子さんに言ってる無いか?」

其の問いに義勇は頷いた。

「瑠璃子さんには今日久々に会った。稽古が終わったら言おうかと思った」

「何故銚鳥で伝えなかった!」

「俺の鳥は何処かへ行ってしまう」

「そうだった……! 義勇の銚鳥はかなりの年寄りだった……!」

「迂闊だった……!」と頭を押さえる錆兎。今度は瑠璃子が首を傾げる番だった。

「錆兎? 義勇? 一体何の話をしているの? 私のも判る様に言ってる。お姉さん、仲間外れは嫌よ?」

ちよつとだけ不機嫌そうにそう言う瑠璃子に錆兎は「一旦座りましょう」と着席を促すと、話し始めた。

「えっと、話を纏めると…一年半前、妹の禰豆子ちゃんを鬼にされた男の子、炭治郎ちゃんが、おじいちゃんの所で今修行中で、禰豆子ちゃんは現在何故か長い長い睡眠中。然も、禰豆子ちゃんは鬼になりたての飢餓状態だったにも関わらず、傍にいた炭治郎ちゃんを食べなくて、義勇に対して威嚇して守った。其れを見て、義勇はおじいちゃんに紹介状を書いた。錆兎も真菰ちゃんも全部知った上で、時々修行をつけてあげてる。そして、任務とかで会えていなかった今の今まで、私に話していなかった…と。これで大体会合ってる？」

瑠璃子の言葉に義勇が頷く。錆兎はやれやれと言った感じで義勇を見ていた。

暫くして、やっと理解が出来た瑠璃子は一旦深呼吸をすると、義勇に笑いかけて、言った。

「義勇、めっ！」

「!!」

途端、義勇がちよつと泣きそうな顔になった。

「瑠璃子さん…何故…」

「私、何回も言ってるでしょう？報告・連絡・相談、略して『報連相』ほうれんそうはきちんとしなさい

いって。一言でも良いからしなさいって。今回ばかりはお姉さん、怒っちゃうわよ」

瑠璃子がもう一度「めっ！」と言うと、義勇の額を人差し指で小突く。突かれた本人は（瑠璃子さんに怒られた…）としよぼんと落ち込んだ。

「でも、まあ…炭治郎ちゃんの気持ちは判らないでもないのだけど」

「瑠璃子さん…」

「其れにね、愛する家族を殺したくないのは誰でも一緒よ」

苦笑いの瑠璃子に、錆兎は困ってしまう。

確かに言わなかった義勇も悪いが、自分も悪い。義勇が言っていると思ってしまう自分。

なんと情けない事か！好いた女性にこんな顔をさせるなんて！男失格だぞ！錆兎も落ち込み始める。

「其れにね、禰豆子ちゃんが鬼になった事よりも、大事な事があるわ…」

と、言つて俯いた瑠璃子の姿に、錆兎の背筋がピンと伸びた。

「な、なんででしょうか？」

もつと大事な事とはなんだろうか？

緊張しつつ、錆兎は溜まった痰をぐくりと飲み込んだ。

そして、瑠璃子は言った。

「なんで……なんで……なんでもっと早く言ってくれなかったのお!? 私だつて炭治郎ちゃんに会いたかつたのにい!」

「そつちい!?!」

白い頬をぷつくりと含まらせ、両手を上下に振つて子供の様な仕草をする瑠璃子に、錆兎は座つた縁側から落ちかけた。

え? 嘘? そつち? そつちなんですか!?! 大混乱の水柱を置いて、海柱はぷりぷり怒る。

「だつてだつてえ! 新しい弟弟子よ? 私の弟弟子なんでしょう? だつたら私も早く会いたかつた! もっと早く言ってくれたら、お姉さん、いっぱいいっぱいご飯とか作つてあげたのにい! 折角新しい絵本も出来たから、読ませてあげたかつたあ!」

わーん! と騒ぐ瑠璃子に、苦笑いするしかない錆兎。義勇は新しい絵本と聞いて、(新しい絵本……読んでもらいたい)と顔には出さないが、内心うきうきしていた。

と、言うか思つたのと違うリアクションに、錆兎はちよつとびつくりした。

「なんと言うか……責めないんですか? 鬼を連れている事に關して」

鬼殺隊には、身内を鬼に殺された者や恨みを抱えた者が大勢所属している。大方は其れが理由で入隊してくる者が大半だ。

柱の中にも同じ様な理由の者がいる。義勇も錆兎も身内を鬼に殺された者の一人。瑠璃子だつて、其の一人。

—— 鬼連れは、決して許される行為では無い。

だが、瑠璃子は首を傾げた。

「どうして？」

穏やかな声色でそう言う瑠璃子。鏑兎は驚いた顔で、彼女を見た。

「だって、人を食べていけないのでしょ？」

「そうですけど……」

「なら、其れを私は悪鬼とは言わないわ。悪いのは、竈門家を襲い、殺し、妹を鬼にした鬼。炭治郎ちゃんは禰豆子ちゃんを人間に戻そうと必死で頑張ってる。其処に文句は言えないわ。—— 何よりね」

瑠璃子は柔らかく、笑った。

「おじいちゃんが認めたんだから、大丈夫よ」

瑠璃子の祖父・鱗滝への絶対的な、信頼。彼が認めたとなれば、安心出来る。其の信頼だけ、たった其れだけではあるが、瑠璃子が炭治郎を認めるのには十分過ぎる程の理由だった。

「鏑兎も義勇も、おじいちゃんの鼻がとっても利くのは知ってるでしょう？ そもそも、お館様に手紙を出していない訳無いじゃない。今、鱗滝一門の三人や血縁関係のある私に對して、何も言われていない以上、お館様は何かしらの考えがあるのよ」

「確かに」

「何より、お館様の御言葉は絶対。でも、実弥ちゃんや小芭内ちゃんは反対しそうねえ」
名前の上がつた二人の反応を想像した義勇は「する」と頷いた。

「柱合会議が開かれるわね、これは」

—— 柱合会議ちゆうごうかいぎ

半年に一度、97代目お館様こと産屋敷耀哉うぶやしきががやが住む産屋敷邸にて行われる会議の事だ。

読んで字の如く、柱全員が当主の下に集まり、鬼殺の近況報告や、隊でのめめ事の取り決めをその場で決する。柱は其々の担当地域で鬼殺を行っている為、多忙だが、この時ばかりは全員集合する。

もし炭治郎が入隊すれば、無論、彼と禰豆子に関しての事で開かれるだろう、と瑠璃子は予測していた。

「其処で炭治郎ちゃんに対する決議が行われるでしょうね」

「確実に反対意見が多いでしょう。鬼連れは三大禁止事項の一つですからね」

三大禁止事項は数ある隊律違反の中で、最も許されない三つの違反の事。

一つ、お館様に危害を加える事許されず

一つ、一門から鬼を出した場合、須らく責任を取るべし

一つ、鬼を連れる事、断じて許さず

特に一番罰が重いのは一番目だが、残りの二つも場合によっては『死罪』が言い渡される事がある。

其の判断を決めるのは、柱では無い。お館様である。

「お館様次第つて所ね。いざとなれば、実弥ちゃんと小芭内ちゃんは私が何とかするから」

「ありがとうございます。不死川も伊黒も、瑠璃子さんの言葉ならば聞くでしょうし」

今代の柱の中で、特に鬼への殺意が高いのは不死川と伊黒だ。

不死川は瑠璃子達の知る限り、最も鬼への殺意が高い。伊黒は懐疑心の固まりの様な性格。特にこの二人が、炭治郎に反対するだろう。

—— この二人を抑えられるのは、お館様と瑠璃子の二名だ。

お館様は当然だが、瑠璃子は其の性格もあり、今代の柱達にとつては母親の様な、姉の様な存在である。因みに柱の中では二番目の年長。最年長は岩柱・悲鳴嶼。

不死川は過去の事もあり瑠璃子に弱い。伊黒も瑠璃子の独特なペースと穏やか過ぎる性格、何より恋愛相談を快く引き受けてくれる唯一の相談者だ。無下には出来ない。

幾ら鬼に対して好戦的な二人であろうと、瑠璃子には敵わない。これぞ、ママみ。これぞ、姉。パワーなのである。

「うふふ、新しい弟弟子なんて久しぶりねえ。楽しみだわ。何食べるかしら？」

「炭治郎なら何でも食べますよ。彼奴、中々根性がありますから」

「あらあらまあまあ、錆兎がそんなに褒めるだなんて！よっぽど気に入っているのね！
ますます興味が湧いて来ちゃうわ！お姉さん楽しみ！」

「鮭大根」

「義勇、土産として其れは無い」

「べちやべちやになっちゃうわねえ」

無い無いと言う二人。義勇はちよつと拗ねた。

「禰豆子ちゃん、何食べるかしら？あ、寝てるのよね？そもそも鬼って人以外に何か食べるのかしら？うふふ、会うのがとっても楽しみ！」

第二章 鬼連れの剣士と海柱

マテリアル風キャラクター設定

鳴滝瑠璃子（なるたき るりこ）

《キャラクター詳細》

鬼を滅する組織『鬼殺隊』の最高幹部・柱の一人で、海柱を冠する女性。

ゆったりとした子供好きなたわわお姉さん。其の微笑みは聖母の如く。其の愛は海の如く。今日も彼女は慈愛を持って、鬼を斬る。

彼女は今日も笑う。何故なら、愛すべき友たちが此の世にいるのだから。守る為に、今日も瑠璃色の淑女は笑うのだ。

「あらあらまあまあ、今日は如何したの？抱っこにする？膝枕にする？其れともご飯食べる？」

そして、ママみの固まりである。おぎやあ。

《プロフィール1》

身長／体重：169cm・57kg

地域：日本

性別：女性 年齢：23歳

因みに前世も含めて、恋人はいなかった。もう一度言う。恋人は！いなかった!! 「からから、お姉さんの秘密をバラしたらめっ！でしよう?」

《プロフィール2》

美しい母と病弱な父と共に幸せに暮らしていたが、其れは突如として壊れた。11歳の時、突如として悪夢はやってきた。

赤い目、月色の肌、黒い髪を持った一人の男が両親を殺したのだ。瑠璃子は両親の命懸けの行動で助かるが、彼女の心は酷く傷つき、祖父である鱗滝の元に身を寄せた。

其の二年後、やってきた弟弟子達の存在が、瑠璃子の心を癒し、そして全てを思い出させた。

《プロフィール3》

瑠璃子の前世は保育士。子供を見守り、育てる職は天職だった。然し通り魔に刺された事で死んでしまい、何故か『過去の大正』に生まれた鳴滝瑠璃子として生まれ変わった。

はつきり言おう。テンプレート転生した。あらまあ!

そして、紆余曲折を得て、鬼殺隊最高幹部・柱の称号を得る事となる。其の過程で育

まれた強い愛は、本来死ぬ筈だった人達も、これからを生きる人達も救う事となる。

《プロフィール4》

○溢れる母性：EX

鳴滝瑠璃子は母性の固まりである。子供は愛し、守るべき者。其の思いが彼女を強くする。つまりはママみが滅茶苦茶強いって事。

○海の呼吸：A

瑠璃子を使用する特殊な呼吸法。鳴滝家特有の呼吸であり、瑠璃子は最も新しい使い手。

初代鳴滝が作り上げた呼吸であり、其の歴史は長い。だが、何の因果か、使い手が歴代でも少ない。

遺伝子的な問題か、ただの相性の問題か、其れとも呪いか？真相は彼女も、其の一族ですら知らない。

ただ、彼女の呼吸を見た者は皆、口を揃えてこう言う。「海が、果てしない海が見えた」と。

○ほわほわスマイル：EX

瑠璃子の特徴。彼女は常に笑っている。春の日差しのように柔らかく微笑む。あまりに優しい其の微笑みは、人はおろか、鬼ですら警戒が出来なくなってしまう。

誰もが、ほわほわしちゃう。其れは女の子にとって、素敵で無敵な、最高最強の武器・笑顔なのだから。

《プロフィール5》

『海の呼吸 壱ノ型 白波』

ランク：A 種別：対鬼

レンジ：？ 最大捕捉：？

うみのこきゆう いちのかた しらなみ

海の呼吸七つの型において、最初に取得する基本の型。美しい一閃は、最早芸術の域に達している。

瑠璃子が得意とする型の一つ。

『海の呼吸 肆ノ型 波打ち』

ランク：A 種別：対鬼

レンジ：？ 最大捕捉：？

うみのこきゆう しのかた なみうち

海の呼吸七つの型の一つで、刺突技。素早い突きは、最初痛みを感じないが、其の油断が致命傷となりかねない。

瑠璃子はこの技を一回では無く、三回突く進化版『波打ち 三波(なみうち さんぱ)』

を自ら作り上げ、己の物とした。

《プロフィール6》

全ての命が守れるとは思っていない。何故なら守ろうとした命は、あつさりと掌から零れていく事を知っているから。

目の前で命が無残に散っていく姿を何度も知っているから。泣いても、死人は帰ってこない事を知っているから。

其れでも歩みを止める事はしない。諦める事はしないと、出発する日に決めたのだから。

今日も瑠璃色の淑女は祈る。—— どうか、貴方が笑って生きられる明日が来ます様に。

鳴滝紫陽花（なるたき あじさい）

《キャラクター詳細》

鬼殺隊において、無償で隊士の治療を行う蝶屋敷で治療医として働く青年。海柱・鳴滝瑠璃子の義兄であり、元花柱・胡蝶カナエの夫。

可愛い義妹に美しい奥さん。幸せいっぱい。大正リア充とは、此奴の事だ。

《プロフィール1》

身長／体重：180cm・68kg

地域：日本

性別：男性 年齢：24歳

綺麗な奥さんと新婚生活真っ最中。やっぱり大正リア充だった。

《プロフィール2》

嘗ては『鬼殺しの紫陽花』と謳われ、敵味方から恐れられた隊士。其の實力は水柱に推薦された程だが、本人は柱になると忙しくて、鬼が殺せないと言う返答をお館様にした逸話（実話）を持つ。

時間さえあれば、鬼を殺す。鬼が出ないなら、技を磨く。悪鬼滅殺を体現した人物であつた。

《プロフィール3》

十歳の頃に最愛の父を目の前で鬼に殺された事から十年間、彼は鬼を殺す事だけを考えていた。実家に帰る事すらせずに、家族など知らぬと言わんばかりに。

然し、転機は訪れた。瑠璃子がやってきたのである。最初は使い勝手の良い奴としか思っていないかつた。でも、ある事件を切っ掛けに二人は兄妹となる。

そして、彼は知つた。最も殺したかつたのは、父を守れなかつた弱い自分だつた、と。

《プロフィール4》

後の妻となる胡蝶カナエの事が、嫌いだった。何故なら鬼と仲良くなりたいたい、だなんて可笑いと思つたから。

でも、だから惹かれていたのかもしれない。自分が持つていない、持てない考えを持つ彼女に。

何時だつて人と言うのは、自分とは違う考えを持つ人を嫌い、そして不思議と惹かれてしまうのだから。

《プロフィール5》

事件の後、紫陽花の肺は損傷し、左腕は麻痺が残つた。然し、今の彼は其れを笑つて話すだろう。

何故なら、此れが原因でカナエが秘めていた本心に気づき、愛する事を思い出させてくれたのだから。

何より、愛しい妻と可愛い妹がいる、この生活が一番の幸せ。やっと手に入れた、彼の居場所。

《プロフィール6》

だが、其れでも鬼は許さない。特にあの上弦は。嫁と妹を傷つけられた借りはきつちり返してやる。

現在、彼はカナエの妹・しのぶと共に強力な毒を製作中。

——全ては、愛する者の為に。

「いや、ぶつちやけ彼奴嫌いだし。取りあえず死んでくれよ」

お兄さん、物騒です。

鳴滝雪音（なるたき ゆきね）

《キャラクター詳細》

鬼殺隊において、とある伝説がある。『人間暴走機関車』が存在したと。

其の者は文字の通り、暴走機関車だった。命令は聞かない、敬語は使わない、無礼講。

しかし、実力は一級であり、柱まで登り詰めた。

其の名は『氷柱』。つららではない、『こおりばしら』。

其の伝説の張本人は現在柱を降り、鬼殺隊を辞め、全国を飛び回るアクティブレディとなっている。

「彼奴は止めといた方が良い。関わると碌な事が起きん。絶対に止めた方が良いぞ」

と、嘗ての炎柱はげっそりとした顔で語ったそう。

《プロフィール》

身長／体重：150cm・49kg

地域：日本

性別：女性 年齢：不詳

なお、胸部は洗濯板よりもぺったんk「おい、今なんて言った？」アツ――

《プロフィール2》

長い歴史を誇る名家・鳴滝家の次女として生まれ、見合った男性と結婚し、子供を生ま育てる、将来を約束されていたが、なんの事故か運命の悪戯か、雪音は『鳴滝家が産んだ異端児』として名を馳せる事となる。

《プロフィール3》

雪音はある意味『天才』だった。尊敬すべき姉に追い付こうと、努力した。其処は良い。

しかし、雪音は何と『水』と『風』の呼吸を混ぜて、我流呼吸『氷の呼吸』を生み出した。これを知った父親はあまりの驚きに卒倒し、二日程斃されていた。

更に言えば、ある日突然父親に対して『家長の座ちよーだい！』と無邪気に迫り、結果的に本当に父親を隠居させた。どうやって隠居させたのかは、未だに不明である。

《プロフィール4》

雪音の姉・七海は、正に理想的な姉だった。表情も感情も乏しく、凧いだ水の様な姉。しかし、物事を完璧にこなし、刀も強かった姉は雪音にとって、初めて出会った、実在する神の様な存在だった。

だからこそ、彼女の隣に相応しい存在になろうと努力した結果が『異端児』。雪音は其れすら受け入れて、柱となったのだ。

柱になって数年後、一人の男が現れるまで、彼女は『異端児』だった。

《プロフィール5》

男は『甲』の隊士だった。男は雪音に会うなり、「結婚してください！」と盛大に告白した。しかし、男は雪音に殴られた。おかしな奴だな。そんな淡白な感想を思った。

でも、男は諦めず、何度も何度も求婚をした。あまりにしつこくて、最終的に雪音の方が折れた。

男は何度も雪音を愛していると言った。雪音は其れに言葉を返さなかった。

だって、愛なんて美味しくない。皆、あたしを嫌うから、愛なんて知らないもん。

本当は寂しがり屋の異端児に男は言った。

だったら愛を知ってほしい。俺は君を人生の全てを賭けて愛するから。

其の言葉に嘘は無かった。男は人生を賭けて、異端児を、否、雪音と言う一人の少女を愛した。

其の愛は、本当に甘くて、美味しかったよ。だってあたしを母親にしてくれたんだから。

だが、残酷にも雪音は男の最期に間に合わなかった。

其れを後悔して後悔して後悔して——鬼殺隊を辞めたのだ。

《プロフィール6》

更に雪音に追い打ちを掛ける様に事件は起きた。姉と其の旦那が殺され、二人の娘が行方不明になった。

雪音は確かに絶望した。しかし、誰かが背中を押した。

あの時と同じ、甘い味がして、雪音は足を動かした。

そして二年の月日を掛けて、やっと見つけた。

—— 姉さん、お前さん。あたし、やっと前を向けるよ。

見つけた少女を抱き上げて、雪音は笑った。

「七海姉さんにそっくりだな！」

隨時更新：

第十話 瑠璃と赫灼

すうーと深く吸い込む。山特有の薄い空気に、瑠璃子は微笑んだ。彼女が今いるのは、懐かしの狭霧山。ご存知、鱗滝左近次の住む山である。

「はあ……久しぶりねえ。ただいま、狭霧山」

久しぶりの山に瑠璃子は微笑みを崩さず、『らんらんらん♪たけのここのこのこ』と妙な鼻歌を歌いながら、山の中へと入る。

—— 麓に行けば、見知った顔に瑠璃子の足が速くなった。

「おじいちゃ——ん！」

変わらず天狗の面を付けた鱗滝が、其の声に反応し、薪割りを止めた。

手を振って、走ってくる笑顔の孫娘に、斧を落とし、両手を広げて、その場で待つ。そして、其の腕の中に愛しの孫娘は抱き付いた。

「ただいまあ〜」

「ああ、お帰り」

前に会った時よりも少し伸びた瑠璃子の頭を、鱗滝は撫でる。

「義勇達から聞いたわ。新しい弟子の話！妹さんの事も聞いたけど、会っても良いかしら？」

「勿論だ。中で妹が寝ている」

「それじゃあ失礼しまーす」

瑠璃子は鱗滝から離れると、彼の住む家の中に入った。離れてかなり立つが、変わらない。其の姿に懐かしい記憶が蘇る。

此処で錆兎と義勇と鱗滝と暮らして、此処から出発して。離れてからの修行は厳しかったし、人が殺される所も見た。其れでも沢山の友人に恵まれた。

「嗚呼、ただいま」

込み上がってくる懐かしさに一度だけ目を伏せて、そして見つけた。

床に敷いた布団の上で、すやすやと眠る少女。竹で出来た口枷を付けた、鬼の少女。黒髪に白い肌。瞼を瞑つていても、可愛らしい顔立ちをしている。

「…この子が、彌豆子ちゃんね」

「そうだ。鬼になつても人を喰わなかった、異例中の異例だ。一年半、ずっと見ていたが、起きる気配すら無く、人を襲う気配すら無かった」

「おじいちゃんの鼻は利くから、此処に置いている時点で、人を食べて無いのは納得したけど、鬼って寝るの？もしかして、食べない代わりに寝て回復しているの？」

「だと思う」

「本当に異例中の異例ね」

瑠璃子は禰豆子に近づき、寝ている彼女の隣に正座で座った。そしてじつと見る。

「……………頑張ったのねえ」

ふわりと微笑み、瑠璃子は禰豆子の頭を撫でた。ゆっくりと、起こさない様に。

「貴女は辛い事に耐えたのね、えらいわ。とつてもえらい。今は疲れて寝ちやつてるのよね。うんうん、良い子良い子」

—— 誰だろう あったかい

—— もつと撫でて欲しいなあ

—— ふわふわで、甘い匂いがして

—— あ、そっか

—— お母さんと同じ手だ

ふわつと眠る彌豆子の目元が柔らかくなつた気がした。

一頻り撫でた瑠璃子は、若干名残惜しそうに手を離し、立ち上がった。

「さてと、じゃあ新しい弟弟子ちゃんに会いに行かないと」

「炭治郎なら、今は岩の所にいる」

「はあい。そうだ、今日は私がご飯作つてあげるね！楽しみにしててー」

そう言つて、瑠璃子は家を出て行つた。（瑠璃子の飯か……）と鱗滝は内心わくわくしつつ、薪割りを再開し始めた。

*

懐かしい狭霧山の空気を全身に浴びながら、瑠璃子は炭治郎を見つけた。

ボロボロになりながら、岩を斬ろうとする、瑠璃子よりも小さな少年。赤みがかつた髪と目。左側にある火傷の様な痕。間違いない、彼が炭治郎だ。

然し、瑠璃子は彼を見て、『あらあらまあまあ』と右頬に手を当てて、首を傾げた。

（あらまあ、呼吸が上手く機能してないのね。……ううん、若干出来てるわねえ）

元々狭霧山が静かな事もあつて、瑠璃子の耳に炭治郎の呼吸が聞こえてくる。未熟

な、全集中の音。一回一回が弱く、これでは岩を斬る事が出来ないと感じた。

(全集中の呼吸は一回でも感覚掴まないと難しいわよねえ、私も苦労した思い出があるわあ。……あれ? だったら常中が出来てる柱や真菰ちゃん達って相当凄いんじゃない?)

今更である。

(あつ、転んだ。…立ち上がった。斬りかかって、また転んで。…これを朝から夜中まで続けるなんて、とつても頑張り屋さんなのねえ…錆兎や真菰ちゃんが気に入る訳だわあ)

二人が好みそうな性格に瑠璃子は口元を緩ませると、炭治郎に近付いていった。

そして、また岩に斬りかかろうとする彼に声を掛けた。

「もつと体勢を保った方がいいわよお」

「わあっ!?!」

音も無く近づいてきた瑠璃子に、炭治郎が驚いて尻餅を付く。さつきまで気を張っていたのに、年相応になった其の姿に瑠璃子はくすくすと笑った。

「体勢がちよつと悪いわねえ。そんなんじや錆兎以前に真菰ちゃんにも、鬼にすら勝てないわよお?」

さあ……と瑠璃子の周りの霧が晴れて、其の姿が炭治郎の赤みがかった目に映る。

(凄いい美人だ……瑠璃色の髪が綺麗だ……)

瑠璃色の髪に白い肌。水色の着物に紺の袴を着た女性。にこりと微笑むと、炭治郎の頬に紅が差す。禰豆子も美人だが、此の人はまた違った美人だ。

見た事の無い女性性は炭治郎に近づくと、また微笑んだ。

「こんにちは、新しい弟子さん。私は瑠璃子。鳴滝瑠璃子。錆兎と真菰ちゃんと同僚で同門、謂わば君の姉弟子よ」

と、瑠璃子が言えば炭治郎は(姉弟子……)と言葉を噛み締めて、直ぐに立ち上がった。「こんにちは！俺は竈門炭治郎です！よろしくお願いします瑠璃子さん！」

「うふふ、ちゃんとお名前が言えてえらいわねー炭治郎ちゃん」

「た、炭治郎ちゃん……？」

何故ちゃん付けなのだろうかと疑問に思いながらも、ふわふわと柔らかな微笑と口調に何だか言えなくなってしまうと、炭治郎は言葉を噤んだ。

「岩斬り大変でしょう？しかも一番大きな岩だなんて、おじいちゃんも無茶させるわねえ」

「おじいちゃん？」

「鱗滝さんは私のおじいちゃんです！私、孫娘え〜」

「え、ええっ!? そうなんですか!？」

炭治郎が驚くのも無理はない。まさか、師匠に孫娘がいるとは思わなかっただろう。そもそも鱗滝は素顔が見えないので、老人であるのは判るが、何歳かは知らない。年齢不詳。それが育手・鱗滝である。

すると、炭治郎の鼻がひくひくと動き、「あつ」と何かに気づいた。

「でも…」

「?」

「瑠璃子さんからは鱗滝さんと同じ匂いが、優しい匂いがします!」

「!」

そう言われて、瑠璃子は目を見開いた。そして徐々に頬が紅潮していき、輝かんばかりの満点の笑顔になった。

「あらまあ…! あらあらまあまあ! 何て嬉しい言葉なのかしら! 私、今年で聞いた中で一番嬉しい言葉だわ! 炭治郎ちゃんありがとう!」

ぎゅっ!

「はわわわ…!」

突然抱き付いてきた瑠璃子に、女性との関わりが少なかつた炭治郎は真っ赤になつて狼狽える。何故なら、丁度顔に瑠璃子のたわわな胸が当たるから。

ふわふわとした柔らかい胸に包まれて、炭治郎は如何したら良いか判らず、両手を宙に浮かせたまま抱きしめられていた。不躰に女性に触れてはならないと言う母の教えが、炭治郎の両手を惑わせた。えらいぞ、炭治郎！君は紳士的だ！隙あらばやってくる妖怪・ヨメニコイコイ レンゴクファミリアとは大違いだぞ！

こうして、姉弟子と弟弟子は出会ったのであった。

其れから半年の間、瑠璃子は時間を見つけては炭治郎の元に通う様になった。

柱である以上、多忙であるが、何とか時間を作り、嬉しそうにちよくちよく出掛ける瑠璃子の様子に、一時期鬼殺隊では「遂に海柱様に恋人が!」「あの炎柱、遂にやりやがったか!」「母ちゃんに恋人なんて俺は認めねえ!」「誰だ！相手は誰なんだ!」とか色々噂が立ったが、瑠璃子は知らない。後、炎柱とか風柱とかがちよつと荒れたとかなんとか。事情を知っている錆兎はちよつとだけ優越感に浸っていた。

そして、今日も瑠璃子は炭治郎の元にいた。

「炭治郎ちゃん、おにぎり以外で食べたいものはある?お姉さん、作ってあげる」

満面の笑みでそう聞いてくる瑠璃子に炭治郎はちよつぱり照れながら、

「その、作ってくれるだけでありがたいです。瑠璃子さんはお料理上手だし…」

「あらまあ！お上手！お姉さん、撫でちゃうわあ」

なでなで

「え、えへへ…」

半年の間に、瑠璃子のなでなでとぎゅつきゅに若干慣れ始めた炭治郎だが、まだまだちよつと恥ずかしい。

でも、気持ちいいので、もつとして欲しいのも本当だった。

「うふふ、おにぎり冷めちゃうから早く食べましょう」

「はい！」

もきゅもきゅとおにぎりを食べる炭治郎。瑠璃子はリスの様に頬張る弟弟子の姿に（可愛い可愛い可愛い）とエンドレスで内心叫ぶ。

おにぎりを全て食べ終わり、お茶を飲んだ所で、炭治郎は家族の事を話し始めた。弟が三人、妹が彌豆子を含めて二人。

次男の竹雄と次女の花子はしつかりしてて、三男の茂と四男の六太はまだちよつと甘えん坊。母の葵枝は実は石頭だった、とか楽しそうに話す炭治郎に瑠璃子は笑いながらうんうんと相槌を打っていた。

——少し前に聞いたが、炭治郎の家族は、妹である禰豆子を除いて全員殺されてしまったそうだ。

父親・炭十郎は其の前に病で亡くなっていて、母と炭治郎・禰豆子を含めて六人の兄妹、計七名で山で炭売りをしながら生計を立てていたそう。

だが、小さいながらも幸せな生活は、奴の、鬼舞辻無惨の出現により壊れる。

家族は殺され、禰豆子は無惨の血を浴びて鬼化。任務で来ていた義勇が禰豆子を斬ろうとしたが、炭治郎と禰豆子に何かを感じ取り、刀を下ろした。そして義勇の紹介で鱗滝の元に来た、と。

（——鬼舞辻無惨……）

瑠璃子も鬼殺隊も長年追い求めている正体不明の鬼の頭領。瑠璃子の、両親の仇。

「それで、禰豆子は今寝てるんですけど、町で評判の美人だったんです」

「うんうん」

「きつと起きたら瑠璃子さんとも仲良くなれます。禰豆子は妹だけど、長女だったから、瑠璃子さんみたいなお姉さんが欲しかったと思うんです」

「うん、うん……」

「だから、だからです、ね…」

「炭治郎」

瑠璃子は名前を呼んで、炭治郎を抱きしめた。そつと頭に手を乗せて、胸に顔を押し付ける。

「る、瑠璃子さつ」

「頑張ってる、頑張ってるね」

空いている片手で、炭治郎の背中をぽんぽんと叩く。

「良い子、炭治郎は良い子。ねえ、炭治郎」

——
怖かったね

其の一言で、炭治郎の赤みがかった目からぽろり、と涙が零れた。

そう、怖かった。

家族も殺されて、禰豆子も鬼になって殺されかけて、安心する事が出来なくて、鬼殺隊に入る為に厳しい修行にも耐えて。

—— 本当は、泣き叫びたかった。

「泣きなさい」

「泣いて良いの」

「これから理不尽な目にいっぱい遭うわ」

「でもね 泣く事は決して悪くないの」

「泣いて泣いて泣いたら 笑いなさい」

「そしたらきつと明日は強くなれるわ」

「悲しみも怒りも喜びも糧とし 明日を生きなさい」

「死ぬ為に強くならいで 明日を生きる為に強くなりなさい」

「願いを叶える為に 強くなりなさい」

「私が応援してあげる 励ましてあげる 手を握ってあげる」

「今日はいっぱい泣いて 良いよ」

——
其の日、赫灼の子は瑠璃色の人の腕の中で、泣いた。

*

—— 目を閉じれば、何時でも思い出す。あの愛しき日々。

美しい人だった。

どんな女よりも美しい、正に輝夜姫の化身たる、其の人は『瑠璃色』の瞳をしていた。

白魚の手で触れられるのが好きだった。

桜色の唇から紡がれる言葉が好きだった。

あの、柔らかな笑みが愛しくて愛しくて。

『無惨』

嗚呼、名前を。もっと名前を呼んでほしい。

『無慘、こつちへいらつしやい』

はい、今其方へと向かいます。

『無慘、無慘。私の可愛い無慘。愛しているわ』

ええ、私も愛していますとも。誰よりも貴女を愛しています。

『ねえ、無慘。何時か私を見つけてね』

必ず、見つけます。

そして、今度こそ貴女と永遠を――

――もう二度と、あの手を離すものか――

嗚呼 アレが憎い

!!!!!!!!!!!!!!

アレさえいなければ!!!あの人は私の手を離す事などしなかったのに!!!

憎い憎い憎い
!!!!!!

嗚呼!恨めしや
!!!!

ワ



!!!!!!

第十一話 隠の柱

其の違和感に気づいたのは、瑠璃子が任務へと向かつてから二日目の朝の事だった。

瑠璃子が不在時の場合、海屋敷の管理を任せている獺岳。

昨夜、ふと獺岳の特殊能力の一つ『何時になつたら姉御前がお屋敷に帰ってくるか判る直感』、別名『姉直感あねちよつかん（拗らせとも言う）』が働いた。

むっ、明日の朝には姉御前が帰ってくる気がする。よし、明日は早く起きて、朝食の準備をしよう。むふん。

瑠璃子への愛情やら憧憬やらがブレンドされて、こんなに残念過ぎる能力を身に着けたハイスペック獺岳少年はウキウキしながら、お布団に入り、お休み三秒を決めた（勿論、常中はちゃんとしてる）。

体内時計がきつちりしている獺岳は朝日が昇ると同時に目を覚まし、せつせとお布団を畳んで、顔を洗って、シャツを着た、其の時に気づいた。

「ん……？きつい……？」

少し、腕周りがきつく感じた。着れない事は無いが、ちよつと違和感を感じる。

首を傾げて、黒い隊服も着てみると、

「(…これも、きついな?)」

同じ様に着れない事は無いが、やっぱりちよつときつい。

入隊当時は、身体の成長や負傷の具合に合わせて、何度か修正される事があつた。

成長期特有の成長の早さあつたが、瑠璃子の指導や食事改善等も影響して、桑島氏の元にいた頃よりも、獺岳の体は大きく、筋肉も付いていた。

成長期が落ち着いたのか、ここ最近では隊服修正を行つていなかった事に、其処で気づいた。

「少し修正してもらうか…」

そう呟いて、獺岳は少しだけきつい隊服を着ると、足早に厨房へと向かつていった。

*

「隊服がきつくなつちやつたのね。獺岳は男の子だし、すぐ大きくなるわよね」
「すみません、ご迷惑をお掛けします…」

「いいのよ。むしろ嬉しいわ、獺岳の体がちゃんと成長している事に」

姉直感通り、早朝に帰ってきた瑠璃子。既に朝食の準備が出来ている事に喜びつつ、消化の良い朝食を食べ終わった彼女に獺岳は隊服の相談をした。

申し訳無きそうに謝罪する獺岳とは裏腹に、継子の成長を喜ぶ瑠璃子は「そうだわ」と両手をぱちんと合させた。

「隠の服縫製部ふくほうせいに行きましようか」

「服縫製部と言うと…俺達の隊服の制作を行っている、あの？」

「ええ、私も丁度用があつたの。先刻さつきの任務で、私のスカアトが鬼に切られちゃつて「は？」

途端に獺岳の蟬谷にビキリと血管が浮き上がる。

「鬼に？スカアトを？何処の鬼ですか？姉御前の服を切り裂くなんて万死に値します。ちよつと殺してきます」

「切つた鬼はもういないわよお。私が斬つたし」

「そうですか…」

日輪刀片手に飛び出しかけた獺岳をやんわりと宥めると、瑠璃子は「こんな話を知ってる？」と言つた。

「——隠にもね、柱はしらがあるのよ」

ちくちくちく。一針一針縫っていく。

嗚呼、これでは駄目だ。鬼の爪で簡単に布が裂けてしまう。糸が切れてしまう。もつと強度の高い物を用意しないと。

人の命は簡単に零れる。血塗れの服が、着る人がいなくなった黒衣が帰ってきた時が一番嫌だ。

—— 一瞬で散る其の命を守る為の、少しでも繋ぎ止める為の作業を延々と繰り返す。延々と作り続ける。

例え剣士の才能が無くとも。鬼を滅する才は無くとも。

この手で、命で出来る事はある。

そう教えてくれた人が、いるんだ。

ぼんやりとした淡い灯火だけが、其の部屋で唯一の灯りだった。其の部屋の中で延々と作業をする者が一人。

髪を結び上げ、背に『隠』の文字を背負った其の人は、畳の上に転がった糸や布を拾っては縫い、糸を解いては畳に落とす。

其の作業を何度も繰り返し、失敗しては何度もやり直す光景が、此の部屋の当たり前の日常だった。

とんとん。障子をノックする音が聞こえて、其の者はやつと手を止めた。

「何か用？」

出た声が、甘やかな声。何処となく艶を感じさせる、落ち着いた声だった。

「隊長に修復依頼が来ました。間もなく此方に来られるとの事です」

「何方？今、風柱様の服を直している途中なのだけど」

「海柱の鳴滝瑠璃子様と、継子の桑島獺岳様です」

名前を聞いて、暫く黙ると、「そう」と一言呟いて、針と布を机の上に置いた。

「なら、中に通して頂戴。私が話すわ」

「畏まりました」

「其れと、お茶とお菓子は最高級の物を用意なさい。海柱様には何度もお世話になっているから」

「はっ」

障子の向こうから気配が消えて、先ず一息吐いた。

「そう…海柱様が来るのね。継子を連れて来るなんて初めて。きちんとご挨拶をしないと」

座りつばなしだった足に力を入れて、立ち上がる。

同じ体勢を続けていた所為で、凝り固まった体を軽く動かして解すと、其の者は立ち上がった。

「恩人が来るならば、しゃんとしないかね」

*

—— 『隠には柱がいる』と言う話は、隊内では案外有名である。

正式な柱として数えられている訳では無いが、『隠の長』で『隠柱（かくしばしら）』と呼ばれていると言う単純な話だ。

しかし、気になるのは『一体どんな人物が長なのか？』である。

隠は鬼殺隊の後処理係として、一般人にバレない様、素顔を見せない、顔まで黒衣で隠している。一見すると性別すら判らない時があり、そう言う時は大体声で判別してい

る者も多いだろう。

劍士として向かなかった者がなる事が多いが、一般隊士では出来ない後処理等をしてくれる、有り難い存在。

鬼殺隊の縁の下の力持ちとも呼べる、其の隠達の長はどんな顔なのか、どんな人物かと言われれば――

「其の子はねえ、三年半前だったかしら？ 悲鳴嶼さんと一緒に任務をしてた時に出会ったのだけど、劍士の才能が無い代わりに、当時から服縫製の才能があつて、其の儘、服縫製係の長にも隠の長にもなつちやつた子なのよ」

「では、姉御前とは顔見知りなのですね」

「そう。しかも、頭が良かったから、こうやって『服縫製部の屋敷を表向き店として出して商品を売ってる』のよね」

瑠璃子と獺岳が立っているのは町中にある一軒の店前である。

『加賀屋』と書かれた看板を上げているこの店こそ、鬼殺隊後処理係・隠の『服縫製部』の屋敷だった。

店内を軽く覗くと、色とりどりの服があり、若い少女や妙齡の女性が数名、中で買い物をしていた。

「売り上げの一部はお館様に行っているから、結果として鬼殺隊の為にもなっているの。鬼との戦闘で橋とか道とか壊れた時に使用する修理代とかで」

「成程。……音柱様とか、修理代凄く掛かりそうですからね」

そう言つて、二人の頭の中に思い浮かんだのは、『派手に頸斬つてやる！』と言つて、自身の呼吸で鬼の頸どころか周りの物まで破壊する自称・祭りの神。

彼は話し上手なので、モテると言えばモテるのだが、隠の間では『あの人の担当やだ』『修理代が幾ら掛かつてると思つてんだ』『修理作業で徹夜とか勘弁』等と結構不評なのだ。

「宇髓君は仕方ないわよ。其れよりもそろそろだと思ふのだけど……」

と、瑠璃子が呟くと同時に店の奥から一人、店員らしき男が出てきた。男は人当たりの良い笑みを浮かべたまま、瑠璃子に近づき、言った。

「（注）注文は？」

「日輪の布」

瑠璃子の答えに、店員は笑みを崩さず手で、奥を差した。

「彼方に」

すたすたと歩きだした店員に二人が付いて行く。

奥に通されると、階段があり、上がると、ある一室に着いた。

「どうぞ。加賀様は後で参ります」

「ありがとうございます」

そうして、店員は去り、瑠璃子は襖を開ける。中には机が一つと座布団が四枚。机の上にはお菓子とお茶がちよこんと置かれている。

敷かれた座布団の上に二人は座ると、瑠璃子がお茶に手を付けた。

「さっきの人はね、藤の家紋の家と人と同じく、鬼殺隊に恩があつて、此処で働いているの」

「では、日輪の布とは隠語ですか」

「そう、『鬼殺隊の者です。長に用があつて来ました』と言っているの。この部屋に通されるのは、隠の長である彼女に用がある人間だけだから」

「彼女……?」

と、獺岳が小首を傾げた其の時だった。「失礼します」と言う一言と共に、彼女が入ってきたのは。

「遅れて申し訳御座いません、海柱様、継子・桑島様。ようこそ、服縫製部へ」

入ってきた人物の姿に、獺岳は目を見開いた。

—— 何故なら、入ってきたのはとんでもない美女だったからだ。

腰まである、紫がかつた長髪に眼鏡。

黒い隊服の上からでも判る大きく膨らんだ胸と、際どすぎるスリットが入ったロングスカートをチラチラ見える真白い肌。

きりつとした切れ長の目とぷるりとした紅梅色の柔らかな唇。

全身から溢れ出す、色気と言う色気の爆弾。

—— 如何にも遊郭にいそうな、現代の言葉で言えば十八禁ゲームに出て来そうな、ヤバイくらいに色っぽいキャリアウーマン的な見た目の彼女こそが、隠の長である。

「(隠の長って、女!? 遊郭にいそうな此奴が!?)」

「(こんにちは、紫織ちゃん)」

「(ご機嫌麗しゆう、海柱様。継子を連れて来るとは珍しいですね)」

たつぷんたつぷんと大きな胸を揺らし、中に入って来た隠の長こと紫織は、ちらりと流し目で猿岳を品定めするかの様に見ると瑠璃子達の前に座った。

「桑島様は御越しが初めてでしたね。私、隠の長 兼 服飾部の長を務めております、^{かがしおり}加賀紫織と申します。以後お見知りおきを」

「あ、ああ……どうも」

「其れで、本日はどの様なご用件で？」

「実はね……」

瑠璃子から事情を聞き、切られたスカートを渡された紫織はふむふむと頷いて、破れ具合を確かめた。

「これは……中のフリルまで切られてますね」

瑠璃子のスカートはふんわりとしたパニエ型のロングスカートである。中には多量のフリルが縫われており、中身が見えない。正に『鉄壁』。絶対に見せないと言う鉄の意思を感じる一品だ。

因みにこのスカート、瑠璃子が柱に就任したと聞くや否や、兄である紫陽花が『不埒許さない。妹の貞操を守るのが兄の役目』とハイライトの消えた目で紫織に迫り、作らせたと言う話があったり。

「そうなのよ。爪が鋭い鬼でね？ざっくり切られちゃった」

「成程。この具合でしたら……少し失礼しますね」

紫織は持ってきたトランク型の鞆を机の上に置くと、中を開ける。

鞆の中には、大中小の糸切り鋏が三つ、色とりどりの糸玉が数個、布定規が一つ入っており、あまり見た事の無い道具に獺岳は少しだけ身を乗り出して見てしまった。

其の微笑ましい様子に瑠璃子がふわっと微笑んだ。

「珍しい?」

「あ、はい。こういった服飾の物は馴染みが無いので」

「基本、隊士の方が裁縫道具を見る事も触る事もないでしょう。えっと…傷の長さは…」
布定規で傷の長さを図ると、紫織は頷いた。

「このくらいでしたら、二日でお返しが出来ますね」

「本当?」

「材料が育ちまして、布がそろそろ追加されるので」

「材料が育った?」

紫織は獺岳を見た。

「桑島様は隊服の材料をどこ存知無いですか?」

獺岳は頷いた。

「蚕かいこです。しかも、ただの蚕ではありません。日輪刀を作る際に使用する猩々しょうじょう緋砂鉄ひさてつと、猩々しょうじょう緋鉾石ひこせきが採れる陽光山ようこうざん近くにある森『陽光森』にいる『陽光蚕』が吐く糸こそが、隊服の原材料なのです」

「そうなのか…」

「陽光蚕の糸は強度があり、どこ存知かもしれませんが、雑魚鬼程度の爪ならば通しませ

ん。ただし、やはり下弦や上弦となると如何しても破れてしまうので、現在強度を上げる研究も行っているんです。そうすれば、衝撃等を和らげる事が出来るのですが、中々出来なくて苦勞しているんです」

紫織はお茶を一口飲んだ。

「まあ、此の研究の積み重ねでが評価されて服縫製部隊長となり、今では有り難い事に柱の方から何度か御指名を貰えています」

「紫織ちゃん、頑張ってるもんねえ」

「ありがとうございます。これも、海柱様と岩柱様に拾われたお蔭です。鬼殺隊に入つたお蔭で——」

—— 質の良い筋肉に会えました

其の言葉に、獺岳の顔が引き攣つた。

「……………はっ」

「おや、桑島様は私が『鬼に家族を殺されて、身寄りが無くなった所を助けられた』と思つてましたか？」

凶星を突かれて、獺岳は言葉に詰まった。

紫織は彼の様子を見て、「そんな事は御座いません」と告げた。

「元々、私は天涯孤独の身でして、ぶつちやけてしまえば遊郭にある貧民街出身です。虫は食いましたね。土にいる芋虫は中々の味でした」

其の言葉に獺岳はちよつとだけ親近感を覚えた。自分も同じ様な経験があるからだ。

「其れで暮らしていたんですが、私、遊郭のあれやこれやを長年見ていたら、如何やら特殊性癖になった様で、男性の筋肉に興奮する性質となりました」

「なりましたって……」

「食べ物を求めてフラフラしていたら、鬼のおやつになりかけた所を海柱様と岩柱様に助けられ、恩返しに剣士になろうとしましたが、才が無く、代わりに隠になったら其れはもう最高で」

其処でやつと、紫織の口角が上がった。

「隠になった途端、隊士の方を見ても怪しまれる事は無く、隠れて見ても怪しまれない。質の良い筋肉が育っていく姿を見ていくのが其れはもう楽しくて楽しくて。いい仕事に巡りあえましたよ。其の美しい筋肉を守る為に服の勉強をし続けていたら、服縫製部隊長になって、其の後に隠の長となりました。もう本当に、鳴滝様拾ってくださいありがとうございます」

「気にしないでー」

「(変態だ…無表情の変態が此処に居る…!)」

この変態に引かない姉御前が流石だ…!と戦慄と尊敬をしつつ、獺岳は震えた。

此の後、獺岳は同性の隠に寸法を図ってもらい、後日届いた隊服を着て、あまりの着心地の良さに『(仕事の出来る変態って怖え…)』とまた戦慄する事となる。

*

ある日の事。

紫織は其の日も隊服の修復を行い、やっとお昼を食べようと店を出た時だった。

「さてと、今日は…」

「加賀殿」

其の声に、紫織はバツ!と振り返った。

紫織の後ろに立っていたのは、今日も涙を流し、じやりじやりとなる数珠を持った巨男もとい悲鳴嶼行冥だった。

—— 悲鳴嶼の姿を見た紫織の白い頬に紅が差す。

「い、岩柱様!、こんには!なっ!何か御用でしょうか!」

先日の表情から一変して、頬を紅潮させ、目を煌めかせる紫織の姿は、正に恋する乙女だった。

そんな紫織の様子を気にせずに、悲鳴嶼は「否」と言うとそのつと手を差し伸べた。悲鳴嶼の大きな手には、一つの袋が乗っていた。

「瑠璃子から聞いた。最近徹夜が続いていると。何か甘味を渡して上げると良いと」

「(な、鳴滝様——!!!)」

青い空の向こうで、瑠璃子が微笑んで親指を立てている気がした。

「なので、これを……。気にいると良いのだが……」

「も、勿論！岩柱様から頂けるなんて嬉しいですよ……はあ……」

恐る恐る手に取った袋を見て、紫織の頬が更に紅潮する。

—— あの日、鬼のおやつにされそうだった紫織を救ったのは悲鳴嶼だった。

独特な形をした斧と鉄球型の日輪刀を振振るい、紫織の前に現れた巨人は鬼の頸を刎ねた。

見た事無い光景に呆然としつつも、紫織の目には其の大きな背中が鮮明に見えた。

——なんて、優しい背中なのだろう。

そんな事を思っているとは知らず、悲鳴嶼は振り返り、座り込む紫織を見て、膝を折ると手を差し伸べた。

今でも、紫織の記憶の中で、其の大きな背中と手は色鮮やかに覚えている。

其の後、追いついた瑠璃子の手によって紫織は鬼殺隊への道を進み、其の結果隠となった。其の人生を進ませてくれた瑠璃子への感謝は忘れない。

だって、好きな人の服を、好きな人の体を守る服を作れるのだから。

「いつも、私の服を直してくれて感謝する…」

服を直して渡す度に、何時もそう言ってくれる小さな優しさが、紫織は好きなのだから。

「大事に…食べます…！」

渡された菓子を壊さぬ様、優しく抱え、嬉しそうに言う紫織の言葉に悲鳴嶼は穏やかに微笑んだ。